

松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部（前谷工区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

まえ 谷 B 遺 跡

1990年3月

鹿児島県曾於郡松山町教育委員会

序 文

前谷B遺跡の確認調査は、昭和63年5月16日から6月16日までの間行われ、その結果は「松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」に記述のとおりです。

この調査報告書の序文にも書きましたとおり、地元の強い要望でこの県営畑地帯総合土地改良事業を行うことになったのですが、確認調査の結果、工事の設計変更が生じ、その設計では高い盛り土の箇所が多くあるため改良事業の意義が無くなるばかりでなく、膨大な経費を要するため再検討の結果、全面発掘をして記録保存ということになりました。

全面発掘は、10月24日から12月26日の間行われましたが、確認調査の時の悪天候と打って変わって好天続きで、地面が乾き過ぎて、割れ目ができるほど困る状態が続きました。雨降りも困るが晴天続きも困るものだとということを知りました。

縄文晩期の土器を中心に多くの物が出土しました。3基の土坑は何をするために使われたものだろうかといろいろ想像することでした。

それよりも、地表面からわずかの深さのところ、弥生中期の住居跡が3基並んで現れたのには、こんなところにも昔の集団生活があったのかと驚かされました。この部分だけでも雨よけをしてこのまま保存したいものとの気持ちを抱くことでした。

前に発掘をし、埋め戻し保存されている前谷遺跡の住人と何らかの関係が多かったものと憶測することです。

確認調査の時には気付かなかったのですが、この住居跡の近くにわき水があり、民家で現在も利用しているのが分かりました。遠くの塩御前谷まで行かず近くの水で便利な生活をしているのかも知れません。

いろいろの手だてによって工事も完成し、機械化された農業経営ができるようになったことを感謝しているところです。

最後になりましたが、昊天続きの悪条件の中を精力的に御指導いただいた県教育庁文化課の先生方、直接発掘作業に従事していただいた作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

松山町教育委員会教育長 加世田 實

例 言

- 1、本報告書は、昭和63年度に実施した県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部（前谷工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は県農政部の受託事業として、松山町教育委員会が実施した。
- 3、発掘調査の実施及び実測は、東和幸・富田逸郎・牛ノ濱修・中村耕治・立神次郎がこれを行った。
- 4、発掘調査の現場写真・遺物写真は東和幸が撮影した。
- 5、本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
- 6、遺物の水洗・注記・拓本等の整理作業は重富収蔵庫で行った。
- 7、遺構・遺物の実測・トレースは東和幸・牛ノ濱修・富田逸郎が行った。
- 8、傾きが不明の土器については、基準線を引いていない。
- 9、本書に記録した遺物番号はすべて続き番号とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 10、発掘調査の際、用いた「2号住居跡」は欠番とし、「3号住居跡」「4号住居跡」「5号住居跡」を本書ではそれぞれ「2号住居跡」「3号住居跡」「3号土坑」として説明する。
- 11、石器の執筆は牛ノ濱修・富田逸郎が行い文末に文責を記した。他の執筆・編集は東和幸が行った。
- 12、出土遺物は松山町歴史民俗資料館で展示・公開する予定である。

本文目次

序文

例言

目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過 1

第2節 調査の組織 1

第3節 調査の経過 2

第2章 遺跡の位置及び環境 4

第3章 発掘調査

第1節 調査の概要 8

第2節 土層 13

第3節 縄文時代の遺構 14

第4節 弥生時代の遺構 19

第5節 縄文時代の土器 28

第6節 弥生時代の土器 41

第7節 古墳時代の土器 47

第8節 その他の土器 50

第9節 石器 62

第4章 考察 66

第5章 まとめ 67

挿図目次

第1図 松山町内の遺跡 4	第13図 2号住居跡(2) 24
第2図 前谷B遺跡の位置及び地形 ... 9	第14図 3号住居跡(1) 26
第3図 発掘の範囲 10	第15図 3号住居跡(2) 27
第4図 前谷B遺跡全図 11	第16図 縄文土器出土状況 29
第5図 基準土層図 13	第17図 出土遺物(1) 30
第6図 縄文時代遺構配置図 15	第18図 出土遺物(2) 31
第7図 1号・2号土坑 16	第19図 出土遺物(3) 32
第8図 3号土坑(1) 17	第20図 出土遺物(4) 33
第9図 3号土坑(2) 18	第21図 出土遺物(5) 34
第10図 弥生時代遺構配置図 20	第22図 出土遺物(6) 35
第11図 1号住居跡 21	第23図 出土遺物(7) 36
第12図 2号住居跡(1) 23	第24図 出土遺物(8) 37
	第25図 出土遺物(9) 38

第26図	出土遺物 (10)	39	図版4	発掘風景	72
第27図	出土遺物 (11)	40	図版5	遺物出土状況	73
第28図	弥生土器出土状況	42	図版6	近世溝	74
第29図	出土遺物 (12)	43	図版7	1号・2号土坑	75
第30図	出土遺物 (13)	44	図版8	3号土坑 (1)	76
第31図	出土遺物 (14)	45	図版9	3号土坑 (2)	77
第32図	出土遺物 (15)	46	図版10	1号住居跡 (1)	78
第33図	出土遺物 (16)	47	図版11	1号住居跡 (2)	79
第34図	古墳時代の土器出土状況	48	図版12	1号住居跡 (3)	80
第35図	出土遺物 (17)	49	図版13	2号住居跡 (1)	81
第36図	出土遺物 (18)	50	図版14	2号住居跡 (2)	82
第37図	時期不明の土器出土状況	51	図版15	2号住居跡 (3)	83
第38図	出土遺物 (19)	52	図版16	3号住居跡 (1)	84
第39図	出土遺物 (20)	53	図版17	3号住居跡 (2)	85
第40図	出土遺物 (21)	54	図版18	3号住居跡 (3)	86
第41図	出土遺物 (22)	55	図版19	出土遺物 (1)	87
第42図	出土遺物 (23)	63	図版20	出土遺物 (2)	88
第43図	出土遺物 (24)	64	図版21	出土遺物 (3)	89
第44図	出土遺物 (25)	65	図版22	出土遺物 (4)	90
第45図	前谷B遺跡のタイムスケール	67	図版23	出土遺物 (5)	91

表 目 次

表1	遺跡地名表 (1)	5	図版24	出土遺物 (6)	92
表2	遺跡地名表 (2)	6	図版25	出土遺物 (7)	93
表3	遺跡地名表 (3)	7	図版26	出土遺物 (8)	94
表4	土器観察表 (1)	56	図版27	出土遺物 (9)	95
表5	土器観察表 (2)	57	図版28	出土遺物 (10)	96
表6	土器観察表 (3)	58	図版29	出土遺物 (11)	97
表7	土器観察表 (4)	59	図版30	出土遺物 (12)	98
表8	土器観察表 (5)	60	図版31	出土遺物 (13)	99
表9	土器観察表 (6)	61	図版32	出土遺物 (14)	100
表10	石器観察表	62			

図 版 目 次

図版1	69
図版2	70
図版3	前谷B遺跡全景 71

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、曾於郡松山町仮屋工区・前谷工区において畑地帯総合土地改良事業を計画し、実施計画区域に置ける埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会（文化課）に照会した。

文化課は昭和61年5月に分布調査を実施したところ、昭和63年度実施予定区域内に前谷B遺跡の存在していることが確認された。

この結果、県農政部農地整備課（大隅耕地事務所）、県文化課、松山町教育委員会は協議を行い、事業の推進と埋蔵文化財の保護との調整を図るため、昭和63年度に国・県の補助を得て、松山町教育委員会が確認調査を実施した。調査期間は昭和63年5月16日から同年6月16日までであった。

確認調査の結果を踏まえて、三者が再度協議を行ったところ、現状のまま遺跡を保存することは施工上支障が生じるため、遺跡区域の全面発掘調査を実施し記録保存を図ることにした。

発掘調査は、松山町教育委員会が調査主体となり、調査員の派遣を鹿児島県教育庁文化課に依頼した。発掘調査は昭和63年10月24日から昭和63年12月26日まで実施し、整理及び報告書作成は平成元年度に行った。

第2節 調査の組織

調査主体者	松山町教育委員会			
調査責任者	松山町教育委員会	教 育 長	加世田	實
調査事務担当	〃	社会教育課長	吉 元	俊彦
	〃	主 事	永 田	史生
	〃	〃	津 曲	兼隆
	〃	〃	上 原	登
調査担当	鹿児島県教育庁文化課	主 事	東	和幸
	〃	主 査	牛ノ濱	修
	〃	文化財研究員	富 田	逸郎
	〃	主 査	立 神	次郎
	〃	主 査	中 村	耕治

なお発掘調査中、鹿児島県文化財保護審議会委員 河口貞徳氏・鹿児島大学法文学部教授 上村俊雄氏・同助手 本田道輝氏・鹿児島県教育庁文化課埋蔵文化財係長 吉元正幸氏に発掘の指導を受けた。

第3節 調査の経過

月 日	天気	作 業 内 容
10月24日(月)	小 雨	道具の搬入。作業の開始。
10月25日(火)	晴 れ	J-15区周辺の重機による表土剥ぎ、及び精査。
10月26日(水)	晴 れ	J-15区周辺の重機による表土剥ぎ、及び精査。 G-16区周辺の重機による表土剥ぎ。
10月27日(木)	晴 れ	J-15区周辺のⅡ層掘り下げ。杭打ち。
10月28日(金)	晴 れ	K-16区周辺のⅡ層掘り下げ。I-18区周辺の重機による表土剥ぎ。
10月31日(月)	晴 れ	I-18区周辺の精査、及び芋穴掘り。K-16区周辺の遺物取り上げ。K-16区周辺の溝、及び芋穴掘り。G-16区周辺の重機による表土剥ぎ。
11月1日(火)	晴 れ	K-16区周辺のⅢ層検出。H-16区周辺の重機による表土剥ぎ、及び精査。
11月2日(水)	晴 れ	幹線道路部分の重機による表土剥ぎ。J-17区周辺のⅢ層検出。G-16区周辺の芋穴掘り、及びⅢ層検出。財部町教育委員会見学。
11月8日(火)	晴 れ	幹線道路部分精査、及び溝掘り。杭打ち。K-24区周辺の重機による表土剥ぎ。L-19周辺の重機による表土剥ぎ。
11月9日(水)	晴 れ	H-19区の溝断面精査、及び写真撮影。L-19区の精査。1号住居跡確認。K-24区周辺の精査。
11月10日(木)	晴 れ	L-20区周辺の精査。K-19区溝の精査、及び写真撮影。1号住居跡検出面写真撮影。
11月11日(金)	晴 れ	N-28区周辺の作物撤去。
11月14日(月)	晴 れ	J-12区周辺の雑木撤去。
11月15日(火)	曇 り	N-27区周辺の重機による表土剥ぎ、及び精査。稗ヶ迫遺跡の表土剥ぎ開始。鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳先生視察。
11月16日(水)	曇 り	K-21区周辺の精査。稗ヶ迫遺跡の重機による表土剥ぎ。
11月17日(木)	雨	J-12区周辺の雑木撤去。遺物の水洗い。
11月18日(金)	晴 れ	N-28区周辺の精査、及び芋穴掘り。1号住居跡発掘、及び平面実測。
11月21日(月)	晴 れ	J-22区周辺の精査。1号住居跡発掘。稗ヶ迫遺跡から縄文中期土器出土。
11月22日(火)	晴 れ	J-12区周辺のトレンチ発掘。1号住居跡発掘。稗ヶ迫遺跡の土器を実測して作業終了。
11月24日(水)	晴 れ	J-12区周辺のトレンチ発掘。1号住居跡セクション実測、写真撮影、ベルト発掘。
11月25日(金)	晴 れ	J-12区周辺のトレンチ発掘。1号住居跡ベルト発掘。遠景撮影。
11月28日(月)	晴 れ	J-12区周辺の精査。1号住居跡遺物取り上げ、及び平面実測。遺物取り上げ。

月 日	天気	作 業 内 容
11月29日(火)	晴 れ	J-12区、I-15区周辺の遺物取り上げ。N-27区周辺の発掘。1号住居跡の柱穴検出と断ち割り。
11月30日(水)	晴 れ	N-27区周辺の調査。1号住居跡断ち割り断面実測。遺物取り上げ。
12月1日(木)	晴 れ	N-27区周辺の発掘。1号住居跡断ち割り。J-12区周辺の重機による剥ぎ取り。
12月5日(月)	晴 れ	M-28区、O-21区周辺の重機による表土剥ぎ。M-17区周辺のトレンチ調査。O-21区周辺の精査。遺物取り上げ。
12月6日(火)	晴 れ	O-21区周辺の調査。2号住居跡発見。遺物取り上げ。
12月7日(水)	晴 れ	O-21区周辺の発掘。2号住居・3号住居跡の検出と写真撮影。H-19区溝断面実測。遺物取り上げ。
12月8日(木)	晴 れ	O-21区周辺の精査。2号・3号住居跡平面実測。遺物取り上げ。M-28区周辺終了。
12月9日(金)	晴 れ	1号住居柱穴実測。J-12区周辺の拡張。3号土坑確認。
12月10日(土)	晴 れ	N-22区周辺の重機による剥ぎ取り。
12月12日(月)	晴 れ	N-22区周辺の発掘。J-16区周辺のⅢ層発掘。
12月13日(火)	晴 れ	2号・3号住居跡発掘。遺物取り上げ。
12月14日(水)	晴 れ	2号・3号住居跡の発掘。2号土坑実測。3号土坑発掘。遺物取り上げ。
12月15日(木)	晴 れ	2号・3号住居跡遺物実測。遺物取り上げ。3号土坑発掘。コンタ測量。鹿児島大学上村俊雄教授・本田道輝助手現地指導。
12月16日(金)	晴 れ	2号・3号住居跡写真撮影。3号土坑遺物実測。鹿児島大学上村俊雄教授・本田道輝助手現地指導。
12月19日(月)	晴 れ	K-13区周辺の発掘。L-18区周辺発掘。O-22区周辺の掘り下げ。2号土坑の調査。3号土坑遺物取り上げ。2号・3号住居跡の平面及び断面実測。
12月20日(火)	晴 れ	2号・3号住居跡土壌サンプリング。2号土坑実測。L-16区の調査。遺物取り上げ。
12月21日(水)	晴 れ	2号・3号住居跡周辺の清掃。空中撮影。L-16区発掘。2号・3号住居跡床面検出状況撮影・鹿児島県文化財保護審議委員河口貞徳先生現地指導。松山町立泰野小学校全校児童遺跡見学。
12月22日(木)	晴 れ	2号・3号住居跡断ち割り。L-16区発掘及び実測。O-22区の発掘。
12月23日(金)	晴 れ	2号・3号住居跡柱穴確認。3号土坑発掘。1号・2号土坑精査
12月24日(土)	晴 れ	2号・3号住居跡柱穴実測及び写真撮影。3号土坑実測及び写真撮影。1号・2号土坑写真撮影。現場の後かたづけ。
12月26日(月)	晴 れ	発掘用具の後かたづけ。作業終了。

第2章 遺跡の位置及び環境

前谷B遺跡のある松山町は、大隅半島曾於郡のほぼ中央部に位置し、東西に細長く東西12km、南北4kmである。東は志布志町、西は末吉町、大隅町、南は有明町・志布志町、北は末吉町に境している。

経緯度は東経13度から13度7分、北緯31度37分で、町総面積は49.69K²であり、山岳は末吉町に境する宮田山(520m)、有明町に境する霧岳(408m)が主な丘陵で、河川は大隅町岩川から新橋河床を経て、町の西端を流れる菱田川上流と、尾野見排水東端と大統東端を流れる安楽川の支流が主な河川である。

前谷B遺跡は松山町大字泰野小字前谷にあり、町立泰野小学校の南約1kmのところの位置している。霧岳東部が北側へ延びる裾部の西側斜面に立地しており、標高は172m～175mを測る。東側には豊富な湧水があり付近の水田用水として利用されている。縄文時代中期の住居跡5基が発見された前谷遺跡からは直線距離にして300mの位置にある。

前谷遺跡では縄文時代の住居跡の他、弥生時代の住居跡1基、歴史時代の建物跡4棟が検出されている。また、近くには「堀ノ内」・「京ノ峯」・「堂下」といった山城や寺院の名残を残す地名があり、歴史的にも古くから栄えていた地域であることが窺える。



第1図 松山町内の遺跡

表1 遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	時代						遺構・遺物	文献	
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世
67-1	宇都谷	新橋字宇都谷		○						前平式	1
67-2	宇都D	新橋字宇都		○					○	吉田式黒曜石土器器 須恵器	1
67-3	砂田A	新橋字砂田		○						石坂式黒曜石押型文 石鏃	1
67-4	中村	尾野見字中村		○						前平式	
67-5	下迫C	新橋字下迫		○						塞ノ神式姫島産黒曜石	1
67-6	榎之俣	新橋字榎之俣		○						塞ノ神式	
67-7	砂田D	新橋字砂田		○	○				○	轟式	
67-8	稗ヶ迫C	新橋字稗ヶ迫		○	○					轟式・岩崎式・土師器	3
67-9	内野野C	泰野字内野野		○						塞ノ神式・打製石斧	
67-10	前ノ谷	泰野字堀ノ内		○							
67-11	公会堂上	新橋字公会堂上		○						塞ノ神式	
67-12	狩川B	新橋字狩川		○						阿高式・敲石	
67-13	松山	新橋字松山		○						阿高式・御領石 磨製石斧・敲石	
67-14	入道久保A	新橋字入道久保		○						阿高式石斧	
67-15	内野野B	泰野見字内野野		○						阿高式・磨製石斧 凹石・石皿	
67-16	郷田	泰野見字郷田		○						阿高式・磨製石斧 凹石・石皿	
67-17	蛇山ノ谷	尾野見字蛇山ノ谷		○	○					石匙・打製石器	
67-18	垂門A	新橋字垂門		○						市来式	
67-19	下迫A	新橋字下迫		○	○				○	御領式・土師器	1
67-20	堀口	新橋字堀口		○					○	御領式・石鏃・青磁	1
67-21	河床	新橋字河床		○							
67-22	宇都A	新橋字宇都								松山式・石皿	
67-23	宇都B	新橋字宇都		○					○	須恵器	
67-24	宇都C	新橋字宇都		○						岩崎上層式	1
67-25	中村迫	新橋字中村迫		○					○	石皿・打製石器・土師器 器・須恵器	4
67-26	山ノ田	新橋字山ノ谷		○					○	早期・松山式・土師器	1
67-27	後谷A	新橋字後谷		○						指宿式	
67-28	上ノ原	新橋字上ノ原		○						綾式・岩崎上層式	
67-29	入道久保A	新橋字入道久保		○	○					打製石器	
67-30	飯屋	新橋字飯屋		○					○	土師器	
67-31	稗ヶ迫A	新橋字稗ヶ迫		○					○	御領式・土師器	
67-32	中山A	新橋字中山		○						黒曜石	1
67-33	堀之内	泰野字堀ノ内		○					○	市来式・黒曜石・土市器	1
67-34	黒石崎	尾野見字黒石崎		○						出水式・敲石・石剣	
67-35	井手段Ⅲ	尾野見字中村井手段		○						岩崎上層式	

表2 遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	時代						遺構・遺物	文献	
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世
67-36	百田	新橋字百田		○						上加世田式・打製石斧	1
67-37	横溝	新橋字垂門 横溝		○				○		磨製石斧・土師器	1
67-38	牧ノ原 B	新橋字牧之原		○				○			
67-39	大原	新橋字大原		○	○			○		入来式・土師器	
67-40	後ノ谷	新橋字後谷		○				○		土師器	
67-41	水流知	新橋字水流知		○				○		土師器	
67-42	蕨野	新橋字蕨野		○				○		土師器・打製石斧	1
67-43	入道久保 B	新橋字仮屋		○				○		土師器・須恵器	
67-44	稗ヶ迫 B	新橋字稗ヶ迫		○						石斧・岩崎式・弥生壺	3
67-45	中山 B	新橋字中山		○	○					入来式	1
67-46	黒石 II	尾野見字黒石		○							
67-47	牧ノ段	新橋字牧ノ段		○							
67-48	井手間	新橋字井手間		○	○		○			押型文・弥生住居	4
67-49	梨木	新橋字梨木		○				○		土師器・青磁・鉄滓	
67-50	大窪 B	新橋字大窪垂門		○				○		土師器	
67-51	後谷 B	新橋字後谷		○							
67-52	前ノ谷	新橋字後谷		○							
67-53	前谷	新橋字前谷		○	○			○		春日式・住居跡・掘立	2
67-54	砂田 C	新橋字砂田		○				○		土師器	1
67-55	黒石 I	尾野見字黒石		○							
67-56	豊留	新橋字豊留				○				打製石斧	
67-57	大窪 A	新橋字大窪				○					1
67-58	狩川 A	新橋字狩川				○				打製石斧・磨製石斧・ 敲石	
67-59	内野野 A	泰野字内野野				○				石斧・石鋏	
67-60	柿木瀬戸	泰野字柿木瀬戸				○				打製石斧	
67-61	六日畑	尾野見字六日畑				○				山ノ口式・打製石斧	
67-62	中村手岡	尾野見字中村手岡				○				打製石斧	
67-63	鳩窪	尾野見字鳩窪				○				山ノ口式	
67-64	井手段 I	尾野見字中村井手段				○					
67-65	砂田 B	新橋字砂田				○					
67-66	川路	新橋字川路				○				打製石斧・石弾	
67-67	栗須田	新橋字栗須田				○					
67-68	尾野見	尾野見				○					
67-69	桐ノ木	尾野見字桐ノ木				○					
67-70	瀬戸地下式 横穴	泰野字柿木瀬戸					○			地下式横穴	

表3 遺跡地名表 (3)

番号	遺跡名	所在地	時代						遺構・遺物	文献	
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世
67-71	竹下	新橋字竹下						○		土師器, 須恵器・青磁	1
67-72	四ツ枝	新橋字四ツ枝						○		土師器, 須恵器・青磁	
67-73	垂門C	新橋字垂門						○		土師器	
67-74	下迫B	新橋字下迫						○		土師器	
67-75	牧ノ原A	新橋字牧ノ原						○		土師器	
67-76	豊留	新橋字豊留						○		板碑	
67-77	後谷C	新橋字後谷									
67-78	狩川C	新橋字狩川						○		須恵器	
67-79	清水迫	新橋字清水迫						○		土師器	
67-80	川東	泰野字川東						○		土師器須恵器	
67-81	豊留	新橋字豊留							○	田之神像	
67-82	垂門B	新橋字垂門			○			○		土師器	
67-83	前之窪	新橋字前之窪			○			○		土師器	1
67-84	泰野城跡	新橋字前之窪									
67-85	松山城跡	新橋字松尾								文治4年(1188年) 隠岐守重頼築城松山 川要害地	
67-86	錢ヶ迫一里塚	桃木錢ヶ迫									
67-87	柏木門四郎の墓	尾之見									
67-88	尾之見一里塚	尾之見									
67-89	泰野の石当	泰野									
67-90	馬場の唐申塔	新橋馬場									
67-91	豊留の田の神像	新橋馬場									
67-92	豊留の板碑	新橋馬場									
67-93	前谷B	泰野		○	○	○				縄文晩土坑・弥生住居	本文

文献

1. 鹿児島埋蔵文化財発掘調査報告書(29)『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報-昭和58年度-』
1984. 3 鹿児島県教育委員会
2. 松山町埋蔵文化財調査報告書(1)『前谷遺跡』 1986. 3 松山町教育委員会
3. 松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)『稗ヶ迫B遺跡・稗ヶ迫C遺跡・前谷B遺跡』
1989. 3 松山町教育委員会
4. 松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)『井出間遺跡・山ノ田遺跡』
1989. 3 松山町教育委員会

第3章 発掘調査

第1節 調査の概要

第5号幹線道路のセンターラインと第3号支線道路の交点を基準とし10m×10mのグリッドを設定した。遺跡の範囲と考えられる北西端から始まって、東側へA・B・C・・・、南側へは1・2・3・・・とし、J-9区・O-23区などに表示した。確認調査において遺物包含層がはっきりしている場所は全面調査を実施し、それ以外の箇所も試掘トレンチを設定し、遺物の残る範囲は拡張しながら調査した。発掘調査を行った総面積は6820㎡である。

調査の結果、遺跡として確認したほぼ全範囲から遺物が認められた。しかし、後世に耕作や造成などにより削平された箇所の遺物包含層は残っていなかった。特に削平が著しかったのはE-12区周辺とM-24区周辺であった。逆に削平されずに遺物包含層が残っている区域からは多くの遺物が出土した。このことから、当時の生活は丘陵地全体で営まれていたと考えられる。遺物の総数はおよそ3000点にのぼる。主体となるのは縄文時代晩期（今からおよそ2500年前）に相当するものと、弥生時代中期（今からおよそ2000年前）に相当するもの、古墳時代後半（今からおよそ1500年前）のものである。以下時代を分けて概略を説明する。

縄文時代晩期

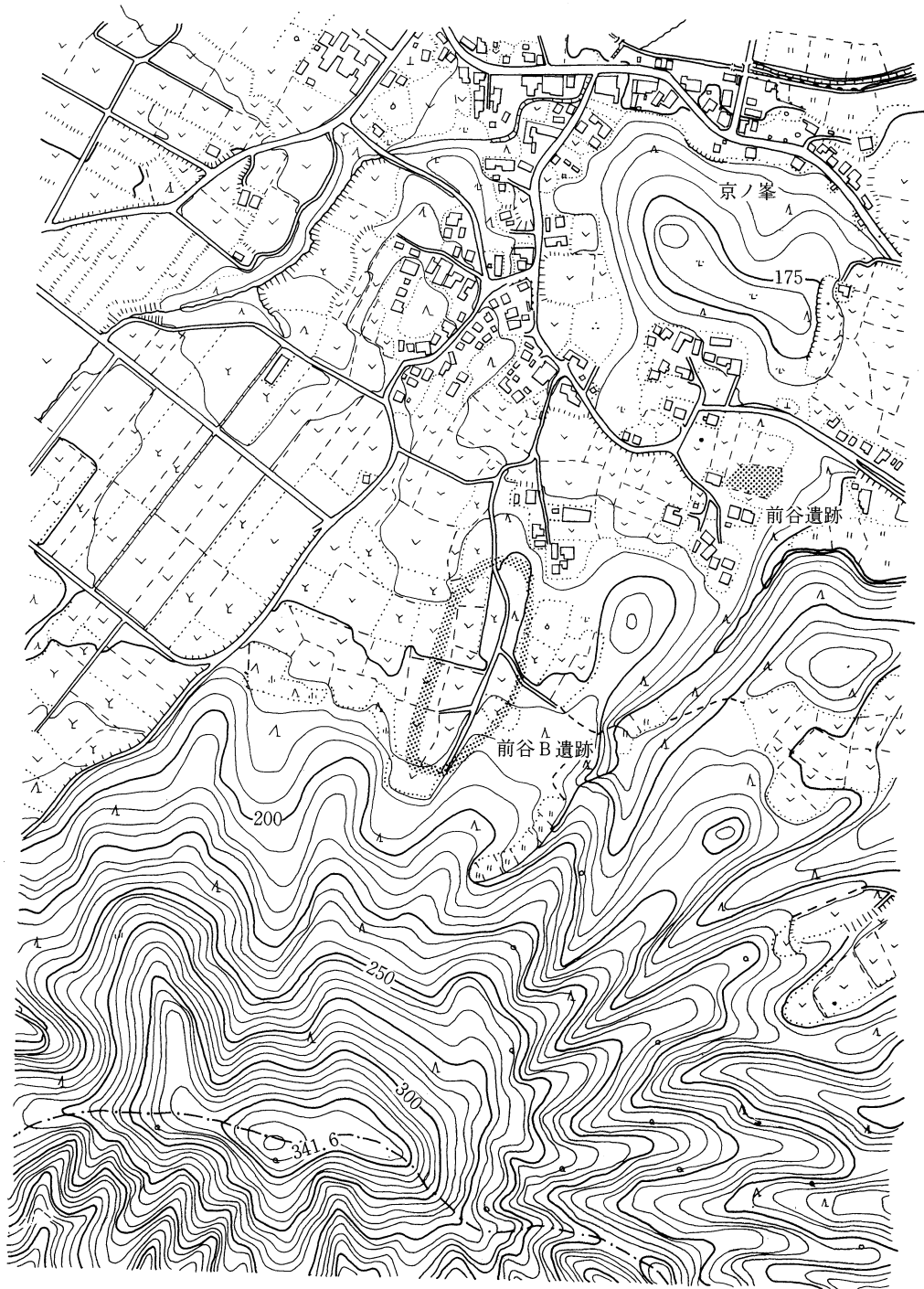
遺跡のほぼ全域から遺物が出土する。特に集中する区域はI・J-14～20区の範囲である。土器は深鉢形と研磨された浅鉢形土器がみられる。石器は石鎌・石斧・凹石・石匙が出土した。土地に掘り込まれた施設として3基の遺構が認められた。1号・2号土坑は近接し、形状も類似している。平面形は直径1メートルの円形を成し深さは50センチ前後である。埋土から土器や石片が出土する。3号土坑は直径2.5メートルの円形を成し、中央部をさらに掘りくぼめ深さは1.5メートルを測る。埋土はレンズ状に堆積し、中程には焼土がみられる。遺物は焼土から上位に隙間なく堆積している。中央の掘り込み部分からはなんの遺物も出土しなかった。

弥生時代中期

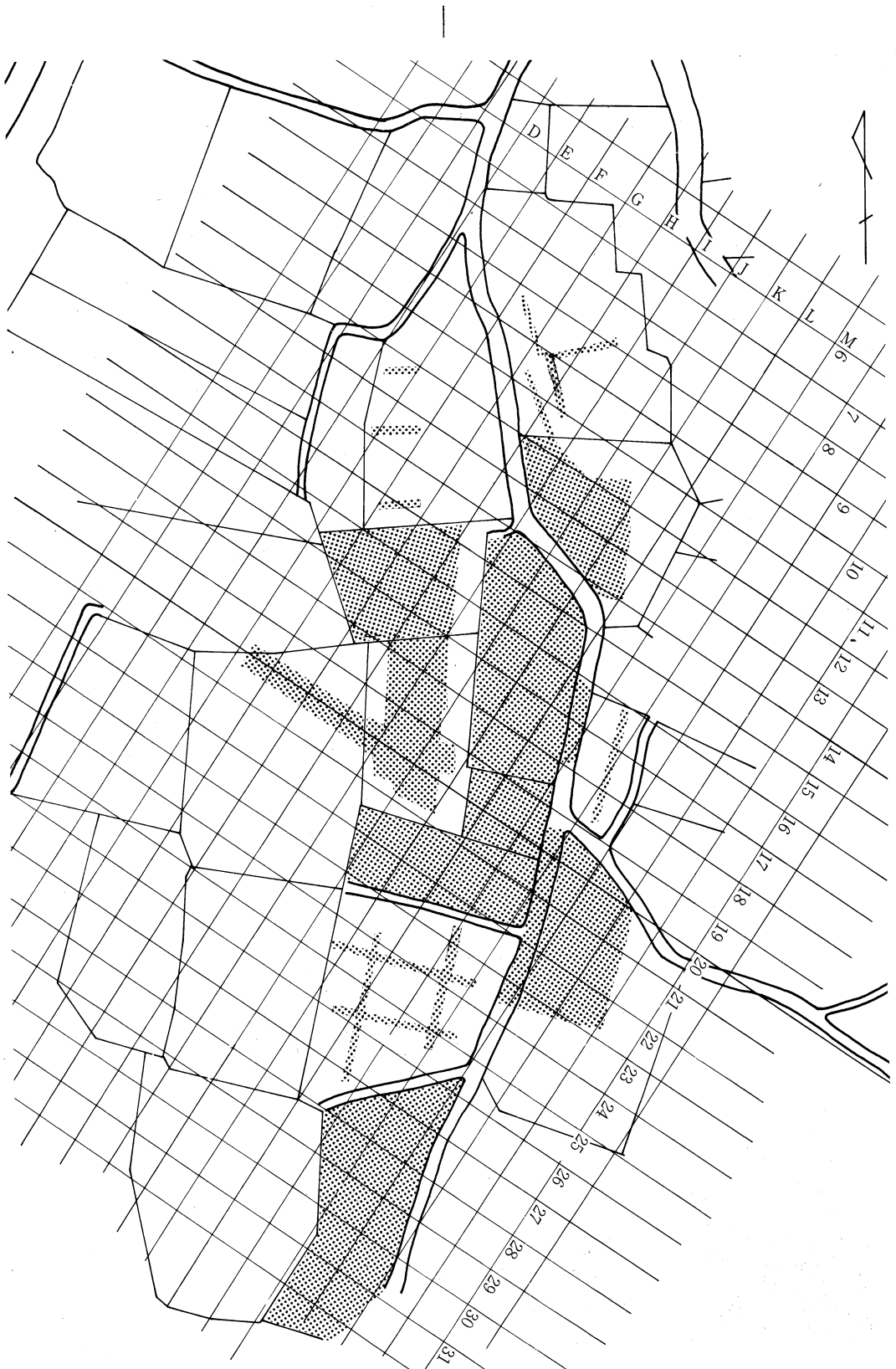
縄文時代晩期が出土するⅢ層よりも遺物包含層は上位にあるため削平を受けずに残っている範囲はせまい。良好に残っているのは、L・M-19・20区及び、N～Q-20～24区の範囲で確認された。L-20区とO-22区では包含層が厚く特に遺物が集中していた。土器は甕形土器と壺形土器がみられ、石器には磨製石鎌がみられた。遺構は10メートルの間隔において3基の住居跡が発見された。いずれの住居跡も平面形は方形で、2本の柱と張り出し部を備える。

古墳時代

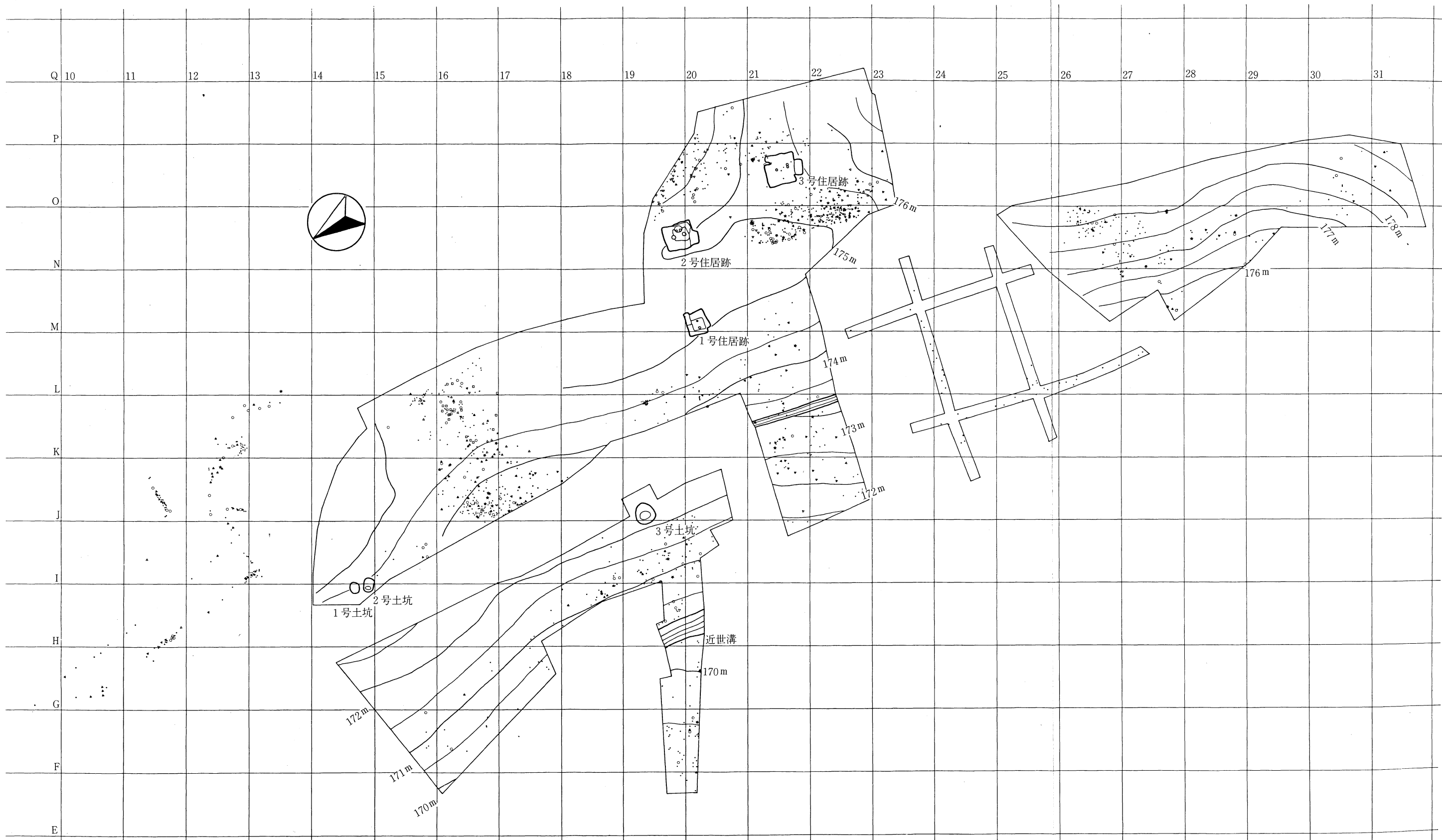
Ⅱ層の黒色土が残っているK-16区に集中した。土器片のみで遺構等はなかった。土器も他の時代のものとは識別が難しく、キザミのある突帯で区別できる程度であった。



第2図 前谷B遺跡の位置及び地形



第3図 発掘の範囲



第4図 前谷B遺跡全図

第2節 土層

広い範囲に及ぶ調査であり、部分的に異なる場所もみられたが、基本的には概ね図に示した通りである。確認調査においてⅢ b層以下には遺物包含層は発見できなかったことから、実際に発掘調査したのは遺物包含層のⅢ a層までであった。これまで周辺地域で行われた結果も含めてⅢ b層以下の層の記述も行う。本遺跡ではⅣ層以下をはっきり区別することは困難であり、弥生時代の住居跡が掘り込まれていた層はアカホヤとその下のⅥ層に該当するチョコ層であった。

I 層：耕作土。概ね10 cm前後の厚さである。部分的には大正年間の桜島の噴火によるシラスもみられる。H-19区から発見された近世溝の埋土にもシラスがレンズ状に堆積しており、噴火当時までくぼみとして残っていたことが窺える。

II 層：黒褐色軟質土。粒子は揃っている。残っている範囲は限られ、K-16区では最下部に古墳時代の遺物を包含する。

Ⅲ a層：暗黄褐色軟質土。時間が経過すると次第に黒く変色する。ほとんどの範囲で、すでに削平されており、5 cm程度の厚さしかない。Ⅲ b層との境に弥生時代中期と縄文時代晩期の遺物を包含する。

Ⅲ b層：黄褐色土。御池ボラ層あるいはⅢ c層であるアカホヤの腐食土である。締りがあって硬い。本遺跡では50 cm前後の厚さである。

Ⅲ c層：橙褐色軽石。およそ6千3百年前のアカホヤ層に比定される。ブロック状にしか残っていない。

Ⅳ a層：茶褐色土。やや灰色に近い部分が斑状に含まれる。

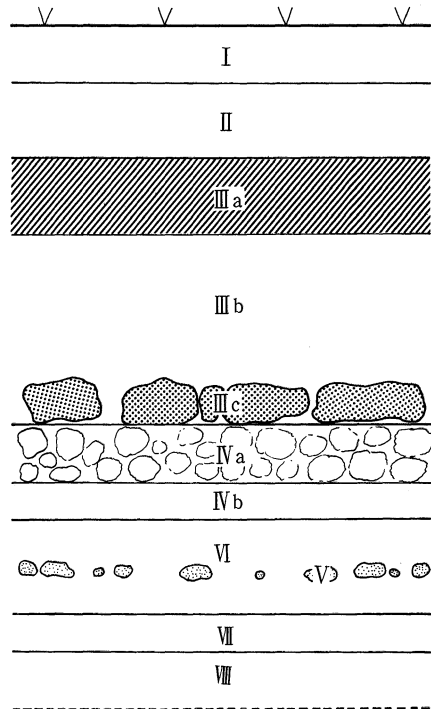
Ⅳ b層：Ⅳ a層からⅥ層への漸移層である。

V 層：白黄褐色粘質土。およそ1万1千年前の薩摩層に比定される。

Ⅵ 層：黒褐色土。しまりがあって、硬い。層の上部にV層の薩摩層を挟む。V層の上下は区別できないが、V層の直下辺りが最も濃い色をしている。

Ⅶ 層：白黄色をしたシルト質の層で、やや粘質を帯びる。緻密にしまっているが、軟らかい。

Ⅷ 層：黄白色シラス。粒子はⅦ層よりも細かい。黄色味が強く、ブロック状になった部分も見られる。およそ2万2千年前の入戸火砕流に比定される。



第5図 基準土層図

第3節 縄文時代の遺構

西側に開けた斜面に3基の土坑を検出した。1号土坑と2号土坑は接して並び、3号土坑は南へ48m離れた地点にある。土坑以外の住居跡等は発見できなかった。

1号土坑

確認調査の時点で検出したものであり、今回は全形を明らかにした。底面の標高は174mである。検出面での平面形は1m60cm×1m34cmの楕円形を成し、深さは60cmを測る。埋土はⅢa層及びⅢb層に近いもので検出には手間取ったものの、遺物が出土することと、わずかな硬さの違いから全形を出した。

土坑内には土器と礫が出土した。

2号土坑

2号土坑は1号土坑の南側60cmのところに並んで検出された。底面の標高は174mである。検出面での平面形は2m30cm×1m66cmの楕円形を成す。深さは東側が20cm前後で、西寄り是一段低く28cmの深さである。埋土はⅢa層と同様の暗黄茶褐色を呈し、周辺との区別到手間取った。1号土坑と比較すると、シャープな掘り込みではなく壁面は緩やかに立ち上がる。また1号土坑よりも遺物は少ない。底面に10cm大の礫がおかれるのは1号土坑と共通する。

3号土坑

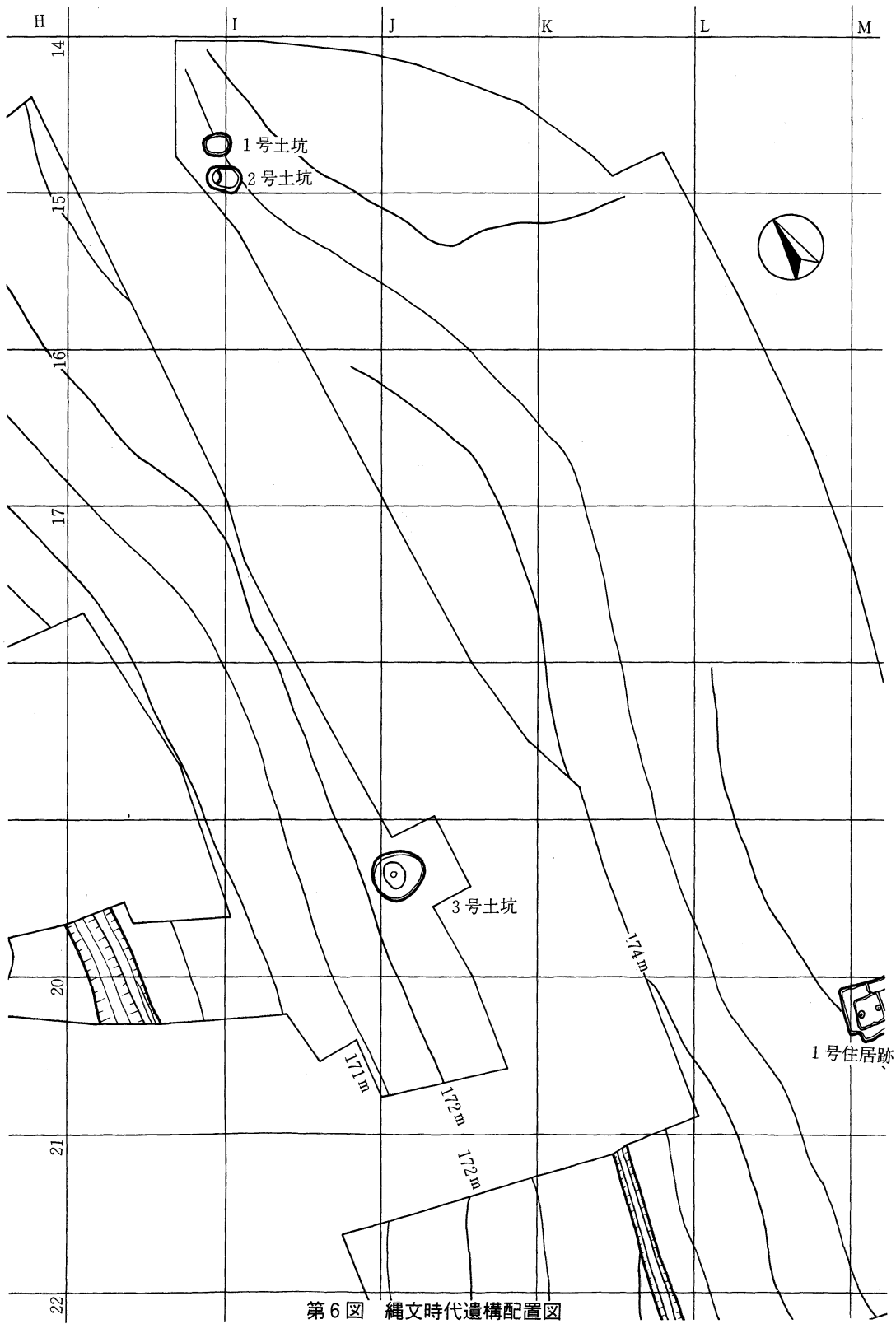
J-19区にあり、検出面の標高は172.15mを測る。表土を剥した時点で多くの遺物が出土し、周辺と土の色が異なっていた。中心部の土は黒茶褐色を呈し、はっきり区別できたが、次の暗黄茶褐色土は周辺のⅢb層に類似しており、平面で遺構の全形を知ることはできなかった。したがってベルトを残して中心部から掘り下げて遺物の包含を確認しながら発掘してゆく方法をとった。

平面形は東西3m28cm×南北3mの卵形をなす。10cmの深さで一段掘り下げられ、中央に東西1m25cm×南北1m70cm・深さ1m2cmの掘り込みがある。

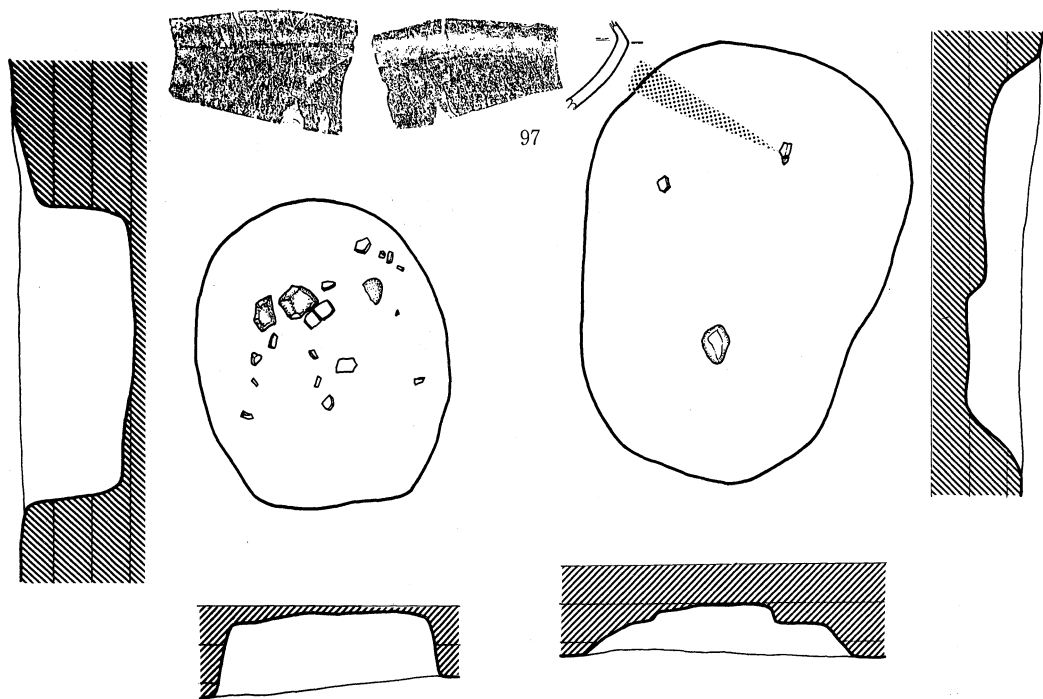
埋土は最上部が粒子のそろった黒茶褐色土で、硬くしまっている。次が暗黄茶褐色土でありⅢb層に類似している。下部になるにしたがって炭が多くみられる。層の途中に焼土を挟む。焼土は明橙色を呈し、砂みためにサラサラしている。かなりの熱を受けているものとする。12cmの厚さをもち、レンズ状に堆積する。遺物はすべてこの層までに包含される。最下層は暗黄褐色を呈し、粒子が粗く締りが無い。

遺物は土坑内から土器と黒耀石片が多量に出土した。317の打製石斧は表土直下の出土であり、3号土坑に確実に伴うものかどうかははっきりしなかった。黒耀石片で製品になるものは304のみで、他は剥片石器として使われたかどうかとも判断し兼ねる。土器片の多くは細かな破片だけで全形を知ることができるものはない。

土壌サンプリング：第8図のように土坑中央部分の土壌を10cmの幅で柱状サンプリングを行った。ラベル表示は検出面から下へ①・②・③・・・として取り上げた。今回の整理作業中には科学的な分析を行うまでにはいたらなかった。

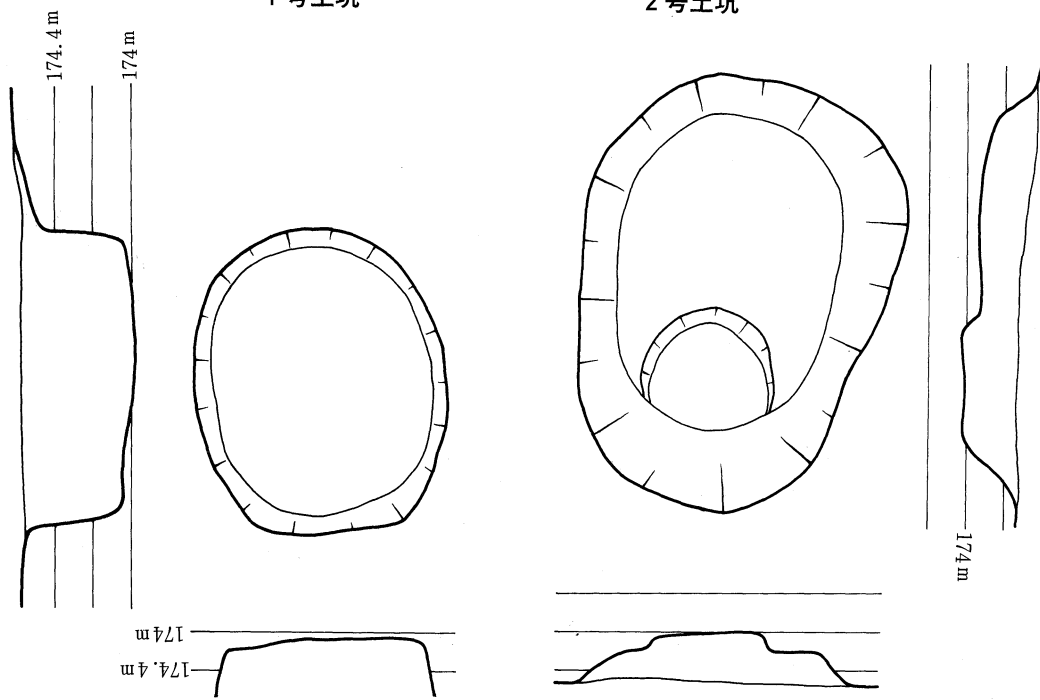


第6図 縄文時代遺構配置図

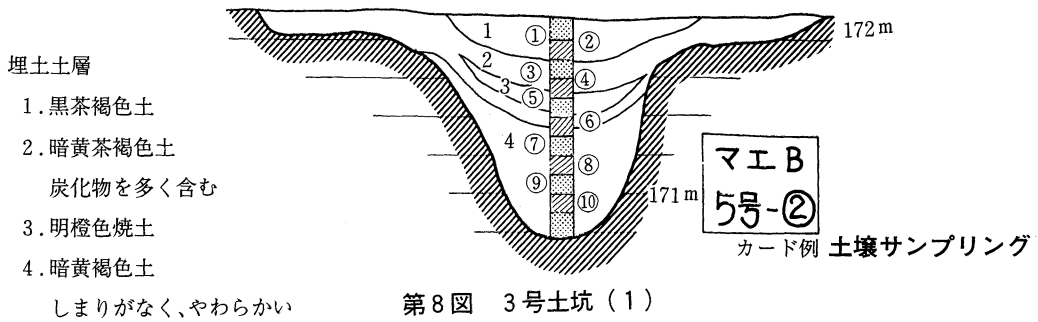
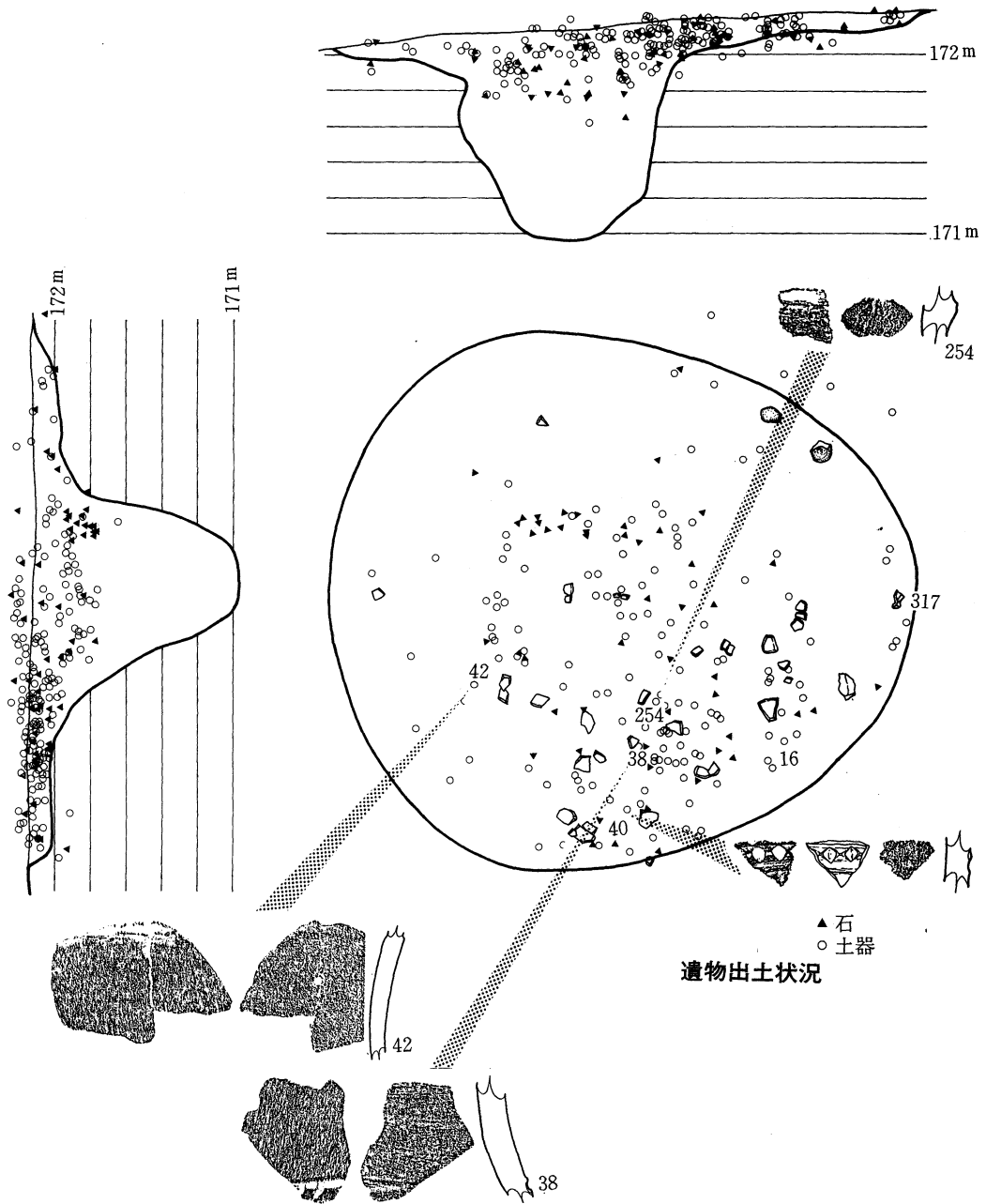


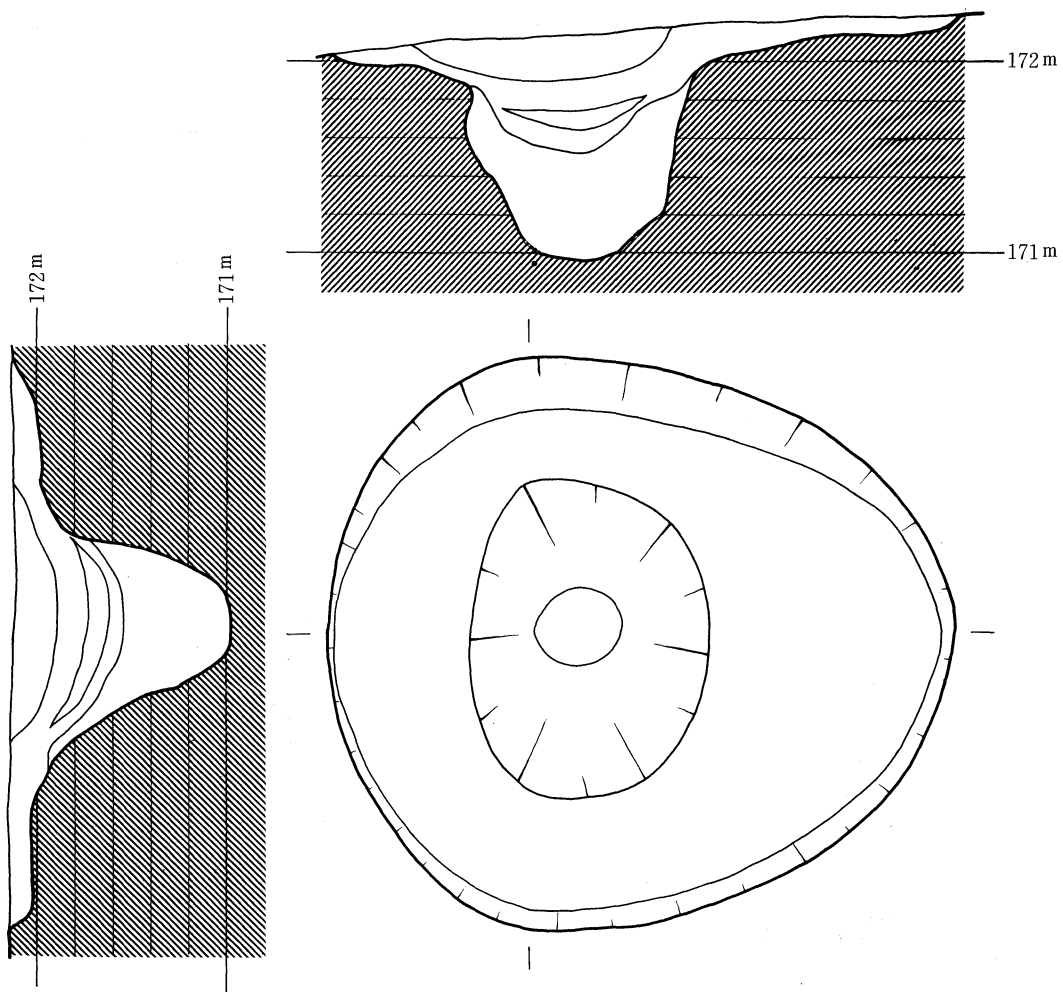
1号土坑

2号土坑



第7图 1号·2号土坑





第9图 3号土坑(2)

第4節 弥生時代の遺構

丘陵の最も高い部分のわずかな平坦面に3基の住居跡が検出できた。それぞれの距離が10m～20mの間隔であり、同時期に併存していたことが考えられる。確認調査で検出したO-20区の方形ピットは掘り込みラインがⅢa層よりも上位にあり、確認調査で検出したもの以外に確認できなかったため、住居跡とは関係のないものと判断した。

1号住居跡

位置：M-20区から検出され、3基の住居跡では最も北西に位置する。床面の標高は174.96mである。

検出：表土である耕作土を重機を使って剥ぎ取った後、アカホヤ面で精査し検出した。埋土を平面で見ると中央に1m50cm×1m92cmのほぼ円形にⅡ層の黒色土がある。その周りは3m40cm×3m16cmのほぼ円形に茶褐色粘質土が堆積する。住居跡の壁面と間の土はアカホヤのブロックを多くふくむ明茶褐色土である。

平面形：基本的には3m72cm×3m68cmの方形である。北東隅が張り出すのに対し、南西隅は意識的に掘り残してある。東西幅は北側3m66cm・張り出し部中央3m84cm・南側3m20cmである。東側の南北壁は両側とも若干内側へ幅が狭くなる。

住居内：壁はほぼ垂直に掘り込まれる。検出面から床面までの深さは30cmを測る。中央には一段深い掘り込みが検出され、床面からの深さはさらに34cmを測る。遺物はわずかの破片のみで、日用品によって当時生活していたそのままの様子を窺い知ることはできなかった。

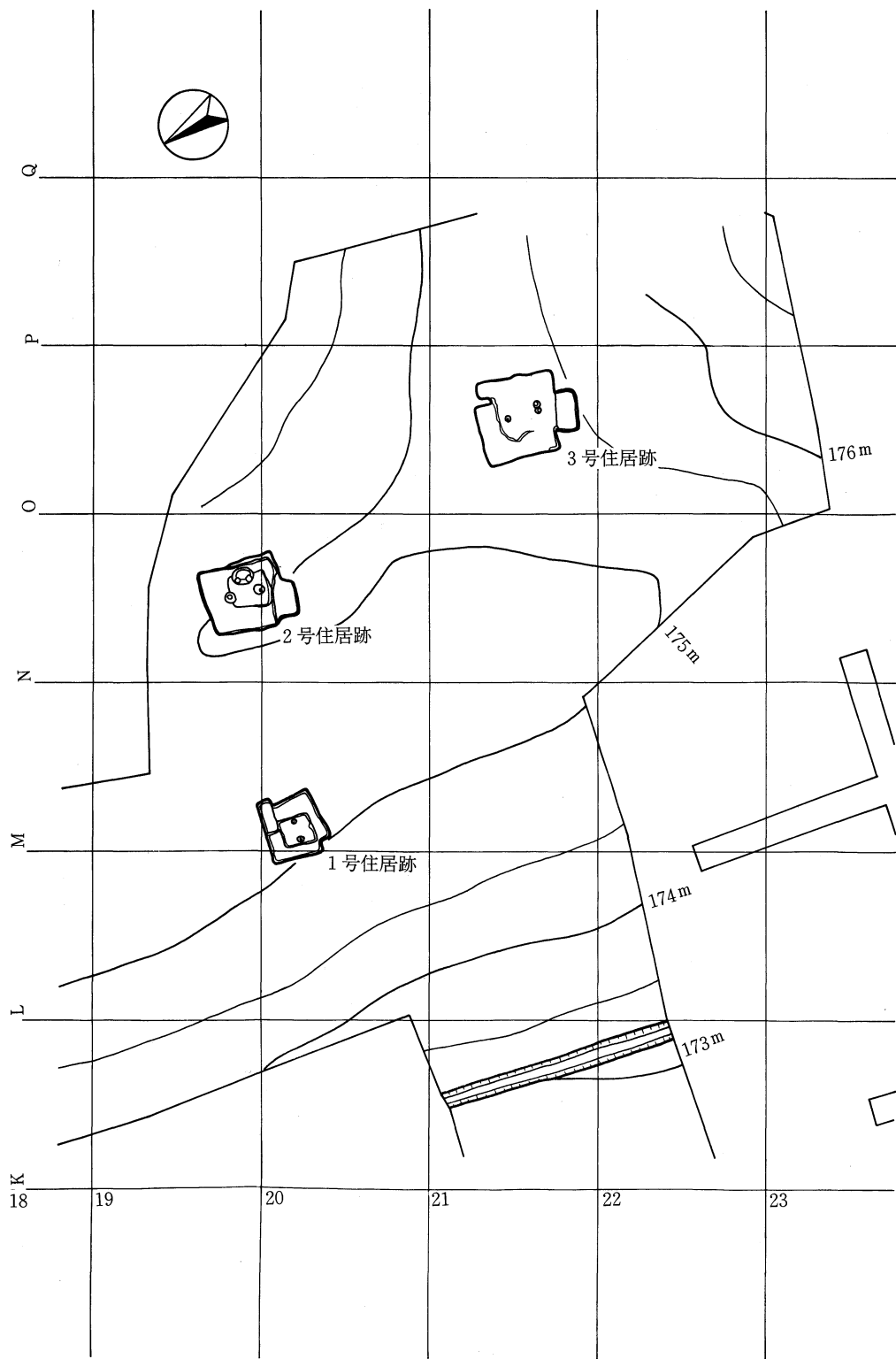
張り出し部：北東隅の張り出し部は床面よりも15cm前後高くなり、東西幅1m84cm・南北幅88cmである。東側壁面よりも外側へ54cm張り出す。床面には掘り込み等はみられず、平坦面である。

突出壁：南西隅にあるコーナーの突出である。突出壁といえは間隙りのように壁の一部分が突出するのが一般的であるので、コーナーの突出については名称を考えた方がよいのかもしれない。西側壁から72cm・南側壁から50cm突出する。

床面：中央の方形掘り込みを除くと貼り床などはみられなかった。床面と同レベルの方形掘り込みの層はb層に白色の粒子が混入し、硬くしまっている。その下には炭を多く含んだ層がある。北半分では床面からの延長とも受け止められるが、この面が床面であったかどうかは判断しかねる。

方形掘り込み：住居内中央に1m88cm×1m74cmの方形の掘り込みをもつ。堆積土はアカホヤとチョコ層の混土で軟らかい。その上の層は掘り込み内だけが硬くしまっている。

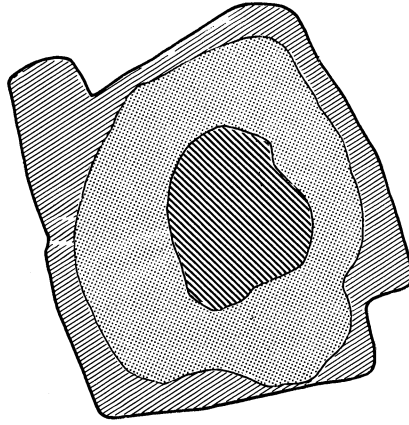
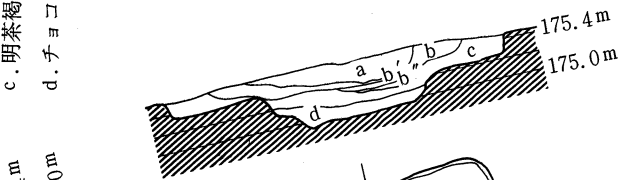
柱穴：主柱穴は中央部東西方向に2つ並び、方形掘り込みの壁際にある。西側壁間1m20cm・柱穴間1m20cm・東側壁間1m30cmを測る。ボーリング棒を使って先に調べておけばよかったのであるが、方形掘り込みを掘り上げた後に確認した。柱痕も残り、ブロック状の土を使って根固めをしている様子も観察できた。両方の柱穴とも床面からの深さは76cm・方形掘り込み底からは44cmを測る。



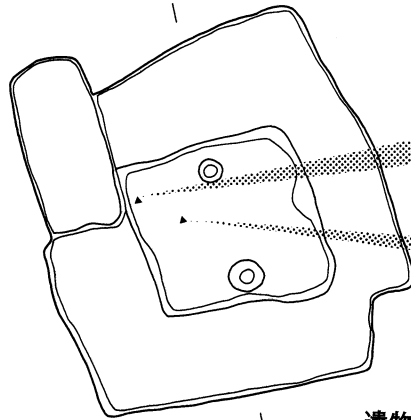
第10図 弥生時代遺構配置図

埋土土層

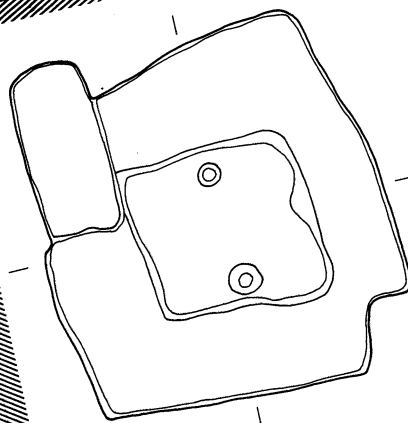
- a. 黒色土
- b. 茶褐色粘質土
- b'. b層に白色細粒子
- b''. b層に炭化物が多く含まれる
- c. 明茶褐色土
- d. チョココ層とアカホヤの混土



検出面



遺物出土状況



掘り込み面

第11図 1号住居跡

2号住居跡

位置：2号住居跡は、1号住居跡の南東14m、3号住居跡の北20mの所に位置し、床面の標高は174.52mである。

検出：表土である耕作土を重機を使って剥ぎ取った後、アカホヤ面で精査し検出した。3ヶ所に現代の芋穴があり、住居跡を壊している。また北側にも後世の掘り返しがみられた。埋土を平面で見ると、中央に3m10cm×2m80cmのほぼ円形にアカホヤの大きなブロックを含む暗茶褐色粘質土が堆積し、その周りはやや黒っぽい粘質土である。

平面形：基本的には4m80cm×4m10cmの方形である。北側の東西幅は3m83cmで、東側壁が北から1m90cmの所で14cmほど外側へ張り出し、南側の東西幅は4m20cmとなる。南北幅は東側で4m55cm・中央部4m77cm・張り出し部5m35cm・西側3m88cmを測る。

住居内：壁はほぼ垂直に掘り込まれる。検出面から床面までの深さは42cmを測る。黒色土とブロック状のアカホヤとの混土である埋土を掘り下げてゆくと、一旦硬く踏み固められた面がみられる。この面を当時使用していた床面であると考えた。遺物は検出時の面には50点と多くみられるが、埋土内には3点しかなかった。東側沿いの段は床面からの高さが16cm・幅は18cm前後である。この段は東側壁が外側へ張り出す部分から南側の張り出し部まで続いている。

張り出し部：南側壁面の西寄りにつき、南側壁から東側70cm・西側1m10cmとほぼ方形に張り出す。床面からの高さ16cm・奥行きは1m40cm・東西幅2m6cmを測る。掘り込み等はみられず、平坦面である。

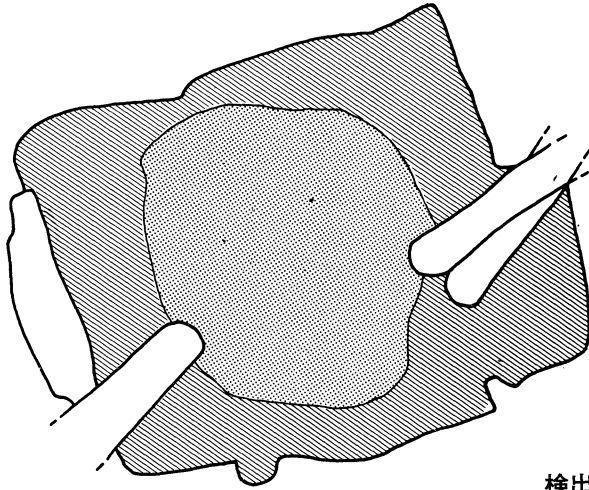
床面：床面はほぼ水平であるが、北東隅が若干高くなる。東側中央の掘り込み部分は、他の所より土の締りがなく床面をはっきり捉えることが困難であった。床面を検出した時点での平面では柱穴を検出することはできなかったが、ボーリング棒を使って柱穴の所在を確認した。

掘り込み面：第12図の遺物出土図にある中央の方形落ち込みは、掘り込み面でもなく、床面のように硬く絞ってもいない。埋土と掘り込み面の土とのちょうど中間的な土であり、西側のラインははっきりするが、南東北のラインははっきり捉えることができなかった。床面から15cmの深さを持ち、南北幅2m40cm・東西幅2m10cmの方形の落ち込みである。

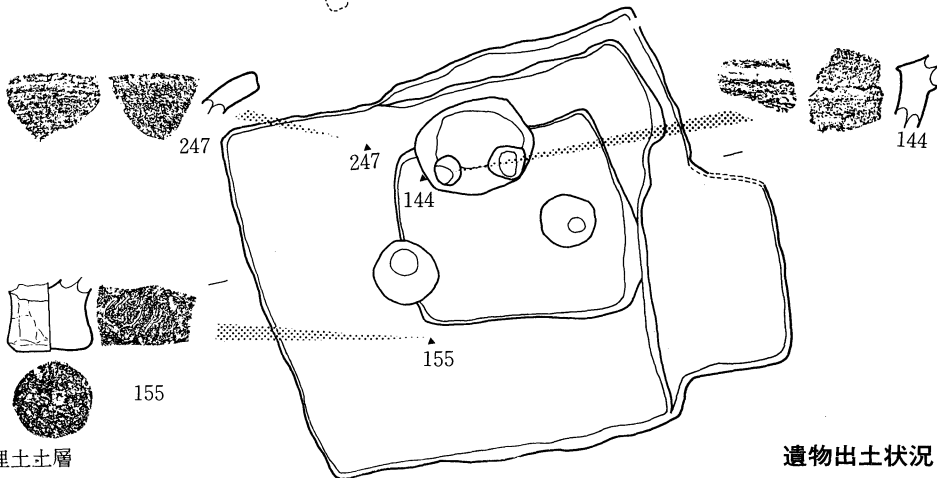
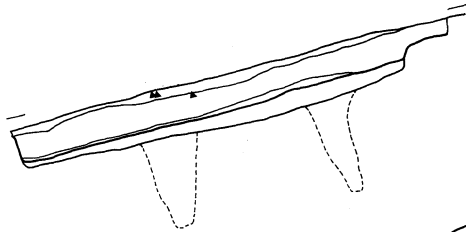
床面から掘り込み面までの厚さはおよそ20cm前後である。掘り込み面は、アカホヤ層より下のチョコ層まで達し、床面までをアカホヤのブロックとチョコ層のブロックを混ぜ合わせて硬く締めてある。

柱穴：主柱穴は中央部南北方向に2つ並び、北側壁間1m60cm・柱穴間1m80cm・南側壁間2mを測る。北側柱穴は掘り込み面での直径が68cm・床面からの深さ91cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。南側柱穴は掘り込み面での直径が58cm・床面からの深さ96cmを測る。

東側中央にある掘り込みは1m24cm×96cmの楕円形を成し、床面からの深さは20cmを測る。この掘り込みの西側寄りに2つの柱穴がある。柱穴間は70cmを測る。北側の柱穴は直径27cm・深さ31cmを測り、南側の柱穴は直径37cm・深さ41cmを測る。2つの柱穴とも東側に傾斜し、しかもお互い向かい合って掘られており、柱は外側へ傾き上部では交わっていたと考えられる。



検出面



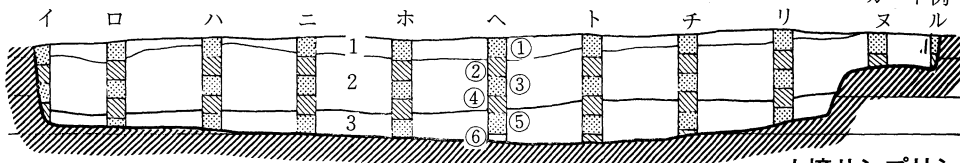
埋土土層

遺物出土状況

1. 黒褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. チョコ層とアカホヤの混土
しまりがあって、かたい。

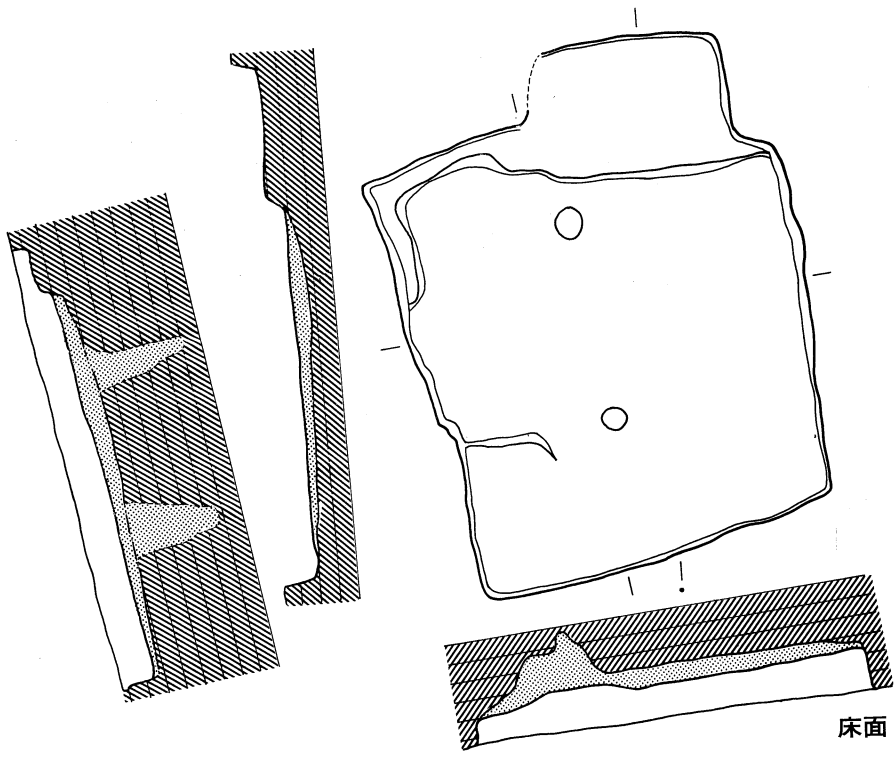
マIB3号
ホ-④

カード例
ヌル

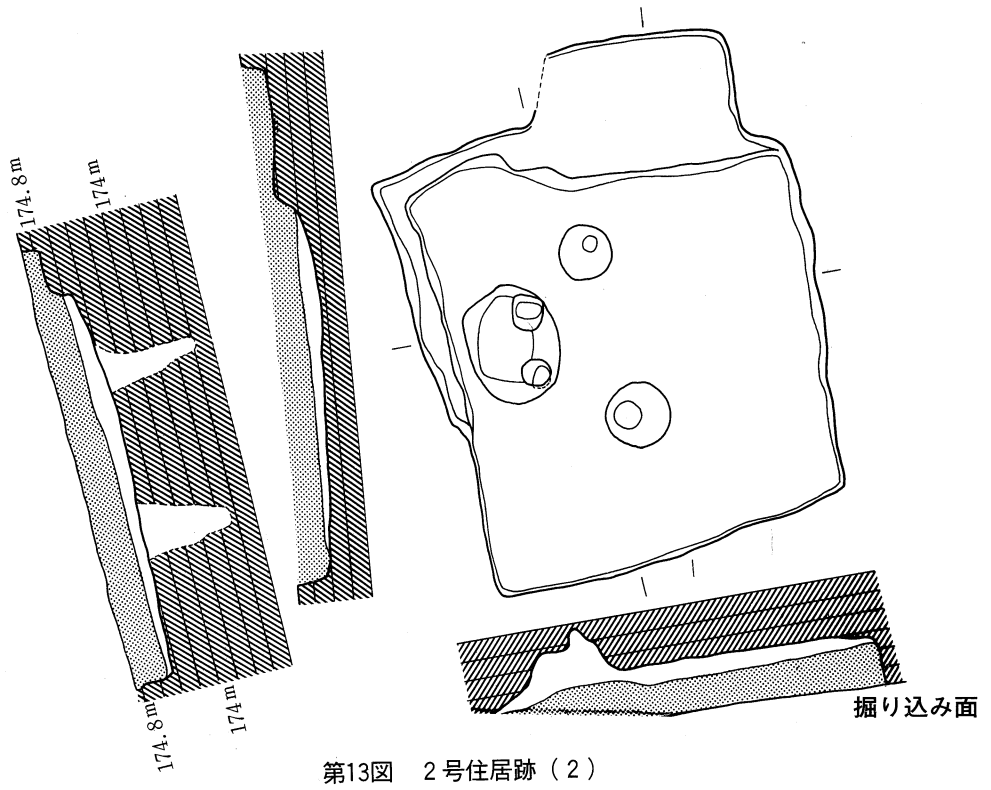


土壤サンプリング

第12図 2号住居跡



床面



掘り込み面

第13図 2号住居跡(2)

3号住居跡

位置：3号住居跡は、2号住居跡の南20mの所に位置し、床面の標高は174.94mである。

検出：表土である耕作土を重機を使って剥ぎ取った後、アカホヤ面で精査し検出した。2ヶ所に現代の芋穴があり、住居跡を壊している。また北側にも後世の畑境溝がみられた。埋土を平面で見ると、南東寄りに2m×2mのほぼ円形にアカホヤの大きなブロックを含む暗茶褐色粘質土が堆積し、その周りはやや黒っぽい粘質土である。

平面形：基本的には4m92cm×4m80cmの方形である。北東隅に突出壁があり、南側に張り出し部がつく。張り出し部を含めた南北幅は6mになる。

住居内：壁はほぼ垂直に掘り込まれる。検出面から床面までの深さは42cmを測る。黒色土とブロック状のアカホヤとの混土である埋土を掘り下げてゆくと、一旦硬く踏み固められた面がみられる。この面を当時使用していた床面であると考えた。遺物は埋土内には数点しかなかった。南西隅の壁沿いには幅8cm・高さ15cmの段がみられる。焼土や炭化物を多く含んだ層は確認できず、炉となる施設は住居内にはなかったと考える。

張り出し部：床面からの高さ28cm・奥行きは1m30cm・東西幅2m44cmを測る。検出面から16cmのところの硬い面がある。この床面を掘り下げると、中央部がくぼむ掘り込みがある。埋土は黒色土とⅢb層ブロックとの混土であり、締りがなく軟らかかった。

突出壁：東壁から1m20cmのところ南北長1m20cm・幅30cmの意識的な掘り残しがある。突出壁の両側は他の掘り込み面よりも一段高くなっている。

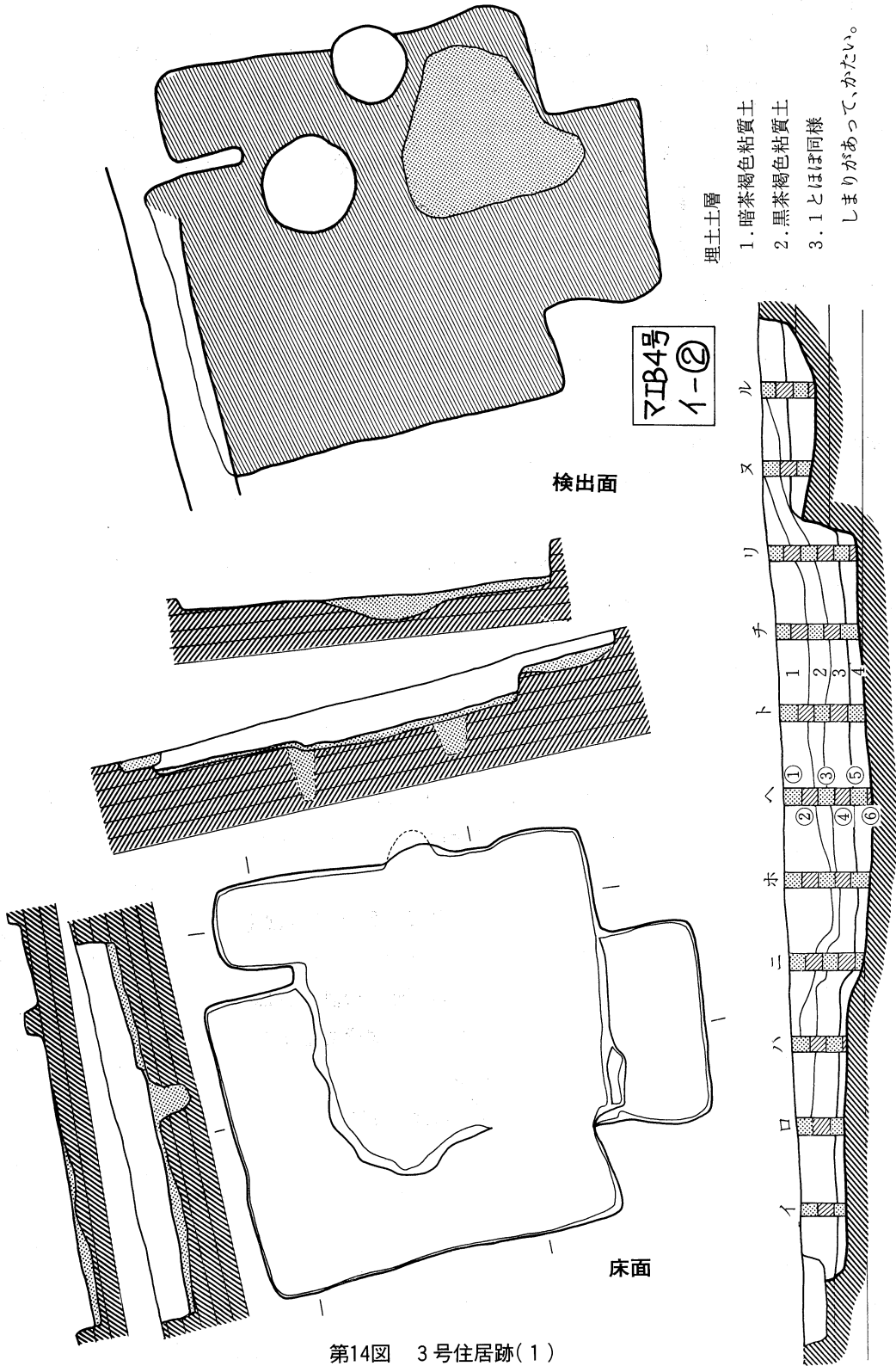
床面：床面は南側が低く、北側と西側が若干高くなる。床面を検出した時点での平面では柱穴を検出することはできなかったが、ボーリング棒を使って柱穴の所在を確認した。

掘り込み面：床面から掘り込み面までの厚さは10cm前後である。掘り込み面は、アカホヤ層より下のチョコ層まで達し、床面までをアカホヤのブロックとチョコ層のブロックを混ぜ合わせて硬く締めてある。

柱穴：主柱穴は中央部南北方向に2つ並び、南側では2つの柱穴が接して検出された。前後関係は明かにできなかったが、同時に2つあったとは考えにくい。北側壁間1m80cm・柱穴間2m・南側壁間2m20cmを測る。北側柱穴は掘り込み面での直径が32cm・床面からの深さ63cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。南側柱穴はどちらも同規模で掘り込み面での直径が40cm・床面からの深さ45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁内掘り込み：東側壁面に正面形が半月形になる奥行き20cmの掘り込みが確認できた。平面形は現代の芋穴と重なっていたが、埋土自体が全く住居内のものと同一であることから、住居に附属する施設であると考ええる。前面には1m×1m20cmの楕円形をした深さ15cmの浅いくぼみが確認できた。

土壌サンプリング：第14図のように南北のベルト部分を左右は50cmおきに、上下は10cmの幅で柱状サンプリングを行った。北から南へイ・ロ・ハ・・・、検出面から下へ①・②・③・・・として取り上げた。今回の整理作業中には科学的な分析を行うまでにはいたらなかった。



埋土土層

- 1. 暗茶褐色粘質土
- 2. 黒茶褐色粘質土
- 3. 1とほぼ同様

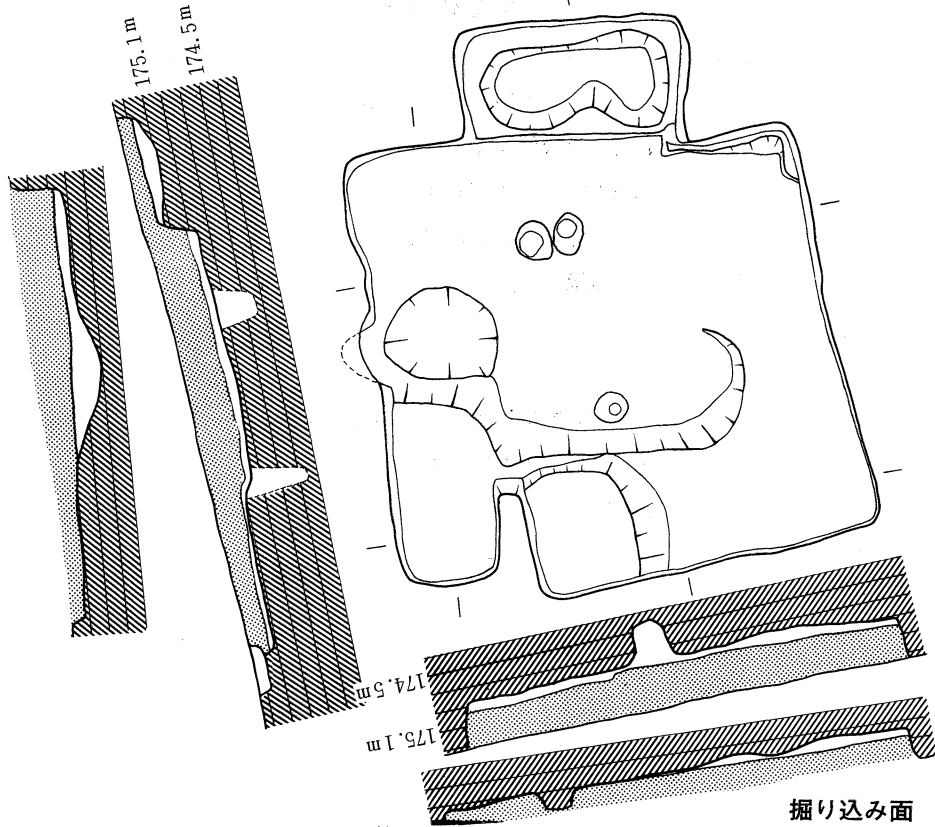
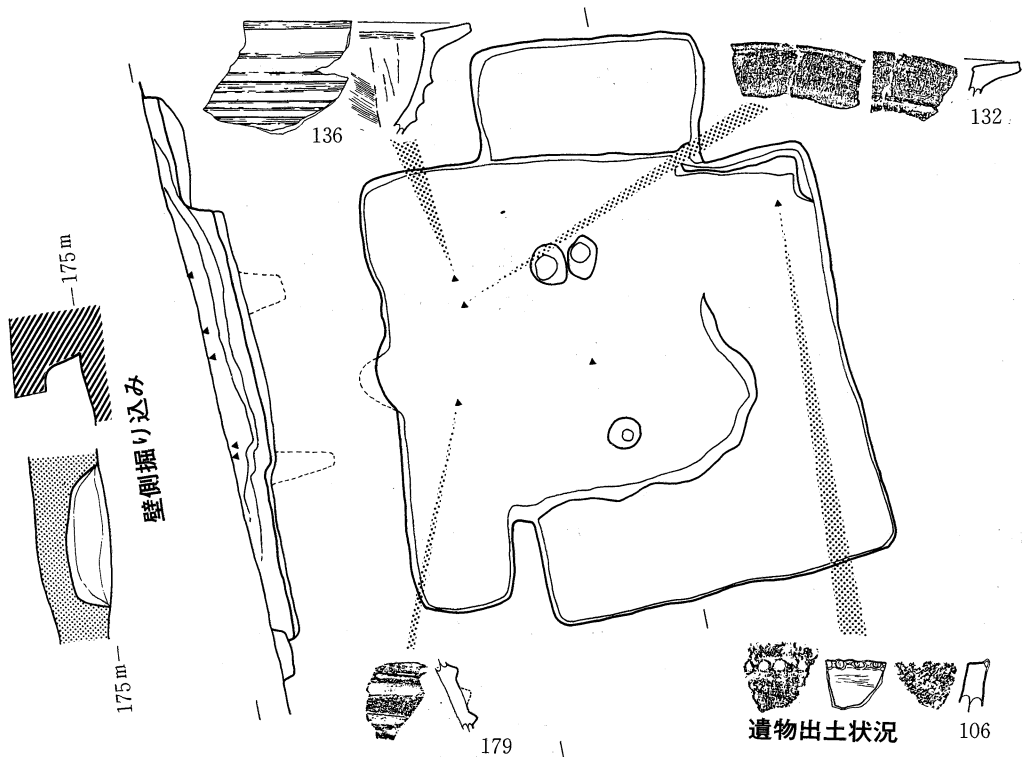
しまりがあって、かたい。

マIB4号
イ-②

検出面

床面

第14図 3号住居跡(1)



第15図 3号住居跡(2)

第5節 縄文時代の土器

縄文土器は前期に該当するものと晩期に該当するものがある。前期の土器は17区より北側に限られる。晩期土器は調査区のほぼ全域から出土した。

前期の土器（1～12）

3種類の土器がみられる。1つは3条から6条を単位とする工具を浅く突き刺しながら少しずつずらして文様を描く点線文である。3の土器をみると、縦・横・斜め方向に点線文が描かれる。11は相交弧文を施す土器である。相交弧文は横方向に施されるのが一般的であるが、この土器は縦方向に施される。12は貝殻条痕を深く施す土器である。前期後半に位置づけられる深浦式土器の範疇に含まれるものとする。

深鉢（1～70）

器面調整からみると内外面ともミガキによるものと粗いナデ仕上げのものがある。口縁部形態は肥厚させ文様帯としている。1条または2条の凹線を巡らし、部分的に縦位の凹線を施すもの（13・14）もある。24は口縁部にリボン状の突起をもつものである。

27は口縁下部に粘土をはりつけ肥厚した口縁部をつくるものである。31は屈曲し断面「く」の字になる口縁であり、他と異なる。

ミガキ調整による土器の胴部はゆるく屈曲し、口縁部と同様の凹線を施す。32は2条の凹線の下にやはり凹線で描いた三日月文を2つ並べて施す。38～41は凹線間に刻目をもつものである。63・64・66のナデ調整による土器は胴部で強く屈曲し、文様は施されない。

67は唯一復元可能な深鉢である。口径20cm・器高20cm・底径5cmを測る。口縁部と胴部はほぼ同じ直径であり、胴部で屈曲し不安定な底部に至る。口縁部はわずかに肥厚し、口唇部は丸くおさめる。器面に接合痕を残し、調整は粗いナデ仕上げである。

68・69は接地面のほとんどない尖底である。末吉町中岳洞穴出土土器の中にも数点尖底がみられることから、該期の67の様な器形の深鉢につくことが想定される。70ははりつけによる張り出し底部である。

浅鉢（71・104）

71・72は丸く内湾する肩部から屈曲して外に開く短い口縁部をもつ。口唇部は丸くおさめ、口縁内面には凹線様の段をもつ。黒川式土器の範疇に含まれているものである。

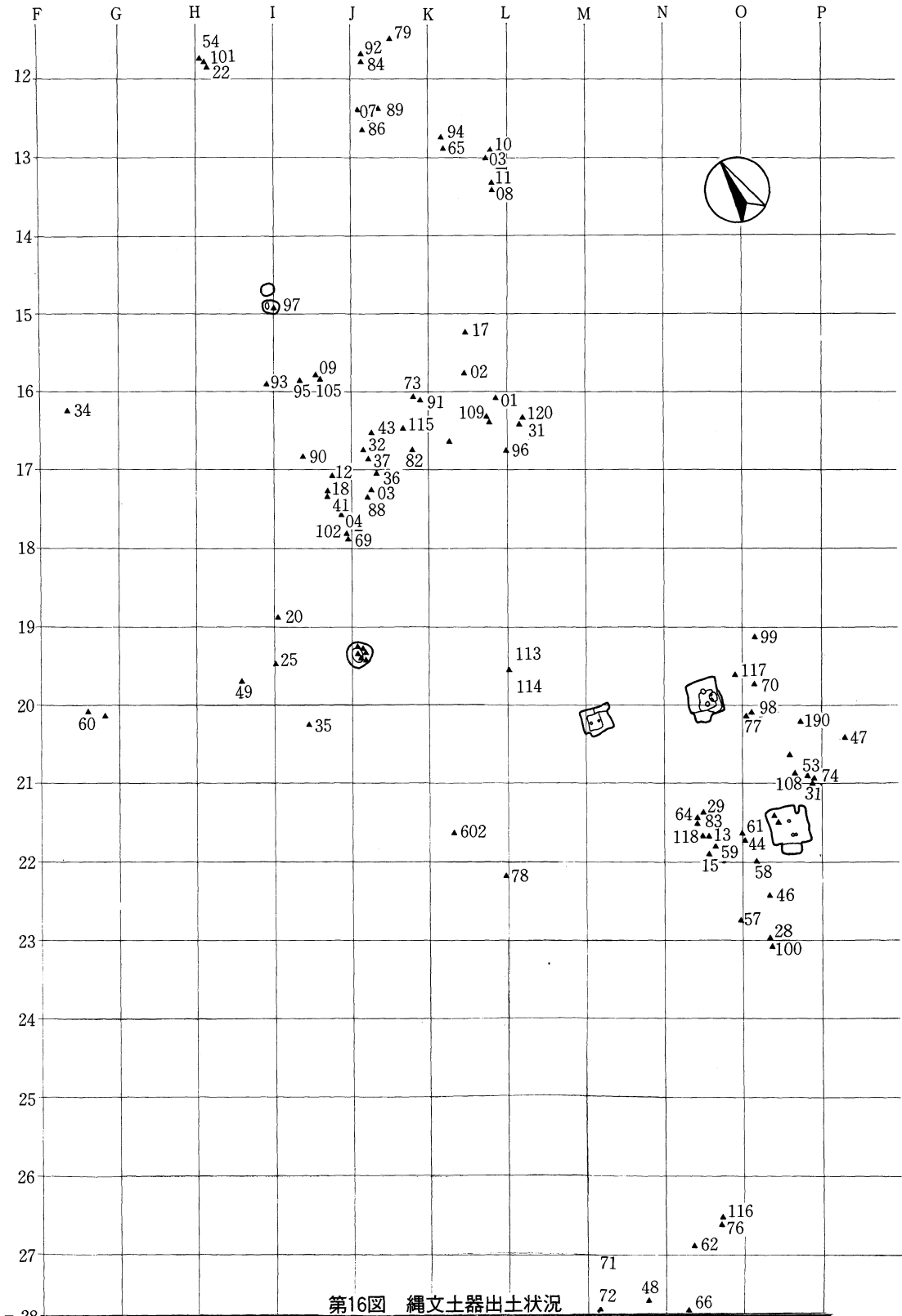
73は屈曲する肩部から外湾する頸部にいたり、屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部には1条の凹線が巡る。晩期前半に位置づけられている土器である。

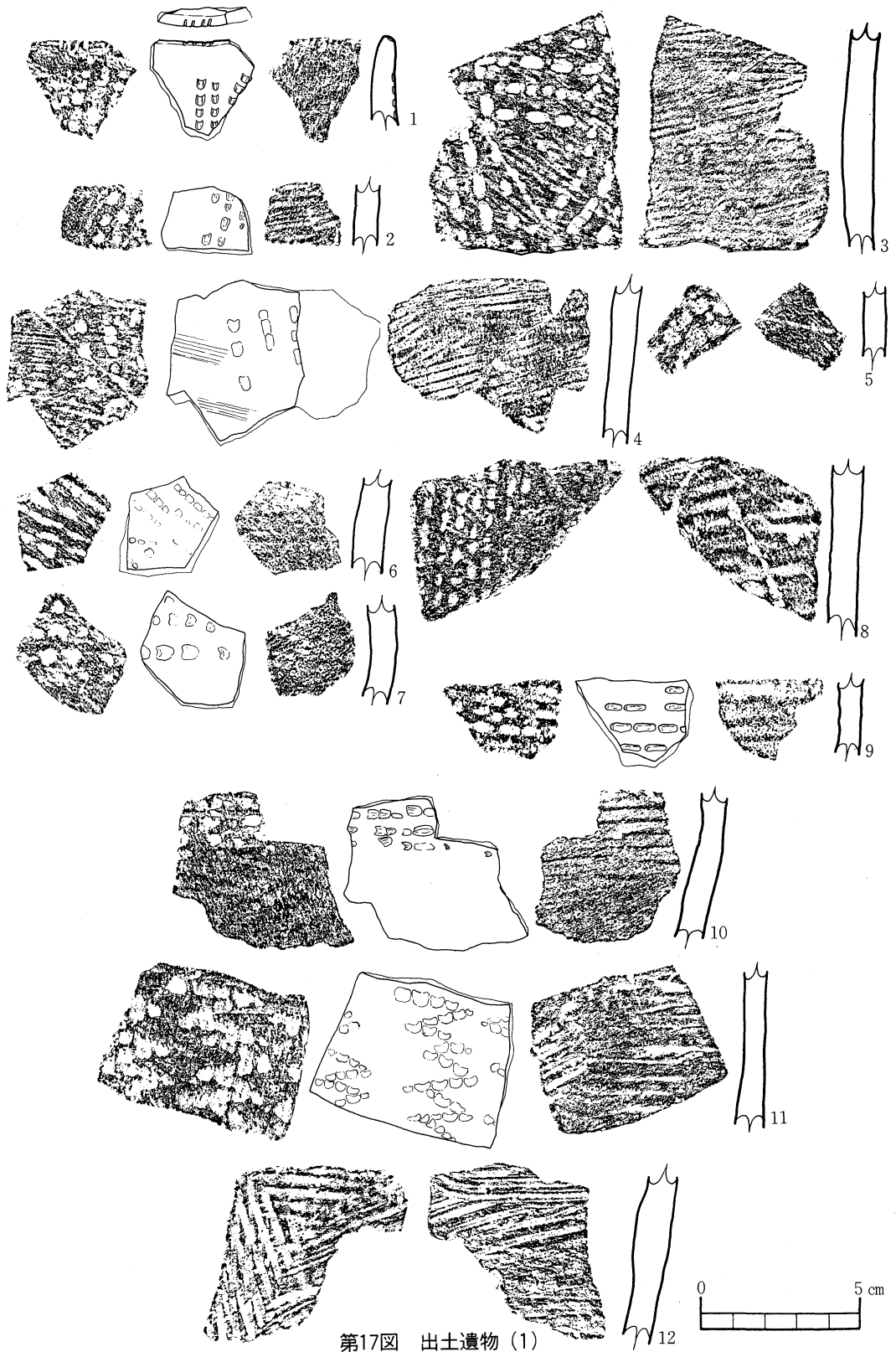
75は鱗状突起をもつものである。

76・93・95は口唇部を平に面取りし、口縁部内面に段をつくって肥厚させる。屈曲が強く短い頸部をもつ。

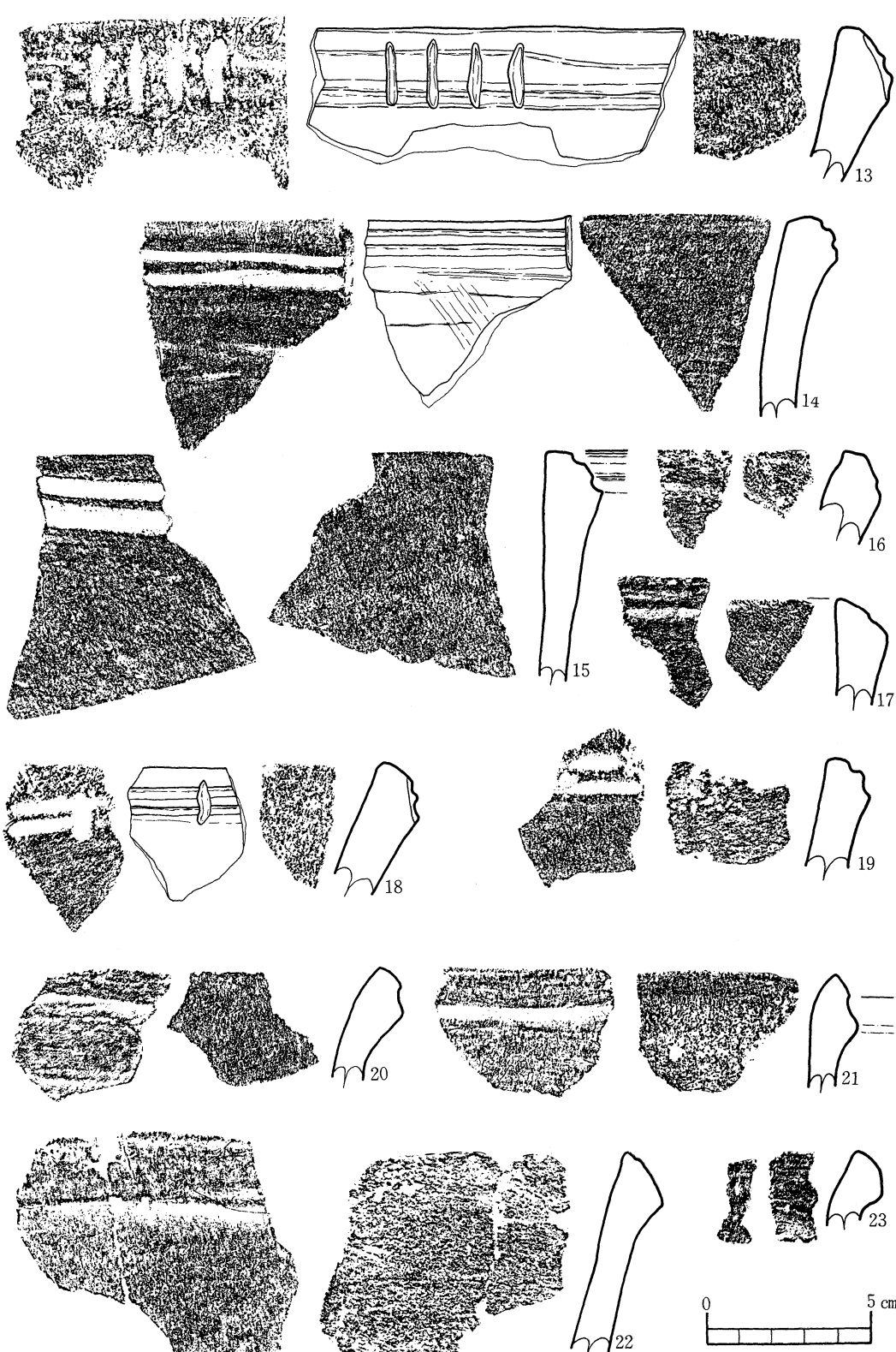
他の口縁部も先細りの端部をもち、内外面とも1条の幅の狭い凹線を施し、屈曲の名残をとどめている。

肩部は屈曲するものであり、古い形態を保っている。

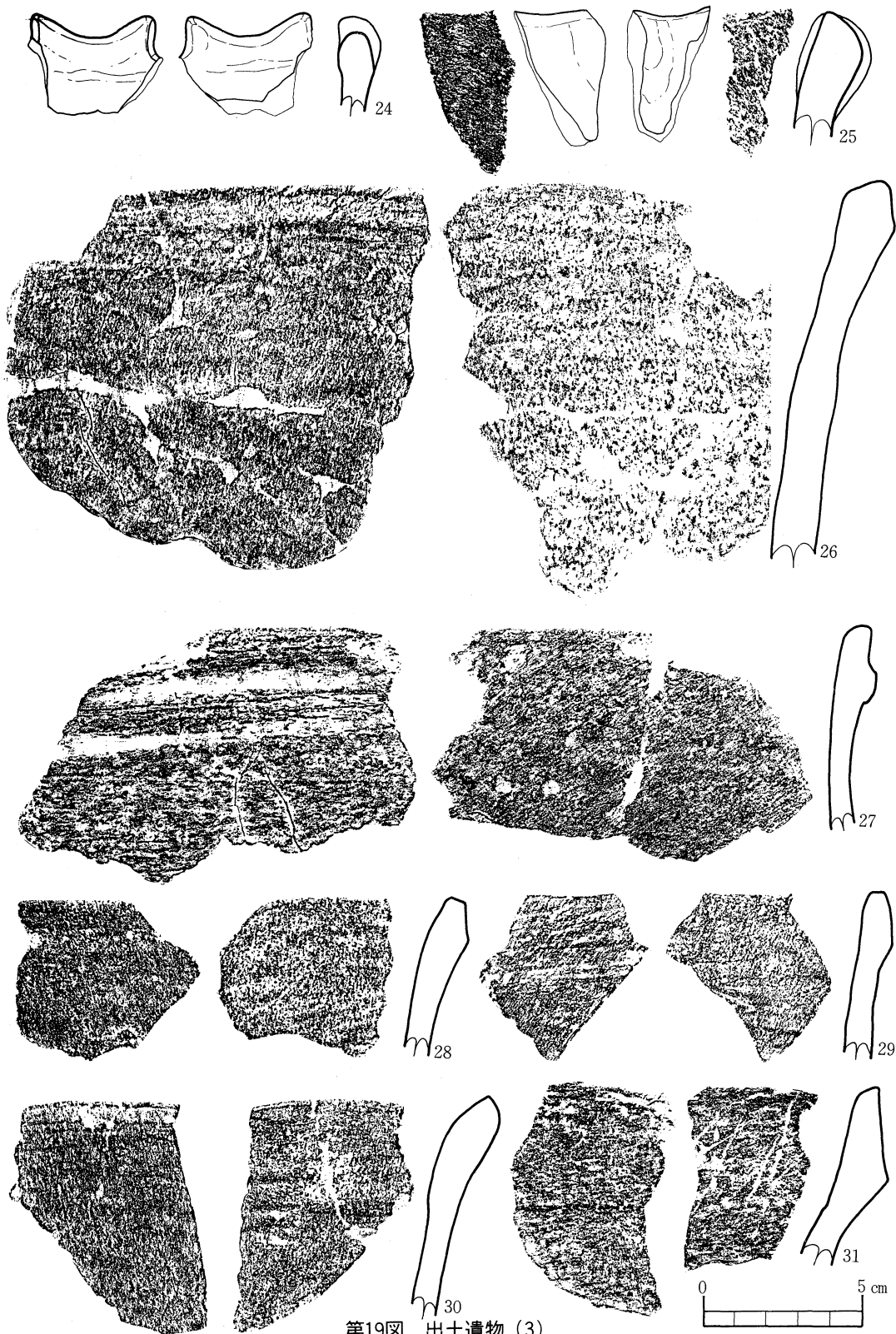




第17図 出土遺物 (1)



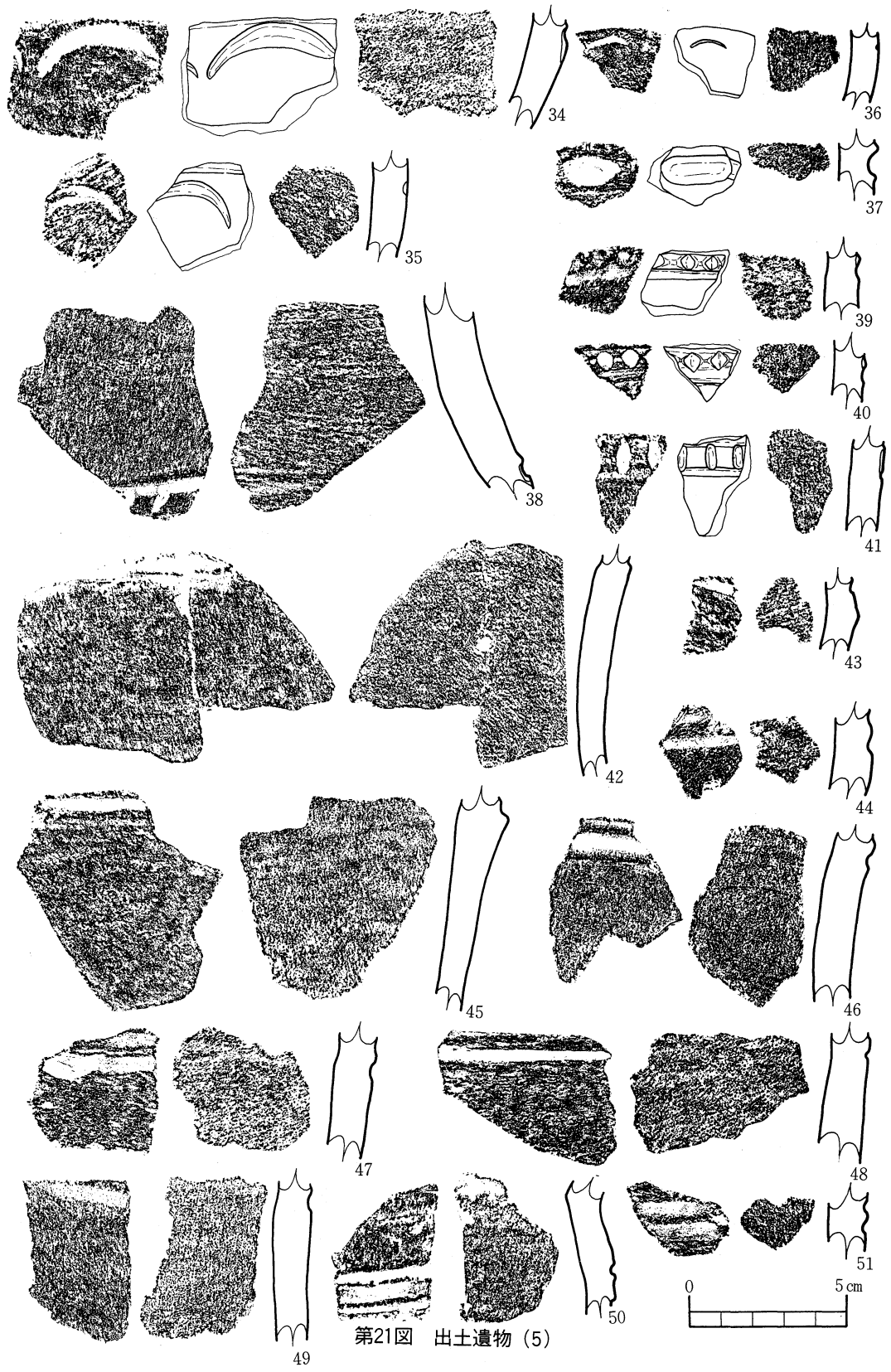
第18図 出土遺物 (2)



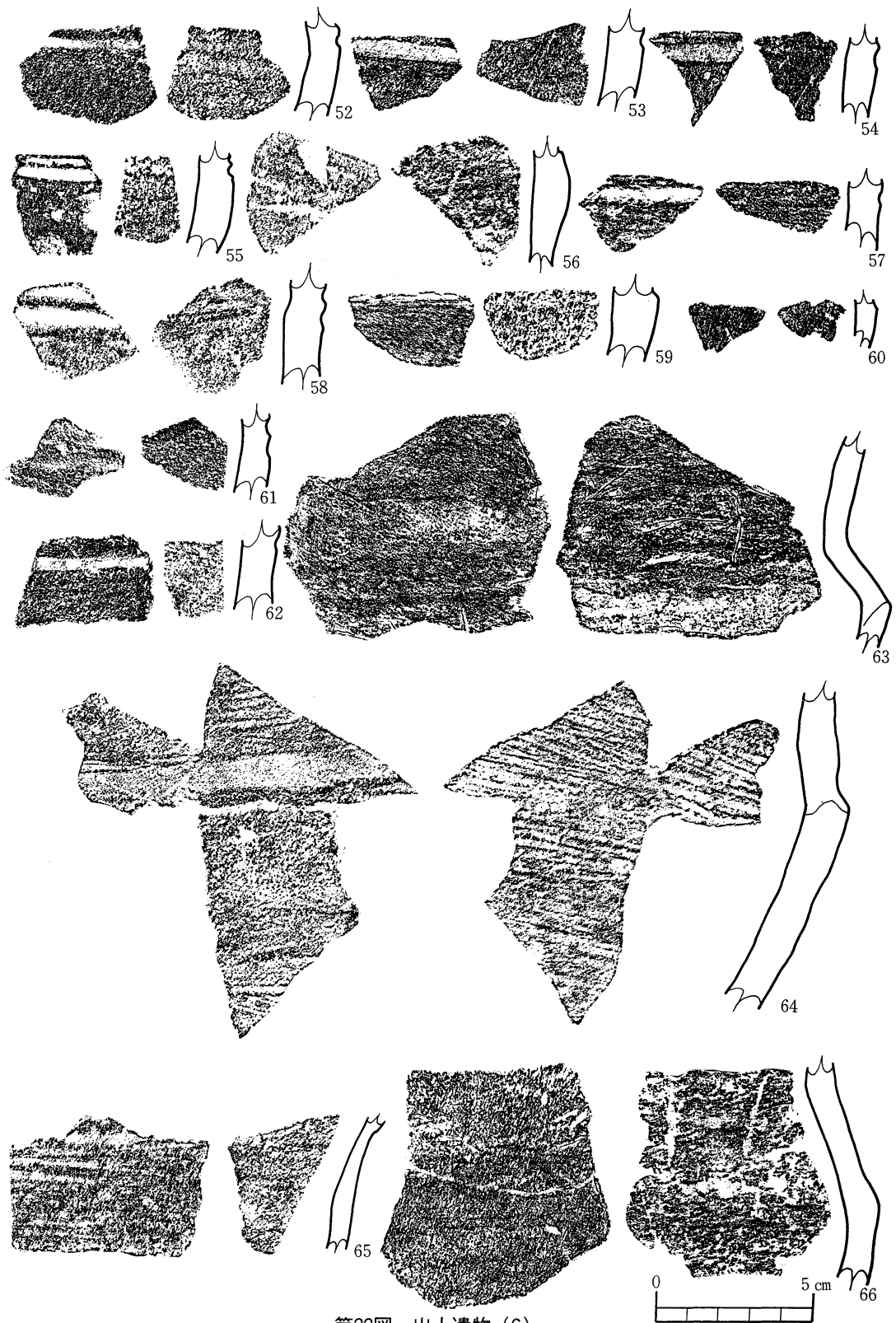
第19図 出土遺物 (3)



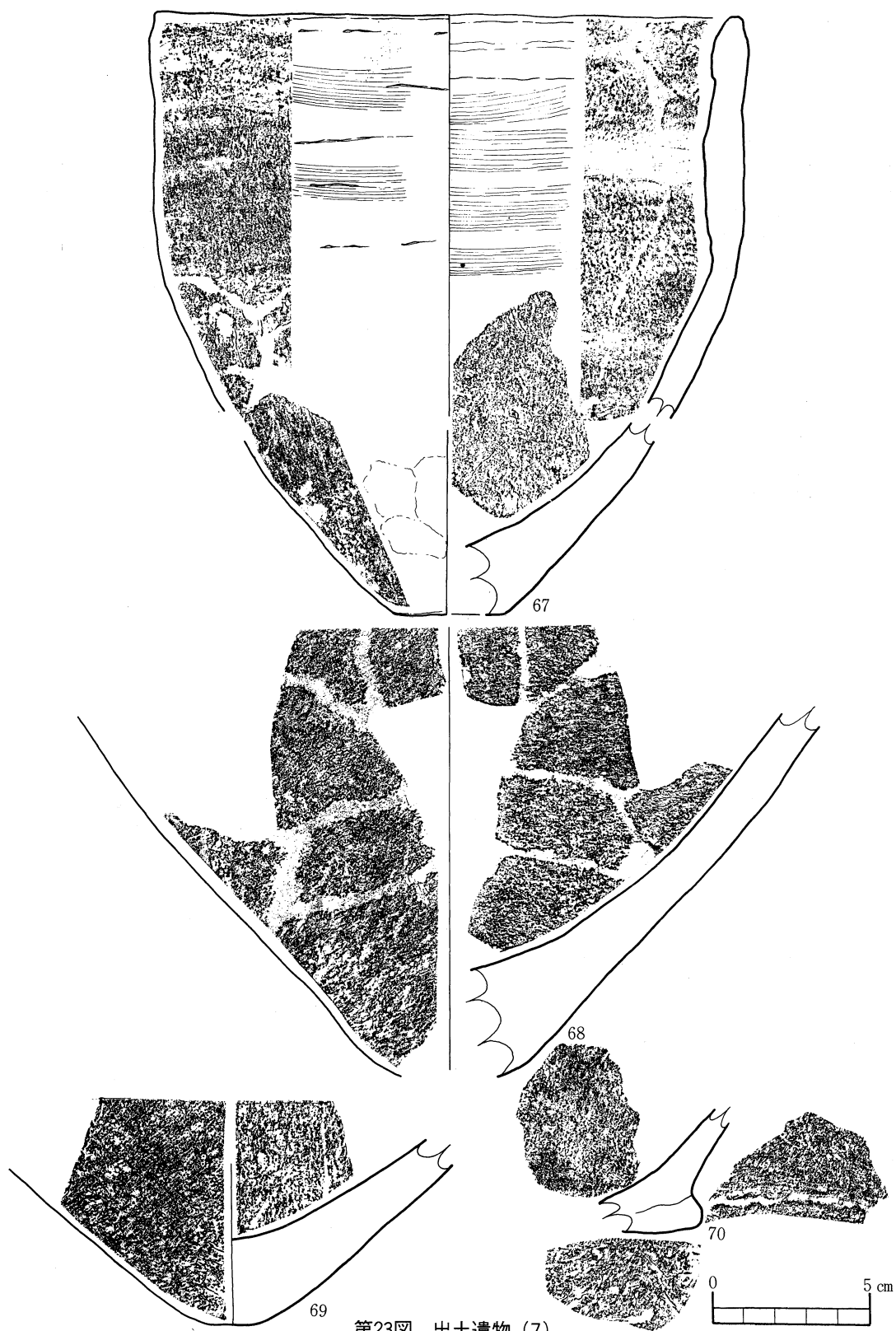
第20図 出土遺物(4)



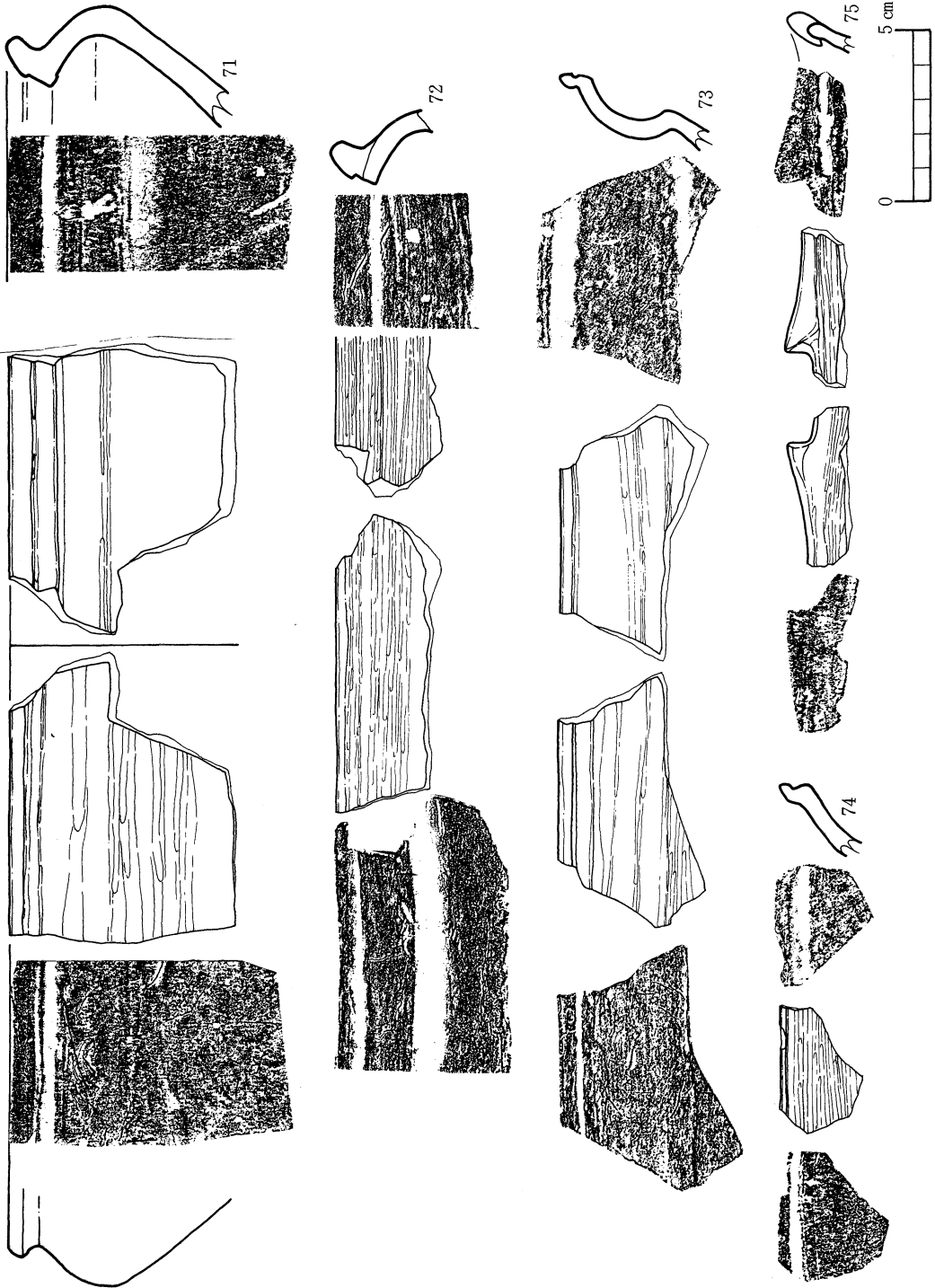
第21図 出土遺物 (5)



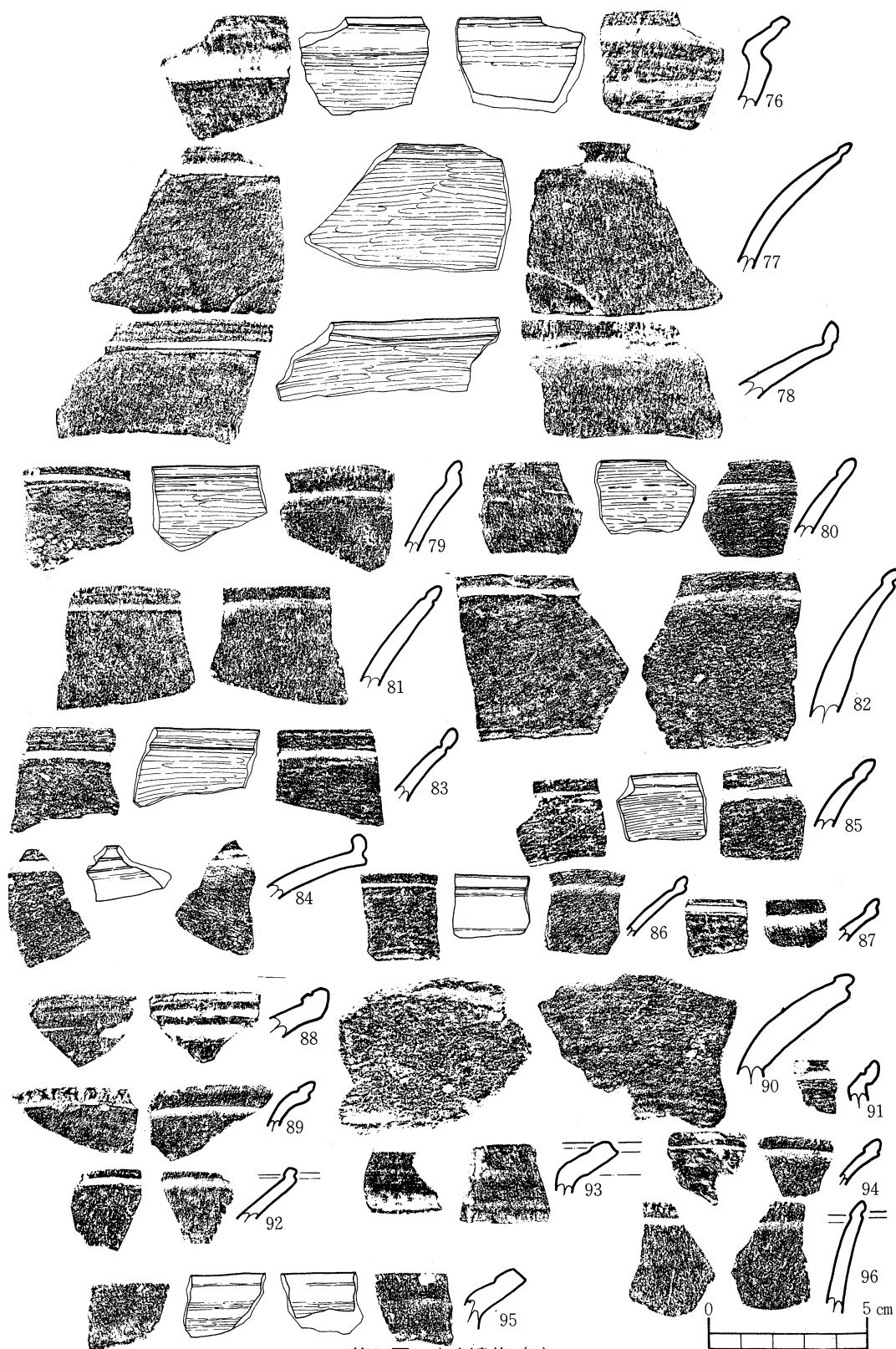
第22図 出土遺物(6)



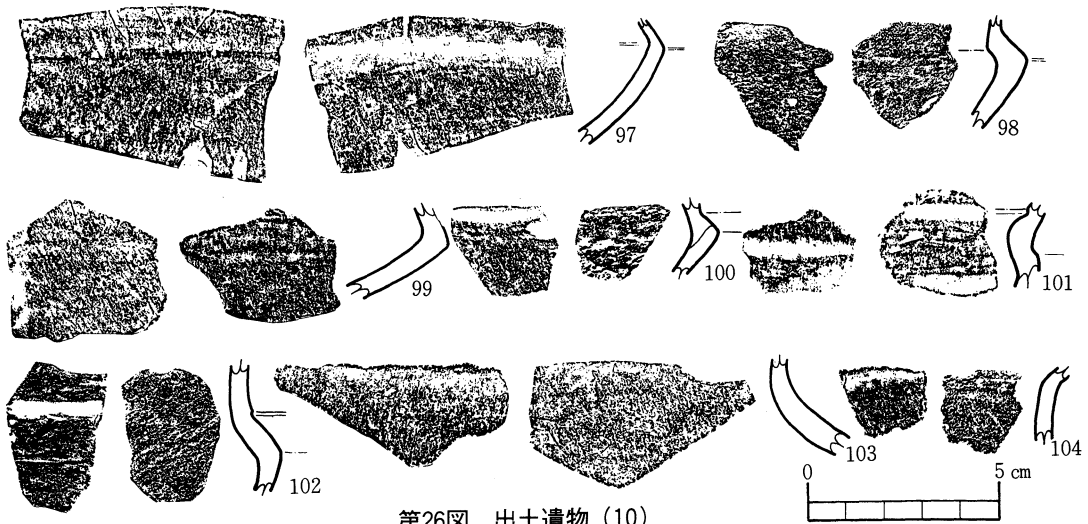
第23図 出土遺物 (7)



第24图 出土遺物 (8)



第25図 出土遺物 (9)



第26図 出土遺物 (10)

その他の縄文土器

105は内面に点線文を施し1～11までの土器と同類と考えられるが、外面にはりつけ文をもつことから念のため外した。はりつけ文は細い粘土紐の上に細かい刻目を入れるものである。

107は口縁部外面に貝殻腹縁を使って羽状に刺突するものである。後期の市来式土器の系列の中に当てはまるものと考えられる。

109は粘土紐を円形にはりつけるものである。鹿屋市水の谷遺跡などで晩期土器にともなって円形のはりつけ文はみられる。しかし、はりつけ方がぴったりつけるのに対し、109は接合痕を残している点が異なる。

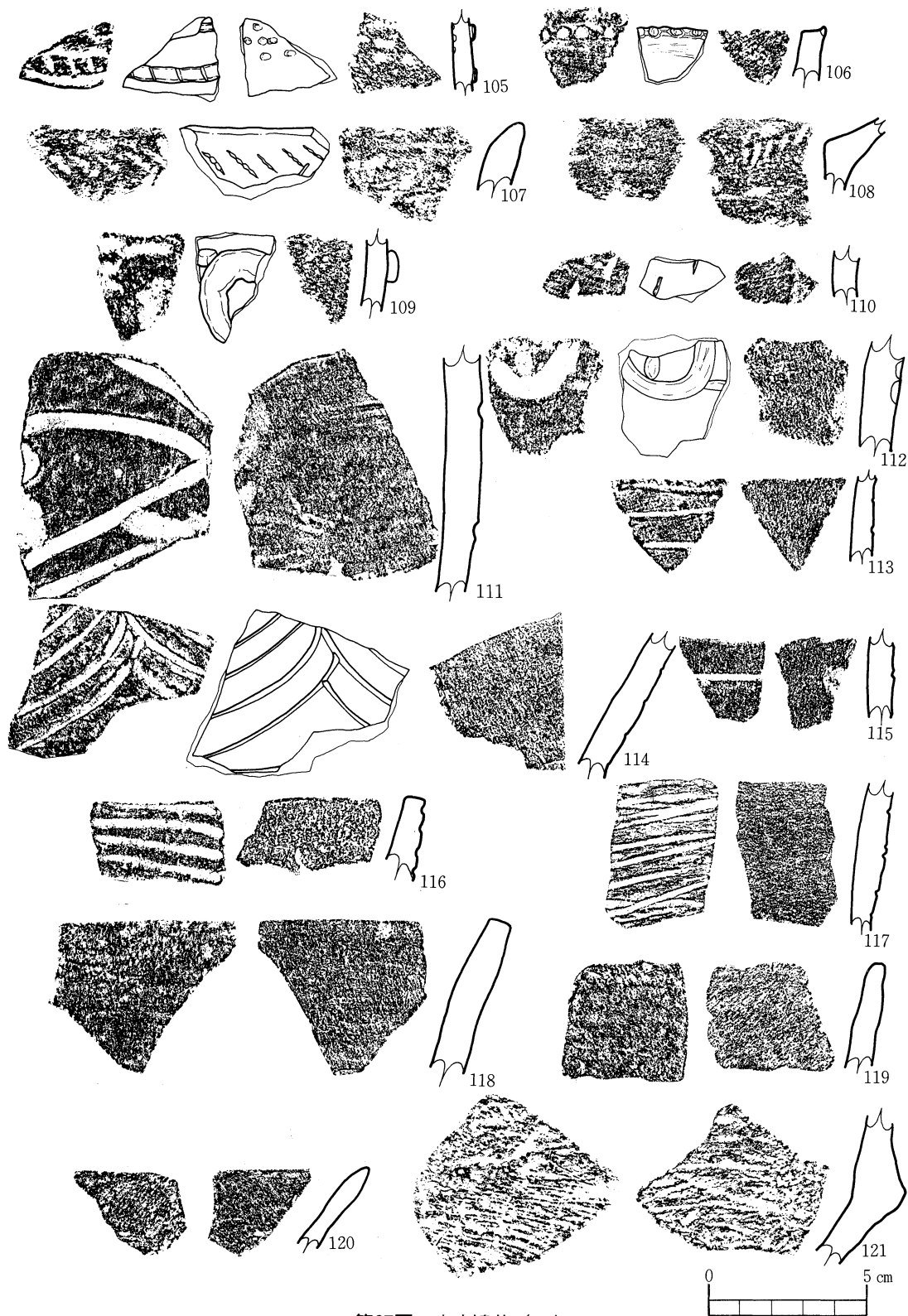
111は厚い器壁の土器に凹線で文様を描く。円形の刺突と曲線を組み合わせた文様となる。後期以降のものと思われる。

112も凹線で文様を描くものである。器面の特徴は32などの土器に似ている。

113・114は口縁部付近の破片であり、鋭い沈線によって波状の文様が描かれる。これまでの調査では晩期土器の中に希にみられる。

116は少なくとも4本以上の凹線をもつ口縁部である。口唇部は平に面取りする。

121は蓆目状の組織痕をもつ土器である。屈曲した部分から下だけに圧痕をもつ。これまでの調査では黒川式土器に伴うものといわれている。



第27图 出土遺物 (11)

第6節 弥生時代の土器

弥生時代の土器はK-16区付近と住居跡の周りに集中した。なおL-19区には調査時点で「2号住居跡」と呼んでいたⅡ層黒色土が染み込んだ部分があり、157の壺形土器もここから出土した。結局、掘り込み等は全く検出できずL-19区の「2号住居跡」は幻のものとなった。出土土器には甕形土器と壺形土器があり、高坏などは発見できなかった。

甕形土器（122～156）

口縁部はほとんど「L」字状に近いものであり、はっきり「く」字状になるものはない。口縁部の器壁はやや薄く、間延びした感じを受ける。内面が張り出すことと口唇部にくぼみをもつことに特徴がある。口縁部下には幾条かの突帯を巡らす。

136は3号住居跡内から出土したものである。わずかに立ち上がる「L」字状の口縁部をもち、口縁部内面は張り出す。口縁部下に3条の突帯を巡らす。内面は板状工具によるナデ痕が残る。

155は2号住居跡内から出土したものである。手づくねによって形を整えたものであり、充実した脚台である。直径が3cmと小さく、ミニチュアの甕形土器が想定される。

156は一般的な甕形土器の充実した脚部である。外面は縦位の刷毛目による調整であり、底部に凹線を巡らすことが特徴である。

壺形土器（157～187）

157は大型の壺形土器である。肩部に4本以上の突帯を巡らし、胴部最大径部分にも1条の突帯を巡らす。また、肩部と胴部最大径部の間にも1条の突帯を巡らす。突帯はシャープさに欠ける。外面はミガキによる器面調整である。胎土は粗く、小指大の小石を含む。

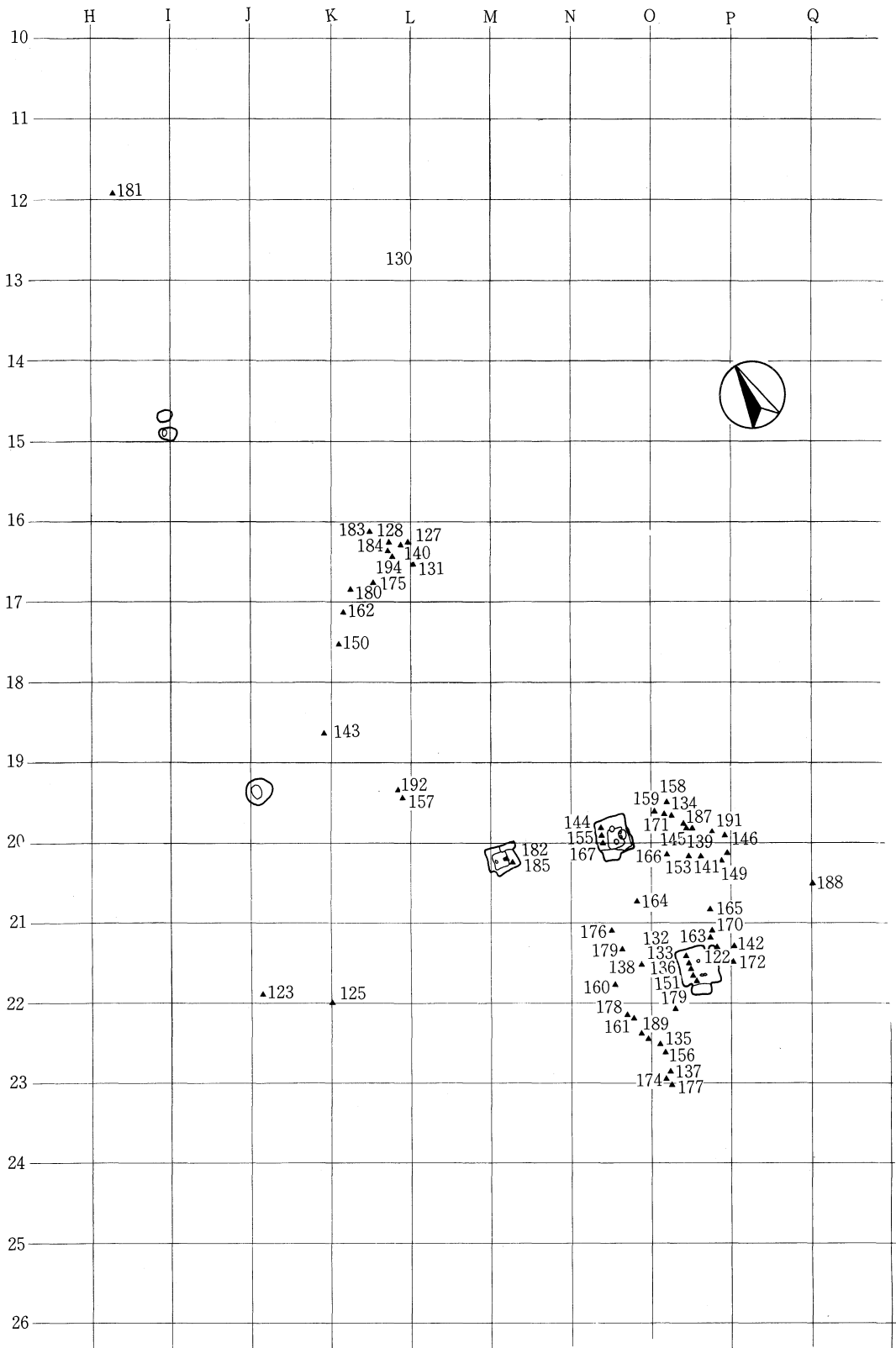
158・159は二叉状口縁になる土器である。下部の口縁の方が長く延びる。口縁部内面には口唇部に接して低い突帯を巡らす。160～163にも二叉状口縁の痕跡がみられる。

164・166は口縁部内面に1条の高い突帯を巡らす。

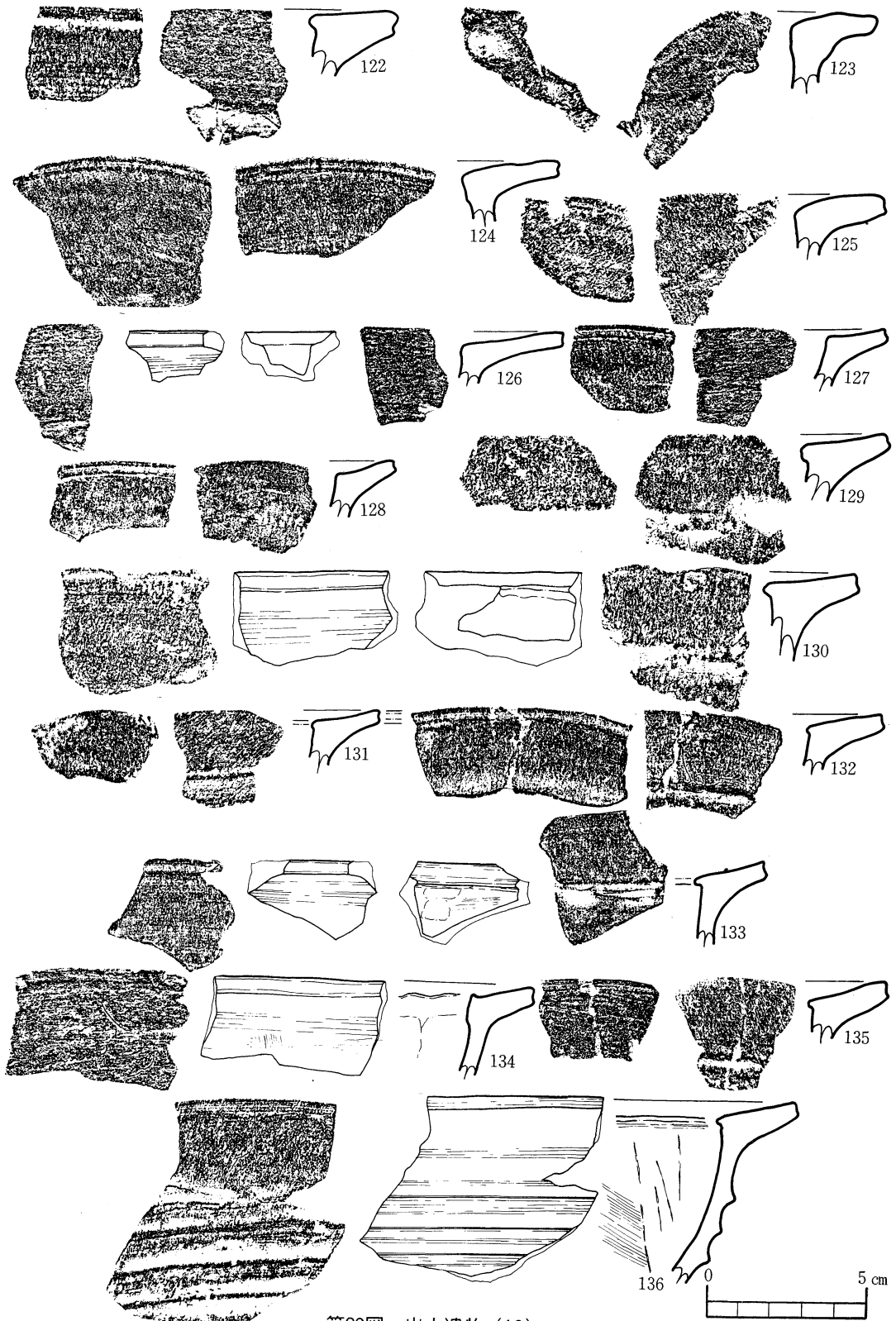
165・168・170は口縁部内面に1条の突帯をはりつけて巡らすと共に、口縁部をわずかに屈曲させているため2条の突帯が巡っているような感じを受ける。

その他の土器

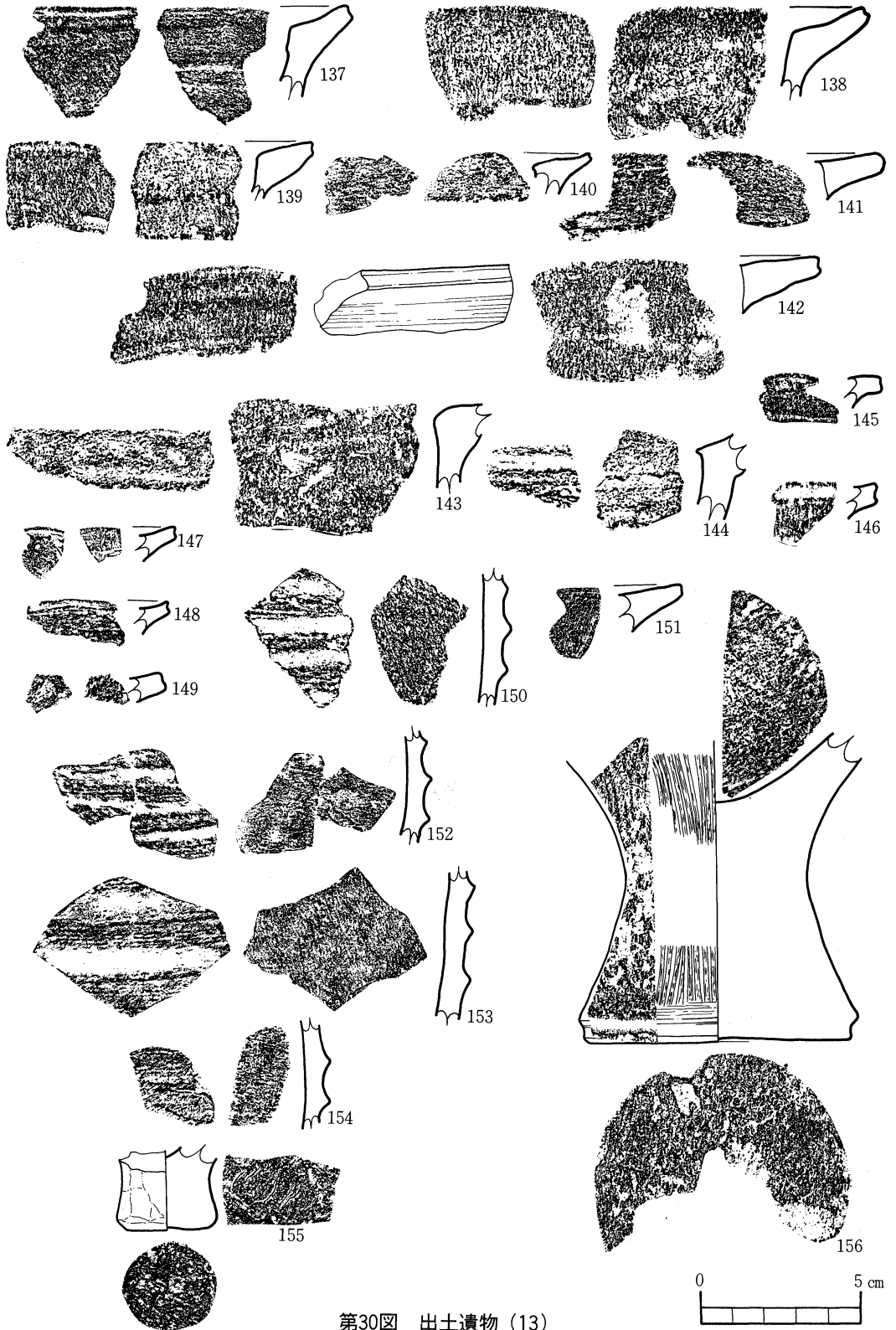
191は煮炊きに用いない大型の甕形土器のタガの一部と考えられる。



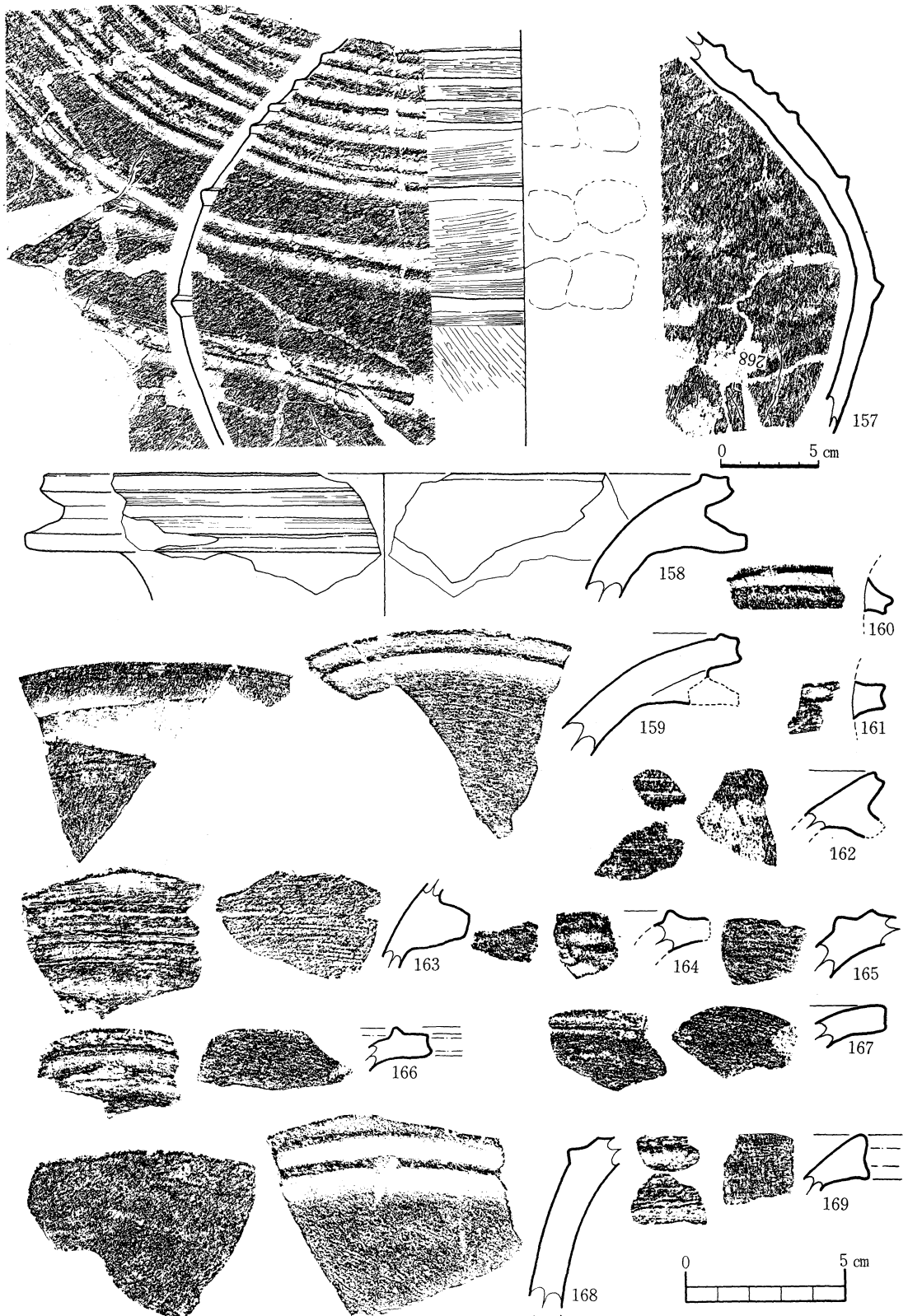
第28図 弥生土器出土状況 (12)



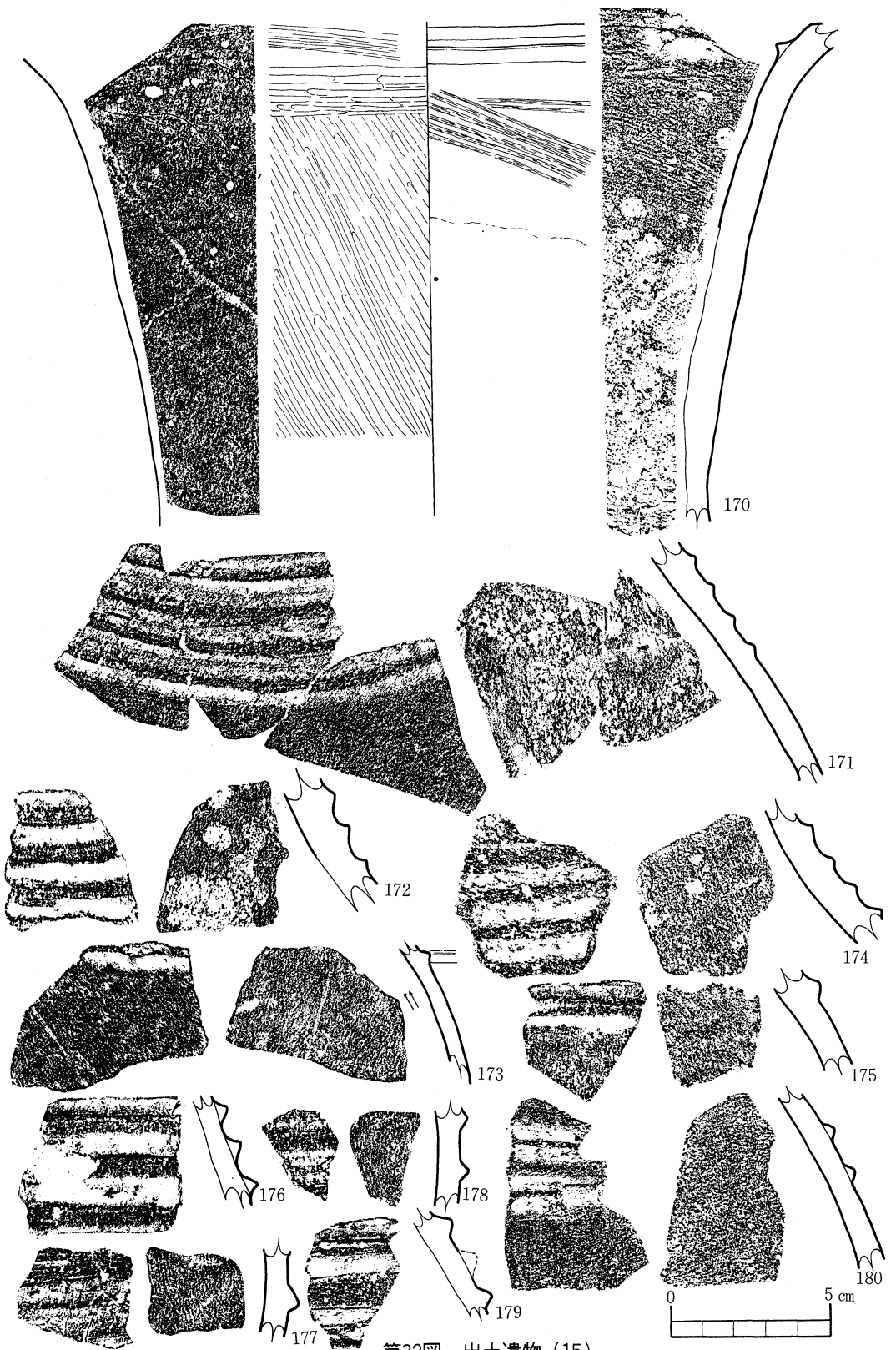
第29図 出土遺物 (12)



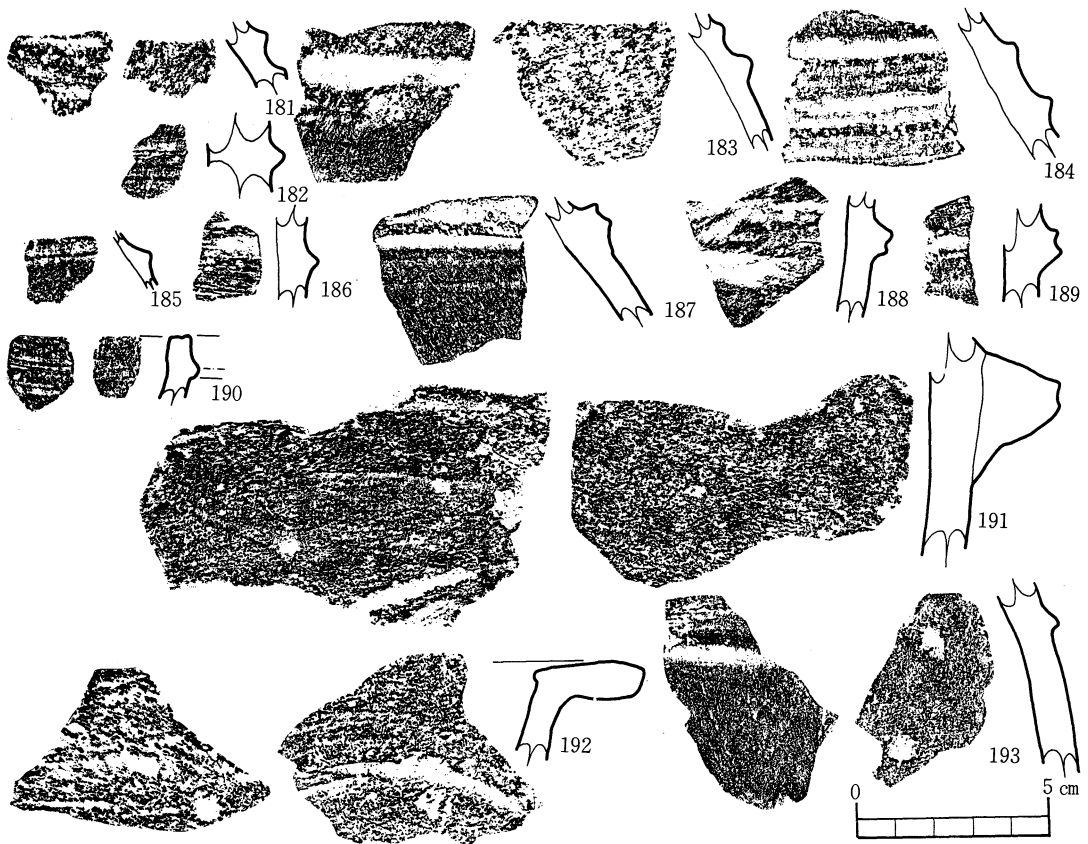
第30图 出土遺物 (13)



第31图 出土遺物 (14)



第32図 出土遺物 (15)



第33図 出土遺物 (16)

第7節 古墳時代の土器

K-16区のⅡ層黒色土が残っている付近に集中して出土した。いずれも小破片のみで全形を明らかにできる遺物はなかった。器種は甕形土器と壺形土器が考えられるが、口縁部を除く突帯だけではどちらの器種に該当するか判断できない。

194～196は甕形土器の口縁部である。わずかに内湾する口縁で、口唇部は尖っている。1条の突帯を巡らすのが特徴である。

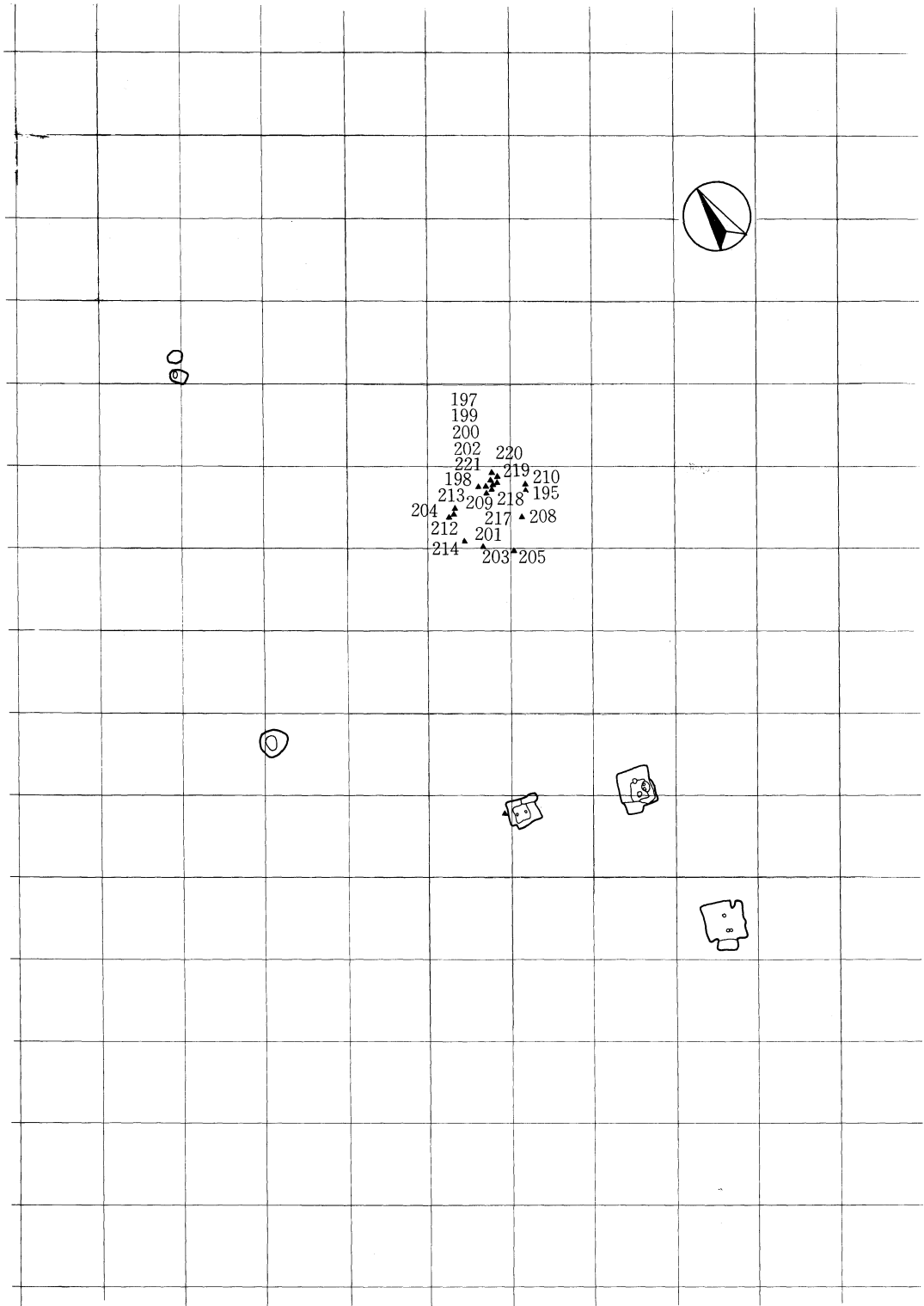
199～202・209は突帯をはりつけた後、上下から指で抑えた痕が残る。208は高い突帯の上に、想像できない工具を用いて間隔をおいた刻みを施す。

203は刻目の中に平織りの布痕がみられ、布を巻いた棒状工具で施文したと考えられる。

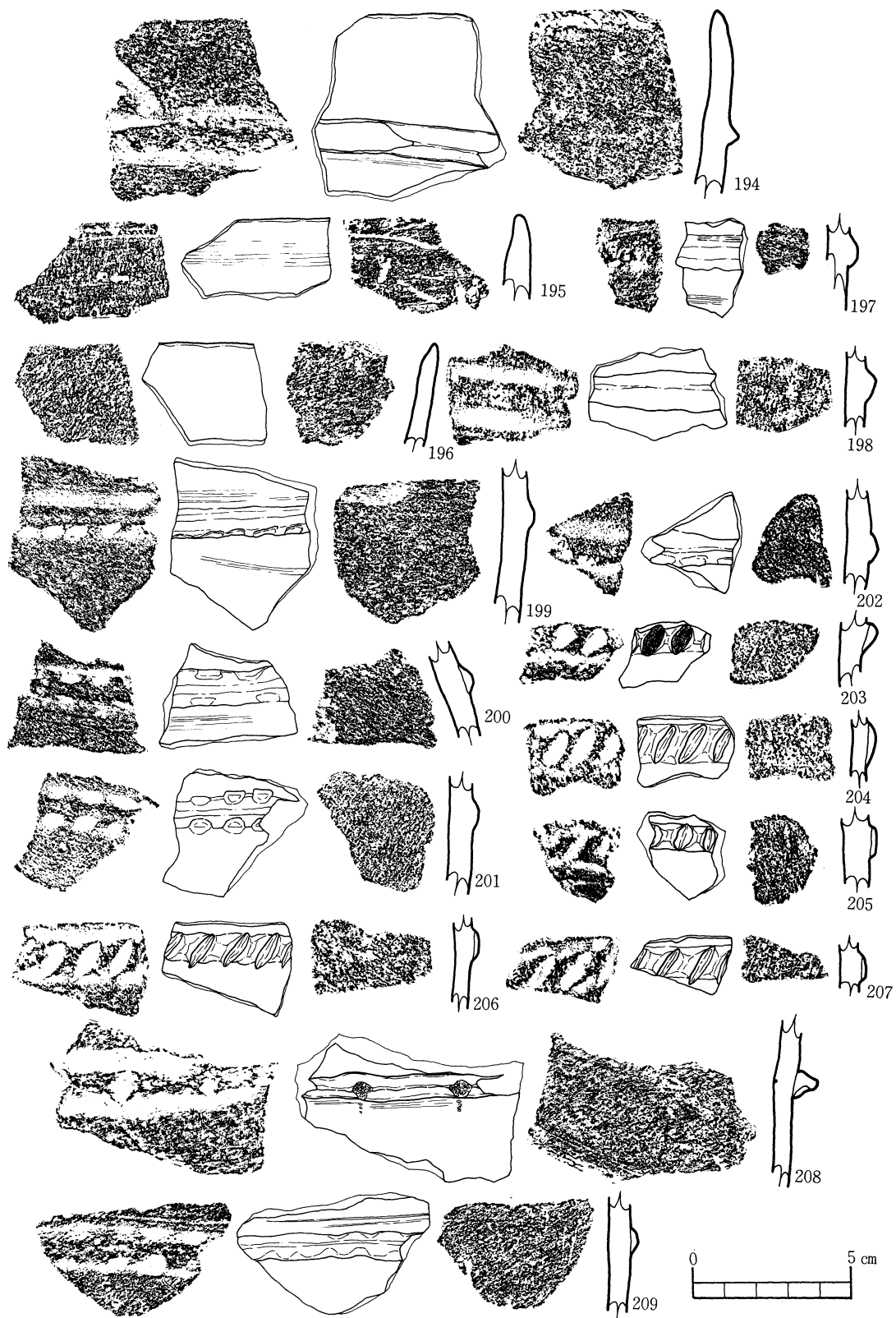
204～207・210～214は1条の突帯に棒状工具を使って深めの刻目を施す。

215・216は突帯上に交差した刻目を施す。

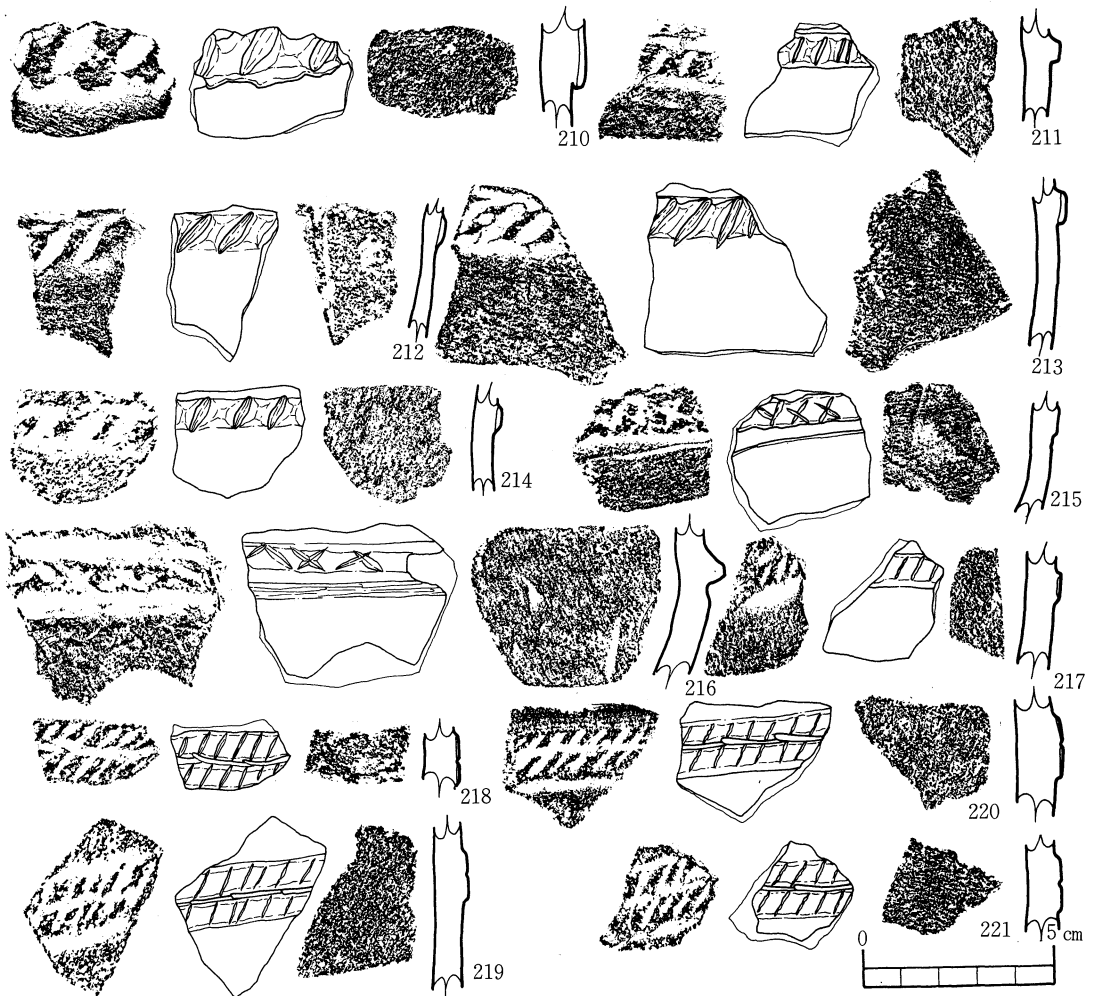
217・221は幅広の突帯を巡らし、まん中に沈線をひいて2条の突帯の効果をねらっている。連続した細かい刻目残り、上下同時に施文したと考えられる。



第34図 古墳時代の土器出土状況



第35图 出土遺物 (17)



第36図 出土遺物 (18)

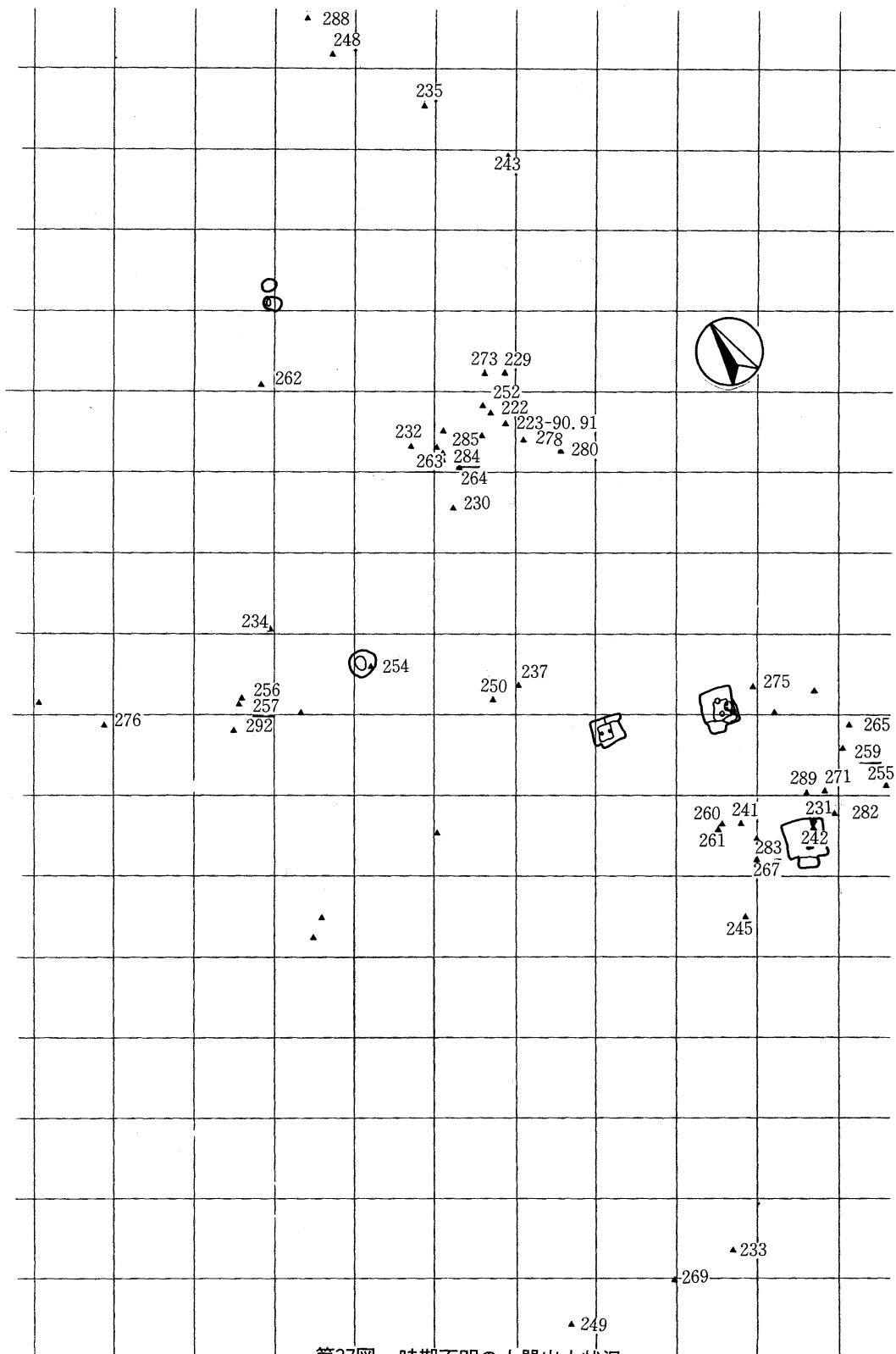
第8節 その他の土器

222～292は観察できる特徴だけからは該当する時期を判断するのに迷った土器である。他遺跡の資料と比較することによって今後明らかにしてゆかなければならない。

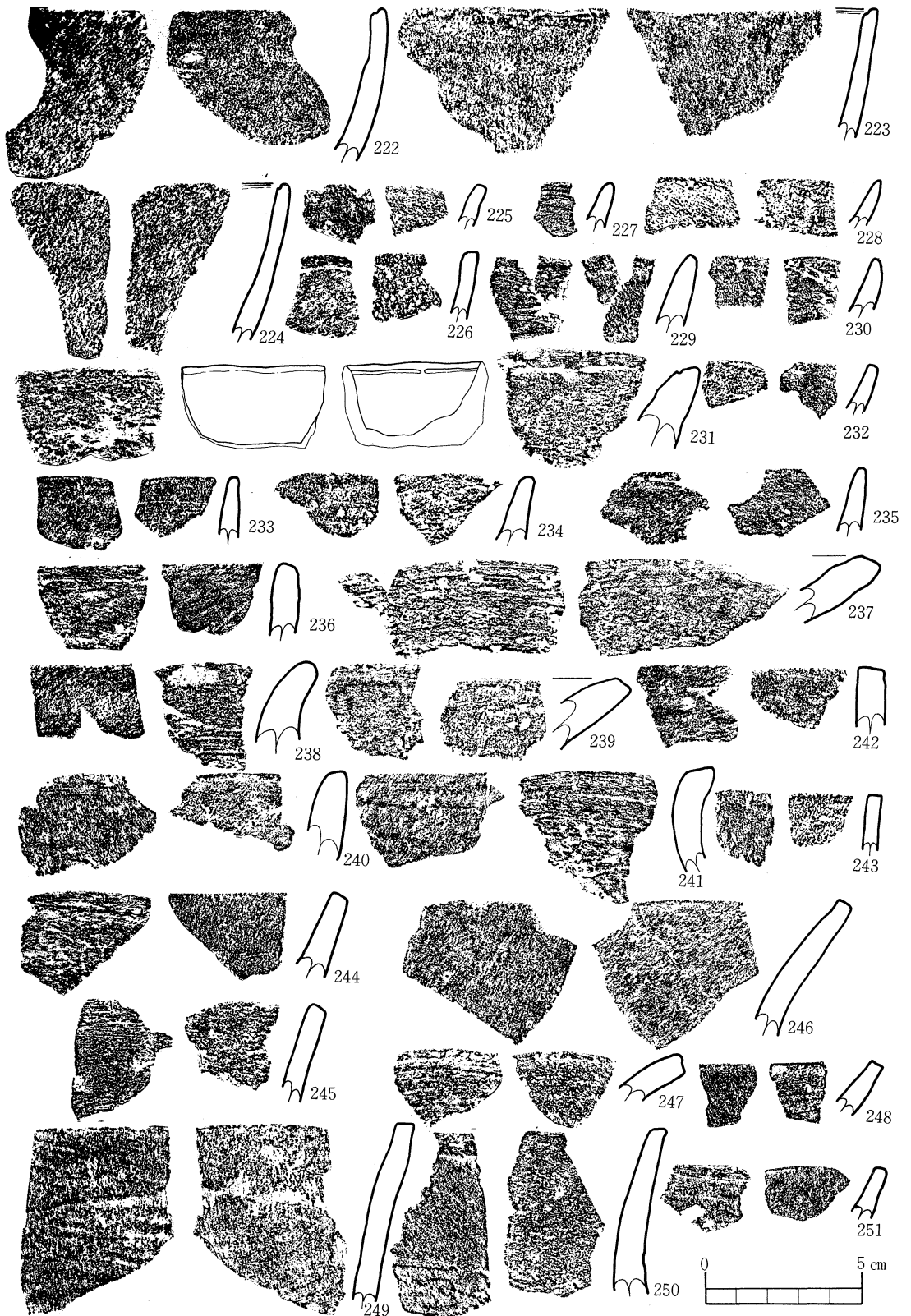
第20図の土器は器面調整方法から判断して、縄文晩期に該当するものであろう。263～272の突帯は弥生時代のものか古墳時代のものかはっきりしないものである。273・274はやや上げ底状の張り出し底部となる特徴から縄文時代晩期の精製浅鉢につくことが想定される。284・285は中空の脚台部分と考えられ、古墳時代の甕形土器が想定される。289は器壁が薄く、安定した底部をもつ。出土地点からみても弥生時代の可能性が高い。壺形土器であろう。

290・291は復元口径が4 cmと小さく、管状の形をなす。熱を受けた様子はなく、フィゴの羽口とは考えにくい。時期・用途とも不明である。

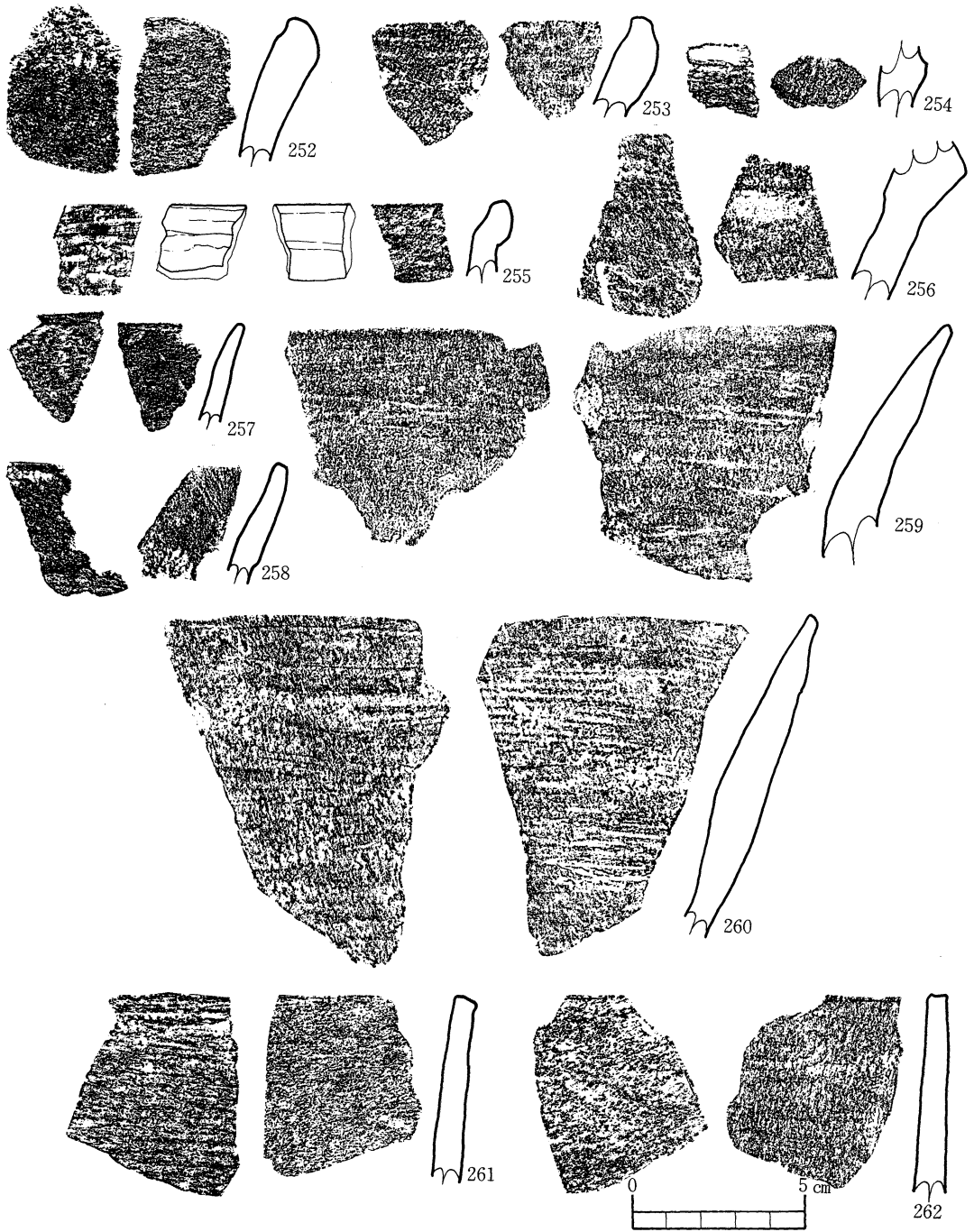
292は近世溝内底からの出土であり、無釉の陶器底部である。江戸時代以降のものであろう。



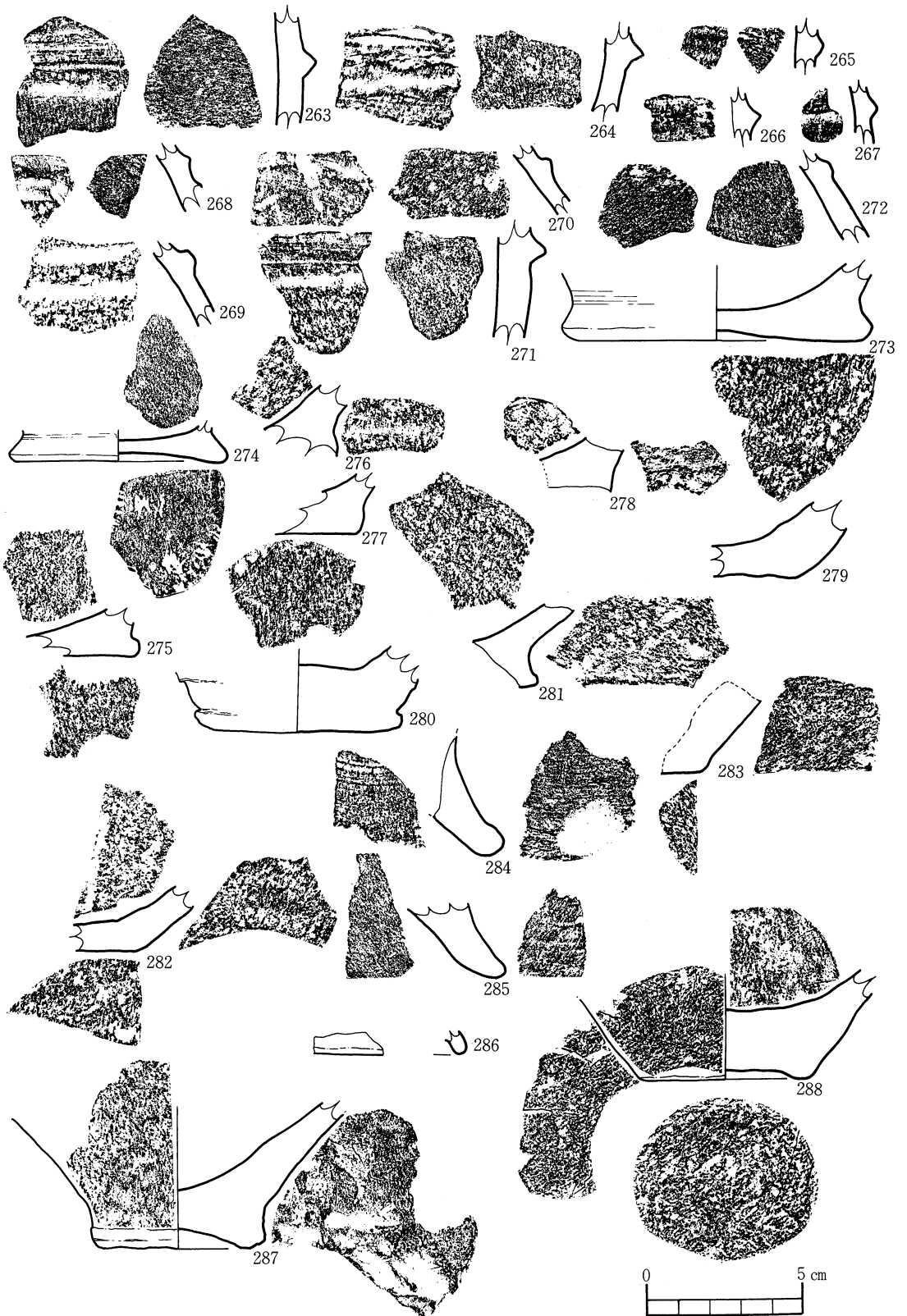
第37図 時期不明の土器出土状況



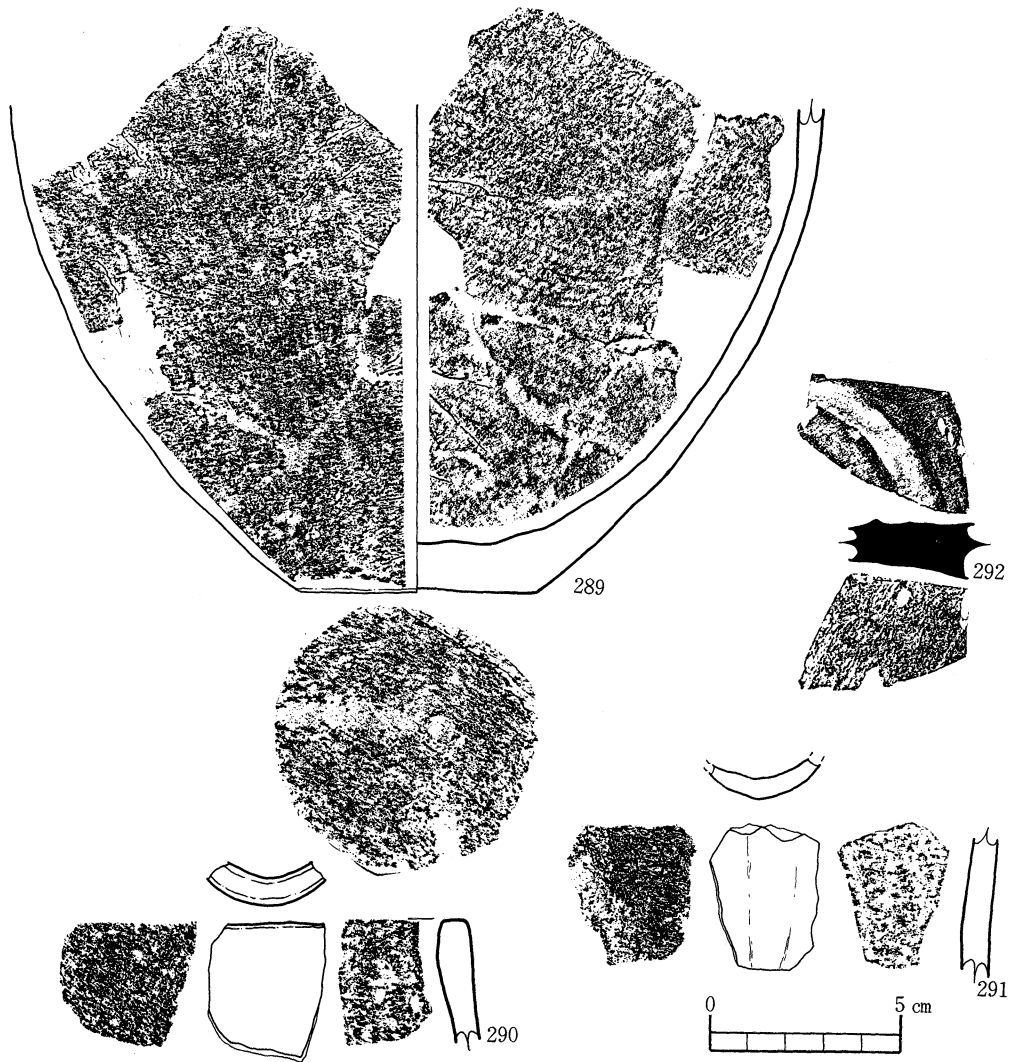
第38图 出土遺物 (19)



第39図 出土遺物 (20)



第40図 出土遺物 (21)



第41图 出土遺物(22)

表4 土器観察表(1)

番号	地点	層	器種	種別	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考
						内面	外面			
1		Ⅲ	深鉢		茶 褐	ナ デ	ナ デ		473	口唇部キザミ 点線文
2		Ⅲ	深鉢		茶 褐	ナ デ	ナ デ		485	点線文
3		Ⅱ	深鉢		明 褐	貝殻条痕	貝殻条痕		1875	点線文 煤付着 1883
4		Ⅱ	深鉢		茶 褐	貝殻条痕	貝殻条痕		1816	点線文 1876 1883
5		Ⅲ	深鉢		茶 褐	—	ナ デ		188	点線文
6		表採	深鉢		明 茶 褐	ナ デ	ナ デ			点線文
7		Ⅱ	深鉢		橙	ナ デ	ナ デ		1845	点線文
8		Ⅱ	深鉢		橙	貝殻条痕	ナ デ		1879	点線文
9		Ⅱ	深鉢		黄 褐	ナ デ	ナ デ		1930	点線文
10		Ⅱ	深鉢		黄 灰	貝殻条痕	ナ デ		1876	点線文
11		Ⅱ	深鉢		黒 褐	貝殻条痕	ナ デ		1882	縦方向の相交弧文
12		Ⅰ	深鉢		黒 褐	貝殻条痕	貝殻条痕		101	条痕文
13		Ⅲ	深鉢		黄 褐	ナ デ	ナ デ	砂 石英	2030	2条凹線+縦凹線 4本
14		Ⅲ	精製深鉢		橙 褐	ミガキ	ミガキ	砂	1510	2条凹線
15		Ⅱ	深鉢		橙	ナ デ	ナ デ	砂	2025	浅い2条凹線
16	3 坑		精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ	砂	1443	2条凹線
17		Ⅱ	精製深鉢		橙 褐	ミガキ	ミガキ	砂	2008	浅い2条凹線
18		Ⅲ	精製深鉢		橙 褐	ミガキ	ミガキ	砂	114	2条凹線+縦凹線
19		Ⅲ	精製深鉢		黒	—	ミガキ	砂 石英	907	2条凹線
20		Ⅲ	精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂	1397	1条凹線
21		Ⅲ	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ	砂 石英	1538	1条凹線
22		Ⅲ	精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂 石英	235	凹線なし 口唇部平坦面なし 236
23		Ⅱ	精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂 石英	1260	凹線なし 口唇部平坦面なし
24		Ⅲ	深鉢		明 橙	ナ デ	ナ デ	カクセン	898	リボン状突起
25		Ⅲ	深鉢		明 茶	ナ デ	ナ デ		2203	口唇部平坦面なし
26		Ⅲ	精製深鉢		黒 茶	—	ミガキ	砂 石英	1435	凹線なし
27		Ⅲ	深鉢		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	小 石	2272	凹線なし 肥厚部が下がる
28		Ⅰ	深鉢		橙	ナ デ	ナ デ	砂 石英	1101	凹線なし
29		Ⅱ	深鉢		赤	ナ デ	ナ デ	砂	2049	凹線なし
30		Ⅲ	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ	砂 石英	2174	凹線なし
31		Ⅱ	深鉢		黄 褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂 石英	1154	口縁部屈曲
32		Ⅲ	精製深鉢		茶 褐	ミガキ	ミガキ	砂	318	胴部2条凹線 三日月文
33		Ⅲ	精製深鉢		茶 褐	ミガキ	ミガキ	砂	1421	胴部屈曲 1470
34		Ⅲ	精製深鉢		橙	ヨコナデ	ミガキ		1487	三日月文
35		Ⅲ	精製深鉢		橙	ヨコナデ	ミガキ	砂	1345	三日月文
36		Ⅲ	精製深鉢		橙	ナ デ	ナ デ		396	三日月文
37		Ⅲ	精製深鉢		明 茶	—	ミガキ	砂	338	凹点
38	3 坑		精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ	砂	1450	凹線+凹点
39	3 坑		精製深鉢		明 橙	—	ミガキ	砂	1343	凹線+凹点
40	3 坑		精製深鉢		黒 茶	—	ミガキ		1418	凹線+凹点
41		Ⅲ	精製深鉢		橙	—	ミガキ	砂	112	凹線+凹点
42	3 坑		精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂	1512	凹線 1513
43		Ⅲ	精製深鉢		黒 茶	—	ミガキ		302	凹線
44		Ⅱ	精製深鉢		茶	—	ミガキ		1210	凹線
45		Ⅲ	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	砂 石英	1328	凹線
46		Ⅰ	精製深鉢		暗 茶	ミガキ	ミガキ	砂 石英	1084	凹線
47		Ⅱ	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	砂	961	凹線+凹点
48		Ⅲ	精製深鉢		茶	ミガキ	ミガキ	砂	863	凹線
49		Ⅲ	精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂	757	凹線
50		表採	精製深鉢		黒 茶	ミガキ	ミガキ	砂		沈線

表5 土器観察表(2)

番号	地点	層	器種	種別	色調	器面調整		胎土	取上番号	備考
						内面	外面			
51	3 坑		精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	砂	1368	凹線
52	3 坑		精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	砂	1227	凹線
53		II	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	砂	1039	凹線
54		III	精製深鉢		明茶	ミガキ	ミガキ		242	凹線
55		表採	精製深鉢		赤		ミガキ			凹線
56	K-16	II	精製深鉢		灰		ミガキ			凹線
57		II	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ		1560	凹線
58		I	精製深鉢		明茶		ミガキ	砂 石英	1065	凹線
59		II	精製深鉢		茶	ミガキ	ミガキ	砂	2024	凹線
60		III			灰茶	ミガキ	ミガキ		708	屈曲
61		II	精製深鉢		茶				1049	凹線
62		III	精製深鉢		明橙	ミガキ	ミガキ	砂	819	凹線
63		III	深鉢		暗茶	ナデ	ナデ	砂	1389	外面煤付着
64		II	深鉢		明橙	条痕	条痕	砂	2045	2047 2157
65		II	深鉢		淡橙	ナデ	ナデ	砂	1861	
66		III	深鉢		灰茶	ナデ	ミガキ	砂	876	外面煤付着
67			深鉢		黄褐	条痕	ヨコナデ			完形品 外面煤付着
68		III	深鉢		赤	ナデ	ナデ	砂	314	尖底 322 328 339
69		III	深鉢		橙	ナデ	ナデ	砂	143	尖底
70		II	深鉢		明橙	ナデ	ナデ	砂	1009	貼付底
71		III	精製深鉢		黄灰	ミガキ	ミガキ		872	内面1条凹線
72		III	精製深鉢		黄灰	ミガキ	ミガキ		872	内面1条凹線
73		III	精製深鉢		黒灰	ミガキ	ミガキ		272	外面1条凹線
74		I	精製深鉢		灰	ミガキ	ミガキ		1153	外面1条凹線
75		溝内	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ		1132	ヒレ状突起
76		III	精製深鉢		灰	ミガキ	ミガキ		806	
77	0-20	II	精製深鉢		黒茶	ミガキ	ミガキ		1027	外面1条凹線
78		I	精製深鉢		黒茶	ミガキ	ミガキ		581	外面1条凹線
79		III	精製深鉢		暗茶	ミガキ	ミガキ		227	外面1条凹線
80		III	精製深鉢		明茶	ミガキ	ミガキ		924	内面1条凹線
81		II	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ	カクセン	1945	内外面1条凹線
82		III	精製深鉢		淡橙	ミガキ	ミガキ		367	外面1条凹線
83		II	精製深鉢		淡橙	ミガキ	ミガキ		2156	外面1条凹線
84		II	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ		230	外面1条凹線
85		III	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		931	外面1条凹線
86		II	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ		1848	外面1条凹線
87		III	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		460	外面1条凹線
88		II	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		1891	内面1条凹線
89		II	精製深鉢		茶灰	ミガキ	ミガキ		1827	外面1条凹線
90		I	精製深鉢		黄灰	ミガキ	ミガキ		86	外面1条凹線
91		II	精製深鉢		黒	ミガキ	ミガキ		1916	
92		II	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		201	外面1条凹線
93		III	精製深鉢		灰	ミガキ	ミガキ		57	
94		II	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		1852	外面1条凹線
95		II	精製深鉢		黄灰	ミガキ	ミガキ		1934	
96		I	精製深鉢		橙	ミガキ	ミガキ		1	内外面1条凹線
97	2 坑		精製深鉢		黄茶	ミガキ	ミガキ		2145	2212
98		II	精製深鉢		灰茶	ミガキ	ミガキ		1028	
99		II	精製深鉢		黄灰	ミガキ	ミガキ		1029	
100		I	精製深鉢		灰	ミガキ	ミガキ		1106	

表6 土器観察表(3)

番号	地点	層	器種	種別	色調	器面調整		胎土	取上番号	備考
						内面	外面			
101		Ⅲ	精製浅鉢		黄 灰	ミガキ	ミガキ		240	
102		Ⅲ	精製浅鉢		灰 茶	ミガキ	ミガキ		142	
103		Ⅲ	精製浅鉢		黒 灰	ミガキ	ミガキ		381	
104		Ⅲ	精製浅鉢		茶	ミガキ	ミガキ		129	
105		Ⅱ			黒 灰	ナ デ	ナ デ		1929	はりつけ文にキザミを施す
106	3 住				黒 茶	ナ デ	ナ デ		1251	口唇部外端にキザミを施す
107		Ⅱ			橙			砂	27	貝殻腹縁刺突
108		Ⅱ			黄 褐			金雲母	1038	
109		Ⅱ			黄 褐				21	円形はりつけ文
110		表採			黒	ナ デ	ナ デ			凹点刺突
111		表採			明 茶	貝殻条痕	ナ デ			凹点による文様
112	K-16	Ⅱ			茶		ナ デ	砂		凹点による文様
113		Ⅲ			明 橙	ナ デ	ナ デ		2098	沈線による孤文
114		Ⅲ			明 橙	ナ デ	ナ デ		2098	沈線による孤文
115		Ⅲ			茶	ナ デ	ナ デ		365	沈線
116		Ⅲ			淡 橙	ナ デ	ナ デ	小 石	798	4条凹線
117		Ⅱ			明 茶	ナ デ	ナ デ		1021	沈線
118		Ⅱ			黄 褐	ナ デ	ナ デ		2033	
119	F-20	Ⅲ			黄 茶	ナ デ	ナ デ	金雲母	714	
120		Ⅱ			灰 茶	ナ デ	ナ デ		1947	
121		Ⅰ			明 橙	条 痕		砂	602	甍目圧痕
122		Ⅱ	甍型土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1191	口唇凹 内面張出
123		Ⅰ	甍型土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ		631	
124			甍型土器		黒 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	648	口唇凹
125		Ⅰ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	596	
126			甍型土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		667	口唇凹
127		Ⅱ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	7	口唇凹
128		Ⅲ	甍型土器		赤 褐	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	467	口唇凹
129		表採	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母		内面張出
130		Ⅱ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1883	内面張出 口唇凹
131		Ⅱ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		4	内面張出 口唇凹
132			甍型土器		灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1244	内面張出 外面煤付着 1251
133	3 住		甍型土器		灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1753	内面張出 外面煤付着
134	3 住	Ⅱ	甍型土器		茶 灰	ヨコナデ	ヨコナデ		1811	
135		Ⅱ	甍型土器		淡 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1209	内面張出 1613
136	3 住		甍型土器		灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1242	内面張出 3条突帯 1243
137		Ⅰ	甍型土器		灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1095	内面張出 口唇凹
138		Ⅱ	甍型土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1726	
139		Ⅱ	甍型土器		黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1004	
140		Ⅱ	甍型土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	6	口唇凹
141		Ⅱ	甍型土器		黄 褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	997	
142		Ⅱ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1200	口唇凹
143		Ⅱ	甍型土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	2109	
144	2 住		甍型土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1280	内面張出
145		Ⅱ	甍型土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1803	
146	D-19	Ⅱ	甍型土器		暗 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		984	口唇凹
147	K-16	表採	甍型土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ			口唇凹
148	K-16	Ⅱ	甍型土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母		口唇凹
149		Ⅱ	甍型土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		987	
150		Ⅰ	甍型土器		黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	494	突帯(3)

表7 土器観察表(4)

番号	地点	層	器種	種別	色調		器面調整		胎土	取上番号	備考
					内面	外面	内面	外面			
151	3 住		甕形土器		灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ			1066	
152			甕形土器		黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1239	突地(3)	1751
153		II	甕形土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1031	突地(3)	
154		II	甕形土器		淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		985	突地(2)	
155	2 住		甕形土器		黄 灰	指	指		1296	住居内	ミニチュア甕形脚部
156		I	甕形土器		橙		板状工具	砂	1079	充実脚部	1条凹線
157			壺形土器		淡 橙	ナ デ	ミ ガ キ	小 石	668	突帯頸部	4条 胴部 2条
158		II	壺形土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1012	又状口縁	内面突帯
159		II	壺形土器		明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1018	又状口縁	内面突帯
160		II	壺形土器		明 橙		ヨコナデ		1713	又状口縁	
161		II	壺形土器		暗 橙		ヨコナデ	金雲母	1680	又状口縁	
162		II	壺形土器		黒 灰	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	43	又状口縁	
163		II	壺形土器		黒 灰	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1188	又状口縁	
164		II	壺形土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1781	内面突帯	2条
165		II	壺形土器		黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1148	内面突帯	2条
166		II	壺形土器		黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1029	内面突帯	
167	2 住		壺形土器		淡 橙	ヨコナデ	ミ ガ キ		2016	口唇部凹	
168	Q-21	表採	壺形土器		明 橙	板状工具	ヨコナデ	金雲母		内面突帯	2条
169			壺形土器		黒 茶	ヨコナデ	ヨコナデ		1387	又状口縁	
170		II	壺形土器		明 橙	板状工具	ミ ガ キ	金雲母	1159	内面突帯	2条 1163 1164
171		II	壺形土器		明 橙	ヨコナデ	ミ ガ キ	金雲母	1009	突帯(4)	1017 1739 1740
172	P-21	溝内	壺形土器		橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	956	突帯	
173	3 住				灰 茶	板状工具	ヨコナデ	金雲母	1245	突帯(1)	煤付着
174		II			明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1218	突帯(4)	
175		II			明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		26	突帯(1)	
176		II			灰 茶		ヨコナデ	砂	2076	突帯(3)	
177		I			灰 茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1105	突帯(2)	
178		II			黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ		1684	突帯(2)	
179	N-21	II			灰 茶		ヨコナデ		1765	突帯(3)	
180		II			茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	41	突帯(2)	
181		III			明 橙		ヨコナデ		232	突帯(2)	
182	1 住	b			黄 茶	ヨコナデ	ヨコナデ		46	突帯(1)	
183		I			明 橙		ヨコナデ	砂	442	突帯(2)	
184		II			暗 灰		ヨコナデ	砂	23	突帯(2)	
185	1 住	c			橙		ヨコナデ		54	突帯(1)	
186	K-16	II			灰 茶		ヨコナデ			突帯(1)	
187		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1806	突帯(1)	突帯凹
188	P-20	溝内			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		957	突帯(1)	
189		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1653	突帯(1)	突帯凹
190		II			黄 褐	ヨコナデ	ヨコナデ		994	突帯(1)	
191		II	大型甕		橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	1148	タガ	
192		III			明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		2084	内面張出	
193	K-24	III			明 茶	ヨコナデ	ミ ガ キ		896	突帯(1)	
194		II	甕形土器		黄 茶	ナ デ	ナ デ	砂	24	煤付着	突帯 やや内湾
195		II	甕形土器		黄 灰	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1949	煤付着	やや内湾
196	K-16	II	甕形土器		黄 灰	ヨコナデ	ヨコナデ	砂			
197		II			淡 橙	ヨコナデ	ヨコナデ	小 石	20	煤付着	突帯
198		II			灰 黄	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	19	突帯	
199		II			灰 黄	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	20	突帯	煤付着
200		II			明 橙	ヨコナデ	ヨコナデ		20	突帯	指おさえ

表8 土器観察表(5)

番号	地点	層	器種	種別	色調	器面調整		胎土	取上 番号	備考
						内面	外面			
201		II			灰黄	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	22	突帯指おさえ
202		II			黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	20	突帯
203		II			白黄	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	14	突帯+布目工具によるキザミ
204		II			明橙				30	突帯+キザミ
205		II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1964	突帯+キザミ 煤付着
206	K-16	II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ			突帯+キザミ
207		III			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		531	突帯+キザミ
208		II	壅		黄茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	2	突帯+不明工具によるキザミ
209		II	壅		灰茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	21	突帯指おさえ
210		II			灰黄	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1950	突帯+布目工具によるキザミ
211	K-16	II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂		突帯+キザミ
212		II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ		28	突帯+キザミ
213		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		32	突帯+キザミ 煤付着
214		II			黒灰	ナ デ	ナ デ	砂	17	突帯+キザミ
215	K-16	表探			黄褐	ナ デ	ナ デ	砂		突帯+×キザミ
216	K-16	表探			明橙	板状工具	ヨコナデ			突帯+×キザミ
217		II			白黄	ナ デ	ナ デ		12	突帯+キザミ
218		II			白黄				8	突帯2条+キザミ
219		II			白黄	ナ デ			9	突帯2条+キザミ
220		II			白黄	ナ デ	ナ デ		13	突帯2条+キザミ
221		II			白黄	ナ デ	ナ デ		10	突帯2条+キザミ
222		II			黄灰	ヨコナデ	ナ デ		20	内湾口縁 口唇部沈線 古墳?
223		II			黄灰	ヨコナデ	ナ デ		20	内湾口縁 口唇部沈線 古墳?
224		II			淡橙	ナ デ	ナ デ		2111	
225	K-16	II			橙	ナ デ	ナ デ			
226		II			茶	ナ デ	ナ デ		1026	
227		III			灰茶	ミガキ	ミガキ		903	縄文晩期?
228	K-16	II			白黄					古墳?
229		II			白黄	ヨコナデ	ヨコナデ		1981	
230		II			灰黄	ヨコナデ	ヨコナデ		495	
231		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1187	内面沈線
232		III			茶	ヨコナデ	ヨコナデ		363	
233		III			黒茶	ヨコナデ	ヨコナデ		807	
234		III			淡橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1400	
235		II			淡橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1836	
236		II			灰	ミガキ	ナ デ		605	
237		III			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ		2099	弥生?
238		表探			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ			
239		II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ	小石	517	
240		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ	小石	520	
241		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1642	
242		II			黄灰	ヨコナデ	ヨコナデ		1186	口唇部面取
243		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1817	口唇部面取
244		III			黄灰	ミガキ	ナ デ		670	口唇部面取 縄文晩期?
245		II			黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	1629	口唇部面取
246	K-16	II			黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂		口唇部面取
247	2柱	II			灰黄	ヨコナデ	ヨコナデ		1283	口唇部凹 弥生?
248		III			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		195	口唇部面取
249		III			黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ		875	
250		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		2103	口唇部面取

表9 土器観察表(6)

番号	地点	層	器種	種別	色調	器面 内面	調整 外面	胎土	取上 番号	備考
251		I			暗橙	ミガキ	ヨコナデ		642	縄文晩期?
252		II	深鉢		黄褐	ナデ	ナデ	砂	18	口縁肥厚 内面凹 縄文晩期?
253		II	深鉢		茶	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	2189	口縁肥厚 内面凹 縄文晩期?
254	3坑				黒茶	ヨコナデ	ミガキ		1466	縄文晩期?
255		II			黒茶	ミガキ	ミガキ		958	口縁肥厚 縄文晩期?
256		III			赤褐	ナデ	ナデ		750	
257		III			暗茶	ミガキ	ナデ	金雲母	748	縄文晩期?
258		III			黄茶	ミガキ	ミガキ		685	口縁部幅広肥厚 縄文晩期?
259		II			黄灰	ナデヨコ	ナデヨコ		975	縄文晩期?
260		II			茶灰	板状工具	板状工具		2053	縄文晩期?
261		II			黒灰	ナデヨコ	板状工具		2050	口唇部面取 縄文晩期?
262		III			明橙	ミガキ	ナデヨコ	砂	61	口唇部面取
263		II			淡橙	ヨコナデ	ヨコナデ		40	突帯(1)
264		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母	42	突帯(1)
265		II			橙				981	突帯(1)
266	K-16	II			灰			砂		突帯(1)
267		I			明橙		ヨコナデ	金雲母	1051	突帯(1)
268		II			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1002	突帯(1)
269	M-27	III			明橙			砂	834	突帯(1)
270		I			橙	ヨコナデ	ヨコナデ		1088	突帯(1)
271		II			茶灰	ナデ	ヨコナデ	砂	1150	突帯(1)
272		表採			橙	ヨコナデ	ヨコナデ			突帯(1)
273		II			明橙	ナデ	ヨコナデ		16	張出底部
274		III			淡橙	ナデ	ヨコナデ		938	張出底部
275		II			明橙	ナデ	ヨコナデ	砂	1023	張出底部
276		III			明橙	ナデ	ヨコナデ		712	張出底部
277		I			黄褐	ナデ	ヨコナデ		644	
278		II			明橙	ナデ	ヨコナデ	砂	3	古墳?
279		II			明橙			砂	1000	
280		II			白黄			砂	1939	古墳?
281		II			白橙			砂	25	張出底部
282		II			茶黄			砂	1195	
283		II			茶黄		ナデ		2021	
284		II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ		39	中空脚部 古墳?
285		II			明橙	ヨコナデ	ヨコナデ		38	中空脚部 古墳?
286	K-16	II			明橙					
287		II			白橙	ナデ	ナデ		33	背の低い中空脚部 36
288					白橙	ナデ	ヨコナデ	砂	194	上底
289		II			橙	ナデ	ナデタテ	砂	1143	1166 1158 2061 2062 2063 2064
290		II			白橙	指おさえ	ナデ		5	高坏脚部?
291		II			白橙	指おさえ	ナデ		5	高坏脚部?
292	H-20	構内			明橙	ロクロ			735	溝内 近世無 釉陶器

第9節 石器

石器は、打製石鏃・磨製石鏃・磨製石器・石匙・削器・打製石斧・磨製石斧・磨石等が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・砂岩・安山岩がみられた。

石鏃 (293～294)

石鏃には、打製と磨製がみられた。293は表土から出土したもので、頁岩を石材とした打製石鏃ある。先端部は鋭く、側辺がまっすぐで三角形を呈し鋸歯状である。基部は、逆刺が鋭く抉りが深い。294は表土層から出土したもので、気泡の少ない良質の黒曜石を石材とした打製石鏃である。先端部は鋭く、側辺がまっすぐで三角形を呈する。基部は、片脚が極端に違い、抉りが浅い。295はJ-16区Ⅲ層から出土したもので、頁岩を石材とした打製石鏃である。先端部はやや鈍く、側面が極端に外曲する。基部は、逆刺が鋭く抉りが極めて深い。296はJ-16区Ⅲ層から出土したもので、気泡の少ない良質の黒曜石を石材とした打製石鏃である。先端は鋭く、側面がやや外湾し最大幅が下方にある。基部は、逆刺が鋭く抉りがやや深い。297は、N-21区Ⅱ層から出土したもので、片脚部が破損しているが、296同様の石材で、形態も類似している。298～300は磨製石鏃で、頁岩を石材としたものである。298は、偏平無茎で、基部に抉りがみられる。鏃ははっきりし先端部付近で両方にわかれ基部まで続く。鏃以外では研磨痕が顕著にみられる。299は制作途中のものともみられ、基部付近に研磨痕がみられる。300は、磨製石鏃の再生途中のものである。片側面には鏃がみられ、丁寧な研磨である。

磨製石器 (301)

301は、両端が欠損していて形態が不明であるが、丁寧な研磨痕、鏃の状態から石剣状の石器と思われる。

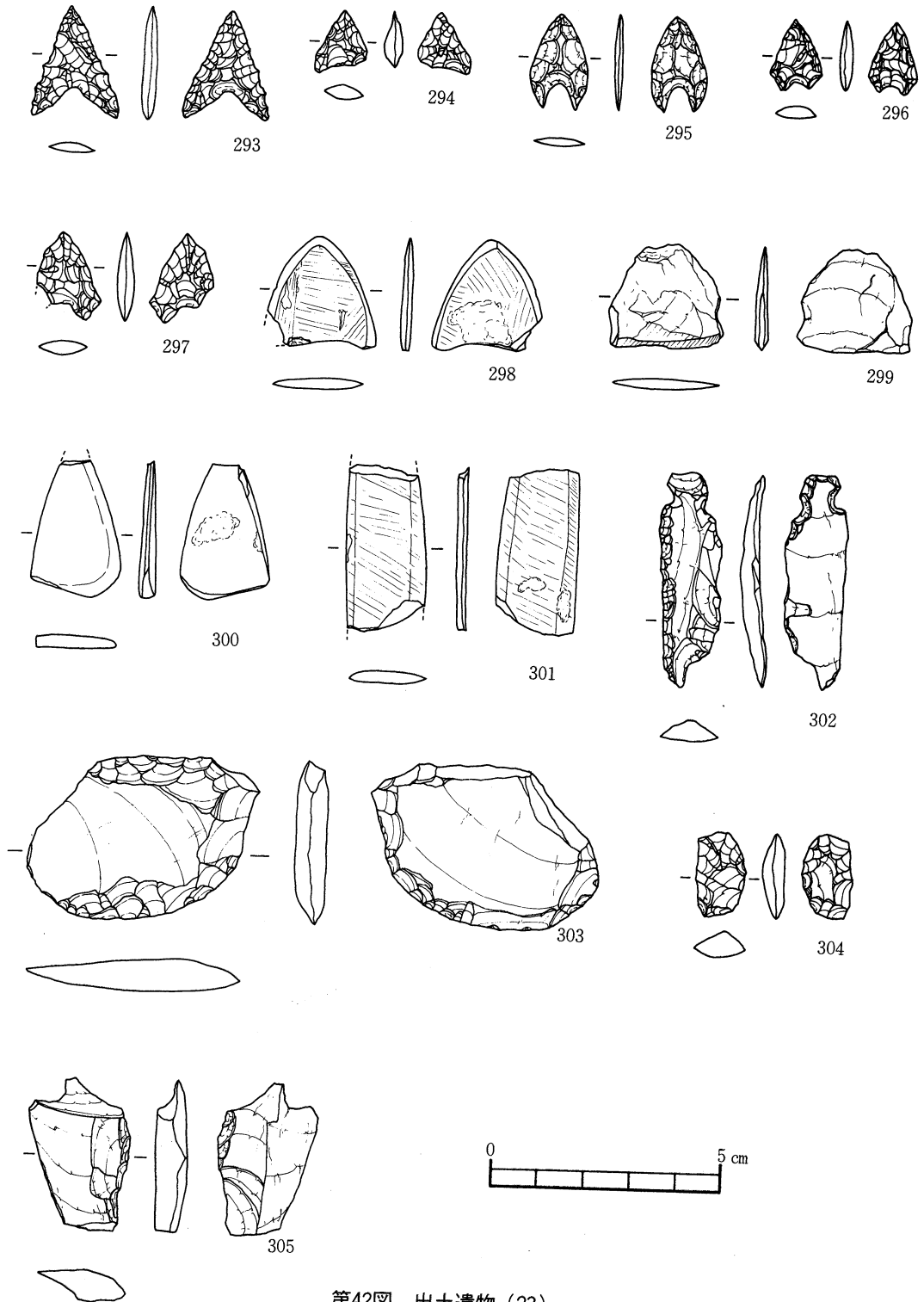
石匙 (302)

302は、頁岩の縦長剥片を利用した石匙である。両面からの剝離によって抉り部を形成し、側面は丁寧な剝離によって刃部を形成している。

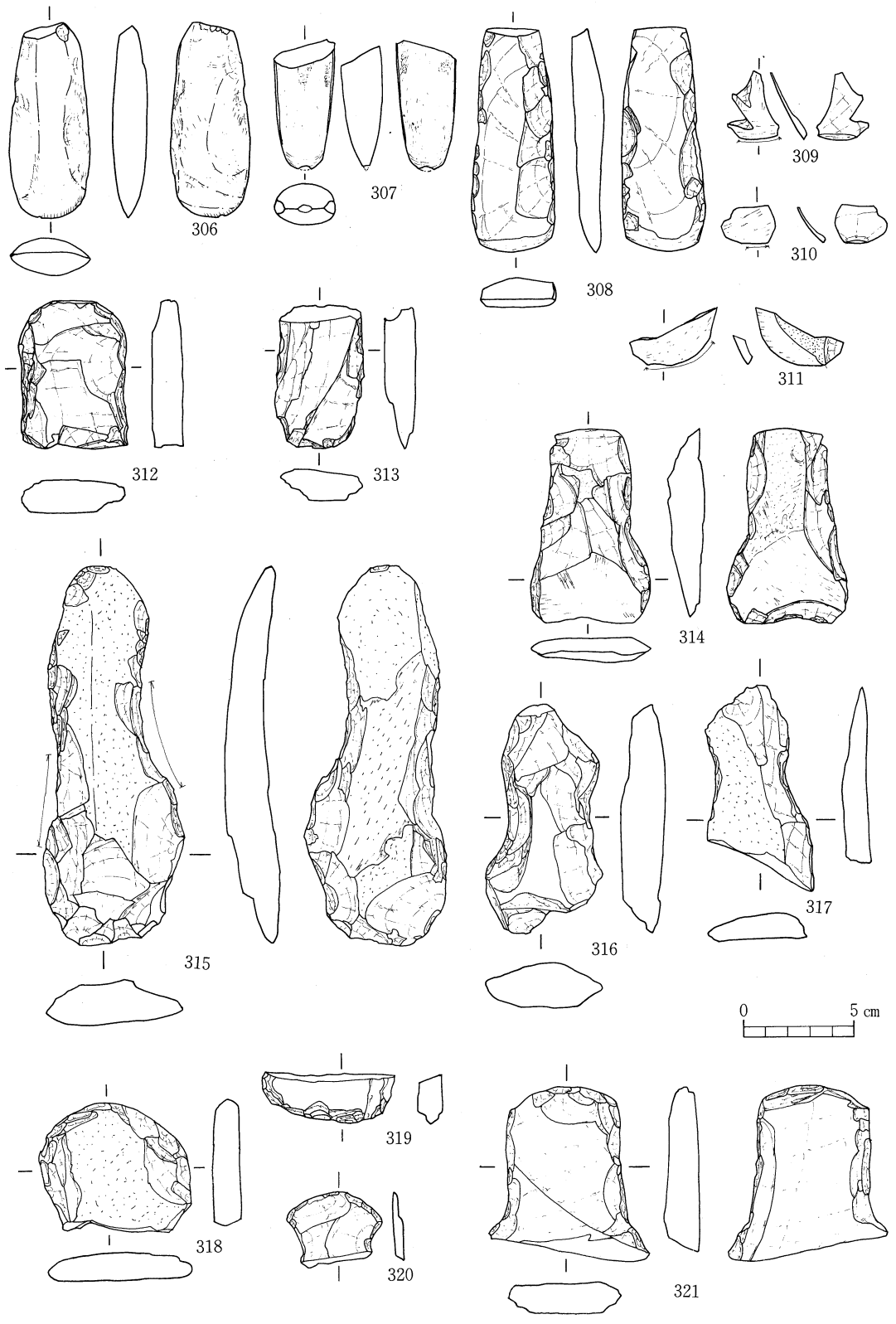
削器 (303～305)

303は、チャートの横剥ぎ剥片を石材とし、縁辺部には丁寧な両面加工が施されている。304は、気泡の多い黒曜石を石材とし、外湾する側辺部と直行する側辺部をもち、交互剝離により形成された石器である。刃部の形成により削器に分類した。305は、頁岩を石材としたもので、片側辺に調整剝離が施されている。

遺物番号	区	層	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺物番号	区	層	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
293	表土		2.9	2.4	0.3	0.83	頁岩	300	L-19	Ⅱ	(3.0)	1.9	0.35	2.36	頁岩
294	表土		1.2	1.1	0.4	0.41	黒曜石	301	N-21	Ⅱ	(3.6)	1.7	0.2	2.45	頁岩
295	J-16	Ⅲ	2.0	1.2	0.2	0.46	頁岩	302	I-19	Ⅲ	4.7	1.3	0.4	3.18	頁岩
296	J-16	Ⅲ	1.5	1.1	0.3	0.40	黒曜石	303	K-16	表	3.5	4.6	0.7	15.80	チャート
297	N-21	Ⅱ	1.9	(1.4)	0.4	0.73	黒曜石	304	3号土坑		1.8	1.1	0.45	0.97	黒曜石
298	N-21	Ⅲ	2.5	(2.4)	0.25	1.59	頁岩	305	3号土坑		(3.2)	2.1	0.7	4.61	頁岩
299	L-25	Ⅲ	2.3	2.5	0.3	1.78	頁岩								



第42図 出土遺物 (23)



第43図 出土遺物 (24)

磨製石斧 (306~312)

306~308の小形のもの、それ以上の大きさを持つものであろう309~312との二類に分類できる。前者はいずれも直刃の両刃を持ち、後者のうち309~311は両刃でおそらくは直刃であろう。この309~311の資料は刃部の破片であり、作業中のアクシデントによる剝離と思われる。これらは蛤刃の石斧が想定されるが、311は312と同一母岩であり、同一個体の可能性もある。なお、蛤刃の石斧は今回の調査では検出されていないが、309・310の破片から、この遺跡の石器組成の中に組み込まれる可能性が指摘できるとと思われる。石材は306は硬砂岩、307~312は安山岩である。

打製石斧 (313~321)

図で見るとおり、バラエティーに富んだ組合せであるが、中で注目したいのは、314・315・321の3点である。314は安山岩の偏平礫素材であるが、茎部の折損後も再加工して使われたと思われる、刃部の損傷が著しい。315は茎部両側線の稜の摩耗が著しく、着柄の状態が想起される。321はその形状から、縄文後期~晩期にかけてよくみられる卓球ラケット形の柄部と思われる。石材は、319が粘板岩である他はすべて安山岩である。

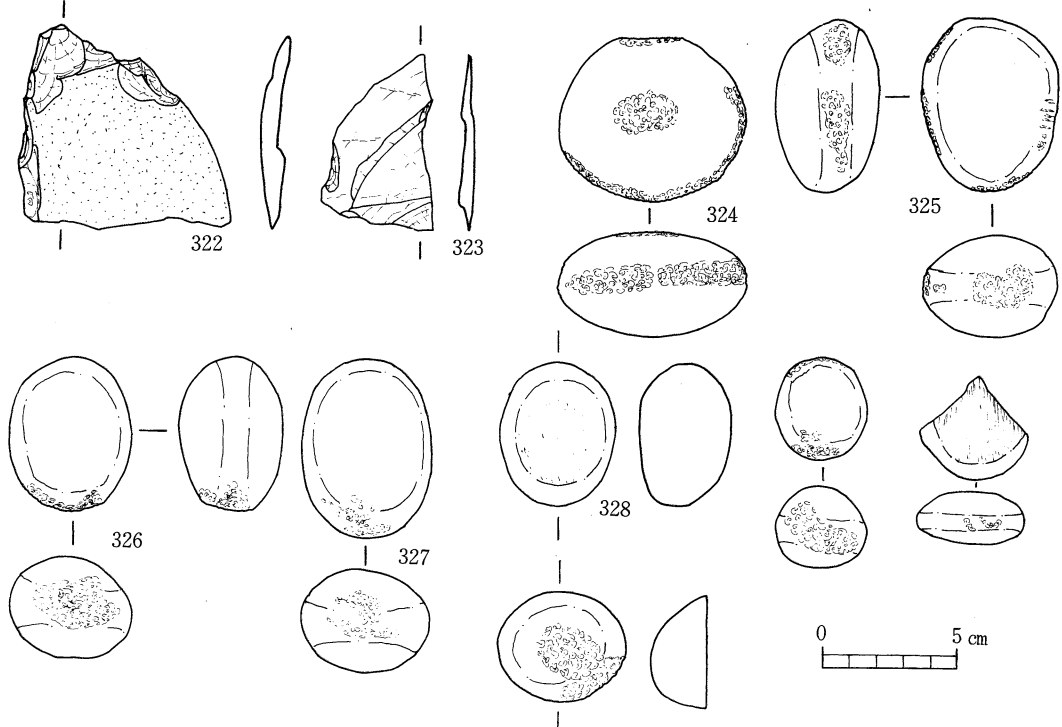
加工のある剥片 (322・323)

安山岩の横長剥片の側縁のリタッチがあり、リタッチのない辺りには摩耗がみられるものである。スクレイパーとして分類すべきものか？

叩石・磨石 (324~329)

すべて砂岩の小円礫を用いたものである。

(富田逸郎)



第44図 出土遺物 (25)

第4章 考察

縄文時代前期

前谷B遺跡では縄文時代前期に該当する土器として、点線文土器と相交孤文土器が出土した。昭和13年『史前学雑誌』に樋口清之氏と乙益重隆氏が書いた「鹿児島県加治木日木山洞窟遺跡の研究」の土器に近い土器が出土している。条痕文だけの土器と点線文、それに貝殻の先を交互に押し付けてゆく相交孤文をもつ3種類の土器が出土しており、これらを総称して日木山式土器と命名している。しかしながら、相交孤文あるいは貝殻鋸歯文という言葉は使われるものの、日木山式土器という名称は使われなくなっている。前谷B遺跡出土土器は縄文時代前期後半に位置づけられる深浦式土器の範疇に含まれる。現在一般的に使われている深浦式土器という名称はだいぶ範囲が広がっていて、轟式土器と曾畑式以外の縄文前期土器を深浦式と呼んでいるようである。

前谷B遺跡に隣接する前谷遺跡では深浦式土器に後続する春日式土器が大量に出土している。前谷遺跡の春日式土器は春日式土器の中でも中ごろの段階のもと考えられるが、尖底および丸底が全体の底部の24%を占めており、深浦式土器の伝統を色濃く残すものである。前谷遺跡集落の成立段階前に隣接する前谷B遺跡に生活の痕跡が確認されたことは意義深い。

縄文時代晩期

前谷B遺跡では3基の土坑と共に精製浅鉢形土器・深鉢形土器・蓆目圧痕をもつ土器や各種の石器が出土した。土器の中には中岳Ⅱ式土器に該当するものも含まれる。榎畑光博氏は中岳Ⅱ式土器を検討する中で、深鉢形土器に着目し三万田式と御領式に並行することを考えている。しかし、検討した土器の器種が深鉢に限られるため、浅鉢や他の器種との関係が明確にされていない。晩期土器編年の場合、前半の土器は深鉢を後半の土器は浅鉢を基準にするため本遺跡を含め同一遺跡に長時間にわたる土器が出土することになる。今後、各器種の型式組列を推し進めると共に、遺跡の中で各器種がどのようなセット関係になるのか追求してゆくことが課題である。現在鹿児島県での晩期土器の編年は御領式→上加世田式→入佐式→黒川式→刻目突帯文土器の流れが考えられている。これに加え曾於郡に限り中岳Ⅱ式土器がある。本遺跡の土器は、蓆目圧痕土器も出土していることから中岳Ⅱ式から黒川式の時期に該当すると考える。

曾於郡での晩期遺跡の数は県内でも特出しており、1988年9月現在の県内晩期遺跡359遺跡の内、実に41.5%にあたる149遺跡が曾於郡内に所在している。また蓆目圧痕土器を含む組織文土器出土遺跡数は県内全域の32遺跡例に対し、曾於郡内出土は56%の18遺跡にのぼる。これらのことは曾於郡内の縄文時代後半の歴史を考える上でさけて通れないデータである。

弥生時代の住居跡

2号住居跡の東側壁際中央にある2本のピットを伴う掘り込みは、鹿屋市王子遺跡でも同じ

例がみられる。王子遺跡では方形の住居跡の場合は壁際につき、円形の住居跡の場合は中央に設けられている。いまのところどの様な目的でつくられた施設であるのかの考えは持ち合わせていないが、興味深い課題である。

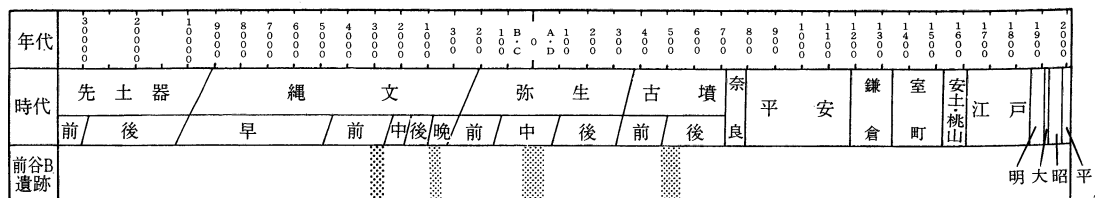
床面は硬く踏み固められており、掘り込み面からは約20cmほどの厚さがあった。すなわち、築造時に掘った面から20cm盛り上げて床面としているのである。床面となる部分はアカホヤ層とチョコ層の境からややチョコ層まで掘り込んでいる。アカホヤ層は火山噴出起源の地層であり、浸水性に富む。一方チョコ層は粘土質であり、帯水性に富む。したがってアカホヤ層とチョコ層との間に最も水が溜り易いことになる。この水気を排除するために20cmもの盛土をして床面としているのではなからうか。また同一粘土層であると住居内も住居外と同様に均一に浸水すると考えられ、これにも対応したと考えられる。今のところは机上論に過ぎないが、今後土間の民俗例を調べることや復元住居による実験等によって明らかにしてゆきたい。

文献

- 『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 1986.3 松山町教育委員会
 東和幸「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第23号 1989.6 鹿児島県考古学会
 桑畑光博「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列 —中岳Ⅱ式土器の再検討—」『鹿児島考古』第23号 1989.6 鹿児島県考古学会
 『鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡』 1988.10 鹿児島県考古学会
 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34） 鹿児島県教育委員会

第5章 まとめ

- 1、縄文時代前期後半の深浦式土器が出土した。
- 2、縄文時代晩期前半の土坑3基が発見された。
- 3、弥生時代中期後半の住居跡基が発見された。
- 4、住居跡は方形で2本の柱穴をもつ。いずれも張り出し部をもつ。
- 5、古墳時代後半の土器が出土した。



第45図 前谷B遺跡のタイムスケール

治正和成



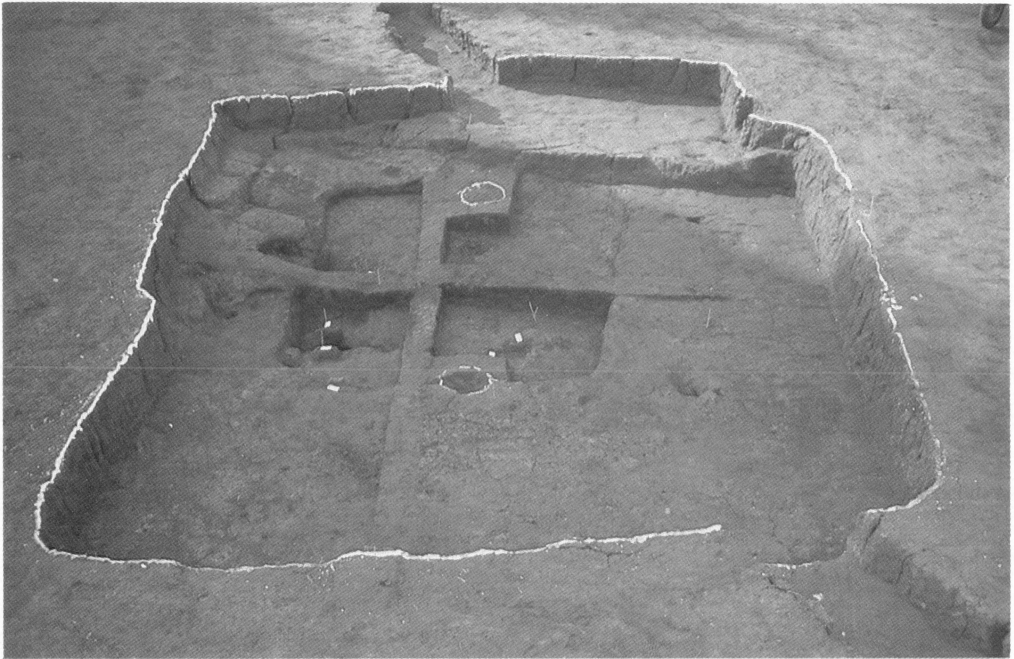
圖 版



縄文時代 3号土坑



弥生時代 1号住居跡



弥生時代 2 号住居跡



弥生時代 3 号住居跡



前谷B遺跡

前谷B遺跡遠景



弥生時代3号住居跡

図版 4 発掘風景

発掘風景
(K-16区周辺)



発掘風景
(O-19区周辺)

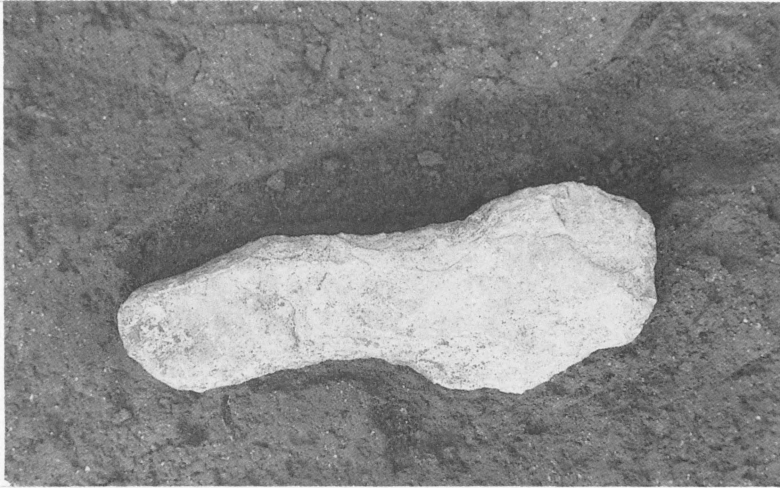


発掘状況
(N-27区周辺)

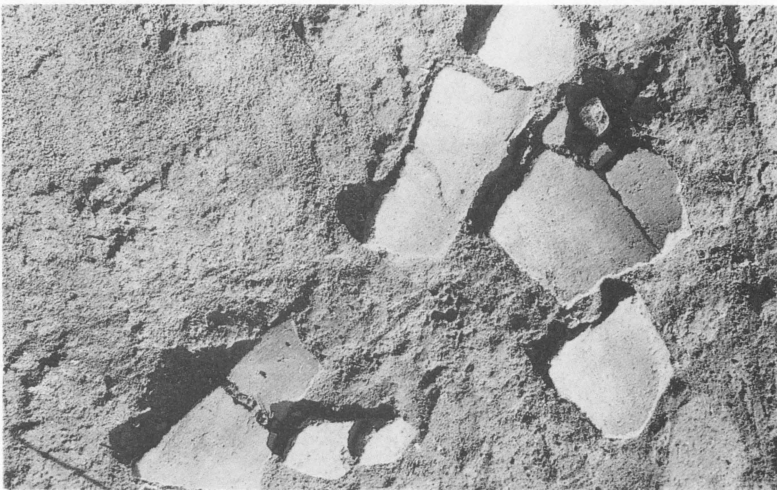




土器出土状況



石器出土状況



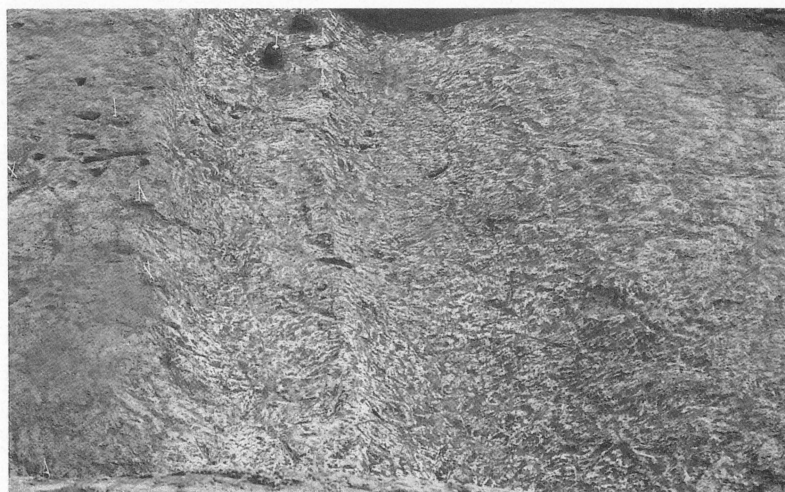
土器出土状況

図版6 近世溝

近世溝
(南から)



近世溝
(北から)



近世溝
(南から)





1号・2号土坑
(北から)



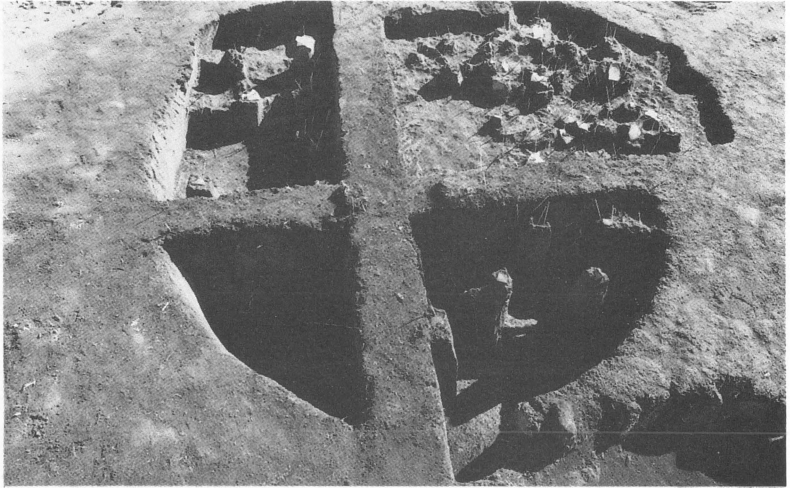
1号土坑
(東から)



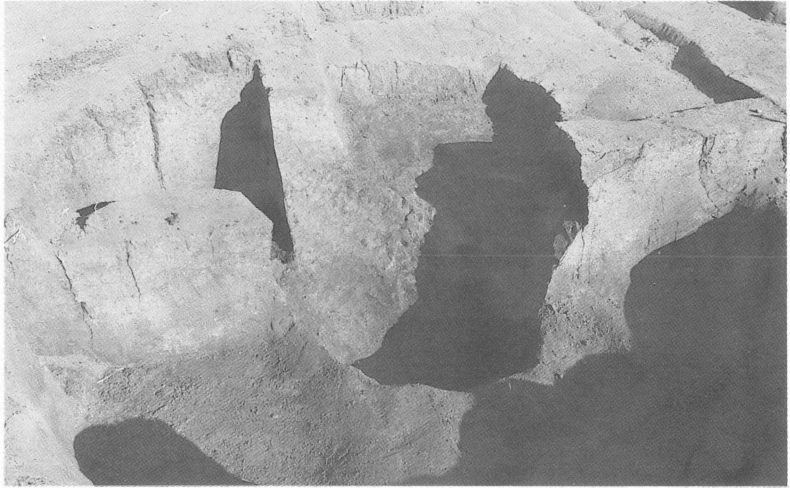
2号土坑
(北から)

図版 8 3号土坑(1)

3号土坑
遺物出土状況
(西から)



3号土坑
全 景
(南から)



3号土坑
埋土堆積状況
(南から)

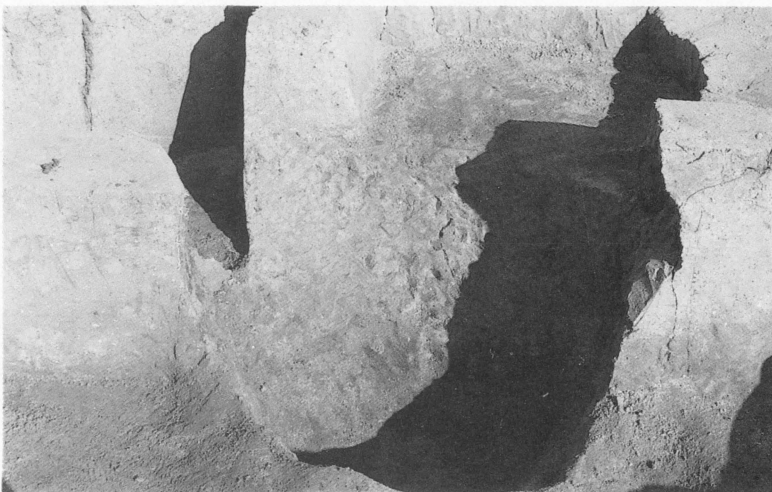




3号土坑
埋土堆積状況
(南から)



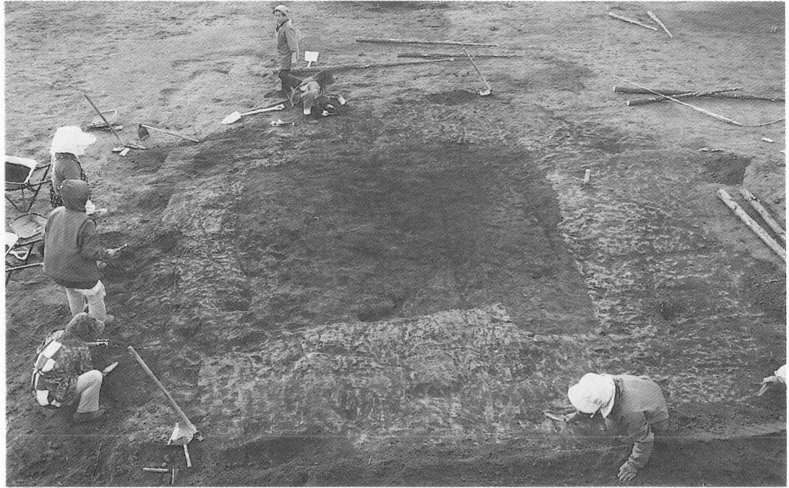
3号土坑
埋土堆積状況
(南から)



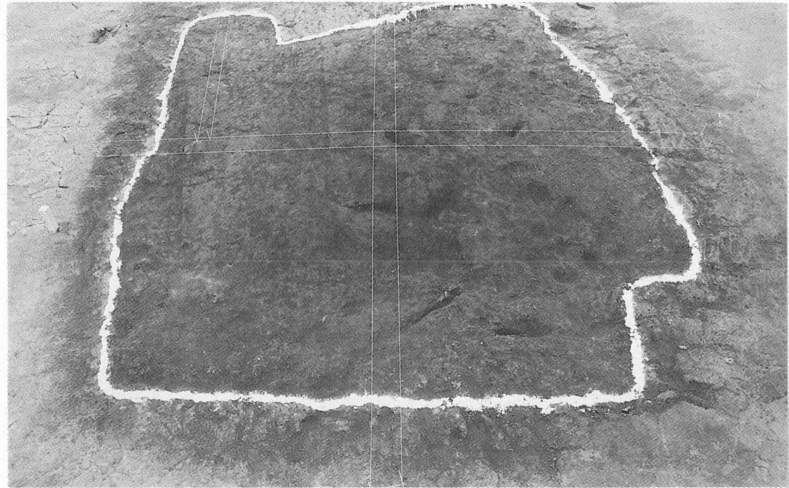
3号土坑
(南から)

図版10 1号住居跡(1)

1号住居跡
検出中
(東から)

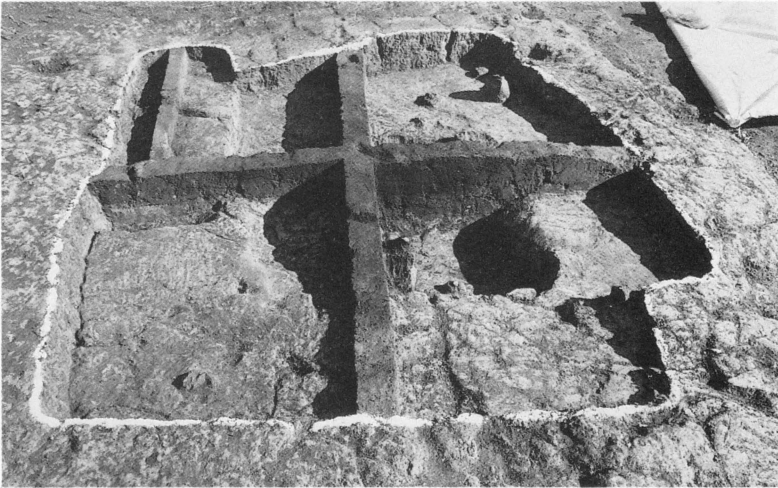


1号住居跡
検出状況
(西から)



1号住居跡
発掘中
(西から)





1号住居跡
床面？
(西から)



1号住居跡
床面？
(北から)



1号住居跡
埋土堆積状況

図版12 1号住居跡(3)

1号住居跡
床面？
(西から)

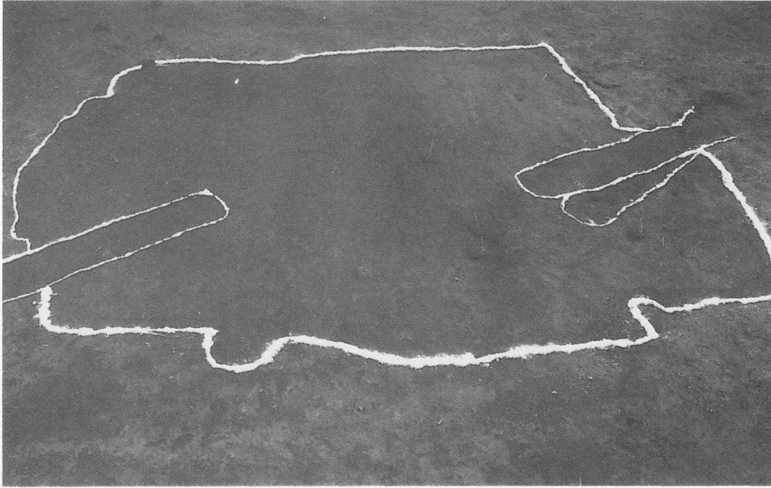


1号住居跡
掘り込み面
(西から)



1号住居跡
の大きさ





2号住居跡
検出状況



2号住居跡
床面
(西から)



2号住居跡
床面
(北から)

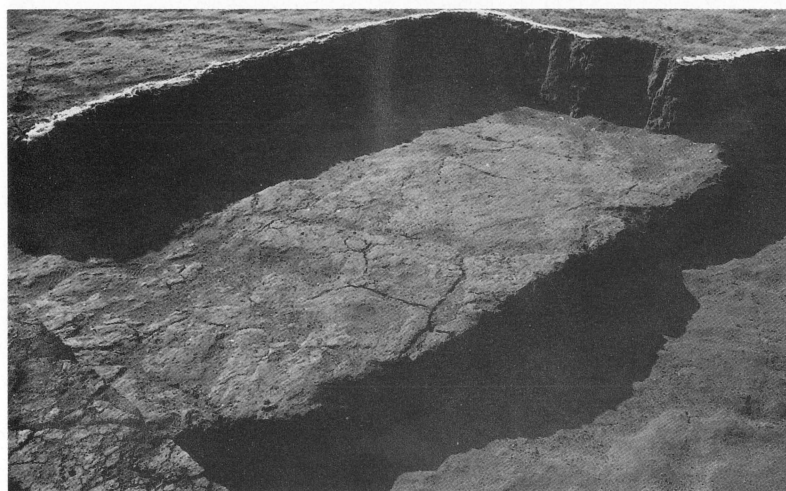
2号住居跡
壁側掘り込み



2号住居跡
壁側段

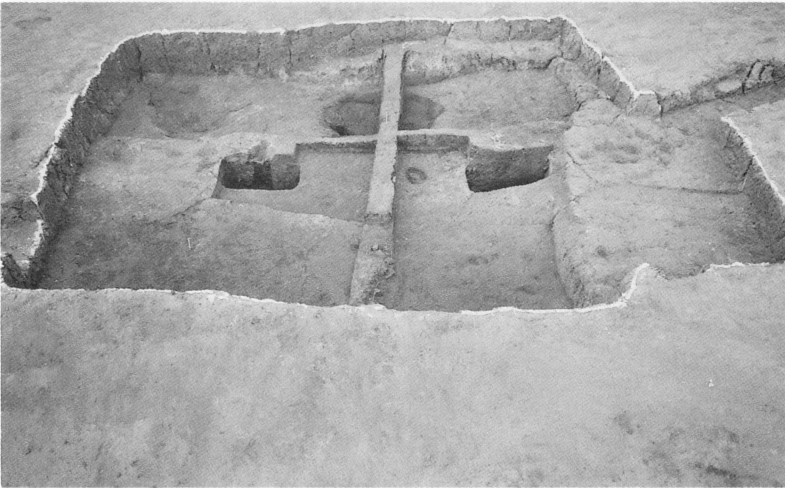


2号住居跡
張り出し部





2号住居跡
床 面
(北から)

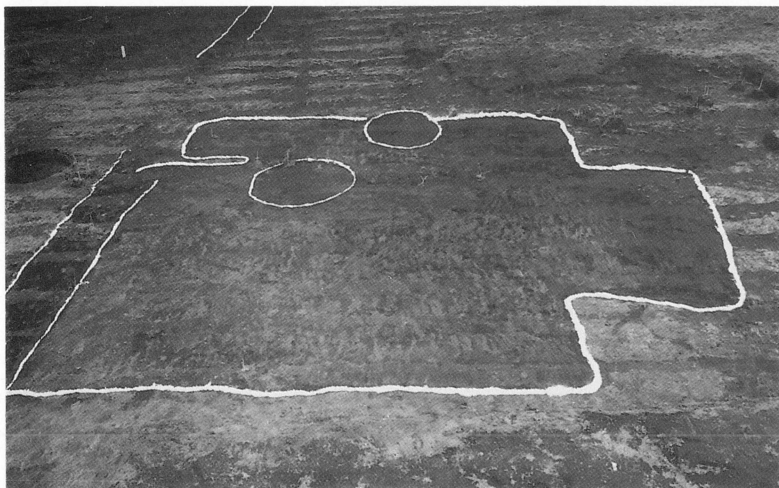


2号住居跡
刷り込み面
(西から)



2号住居跡
の大きさ

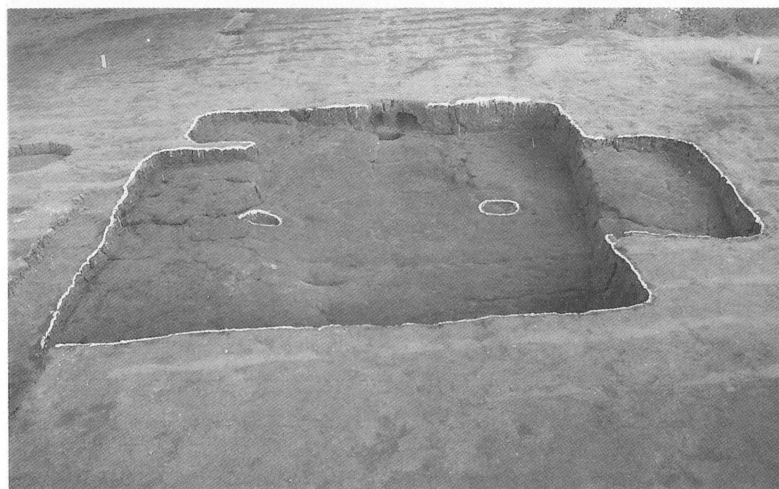
3号住居跡
検出状況



3号住居跡
床面
(北から)

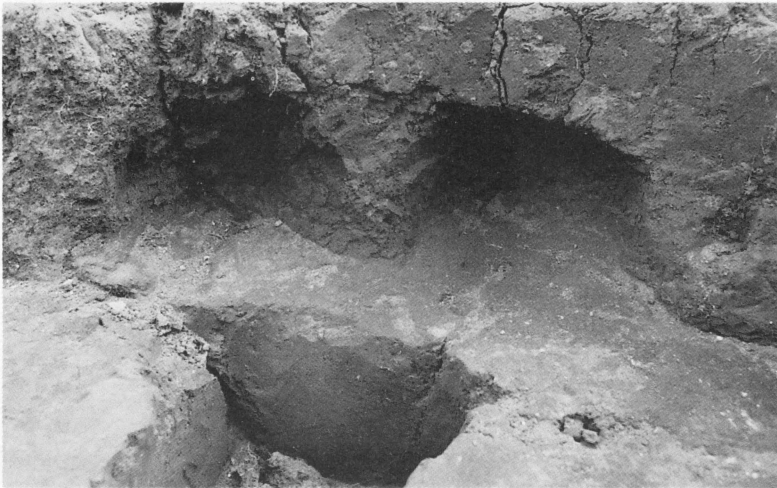


3号住居跡
床面
(西から)

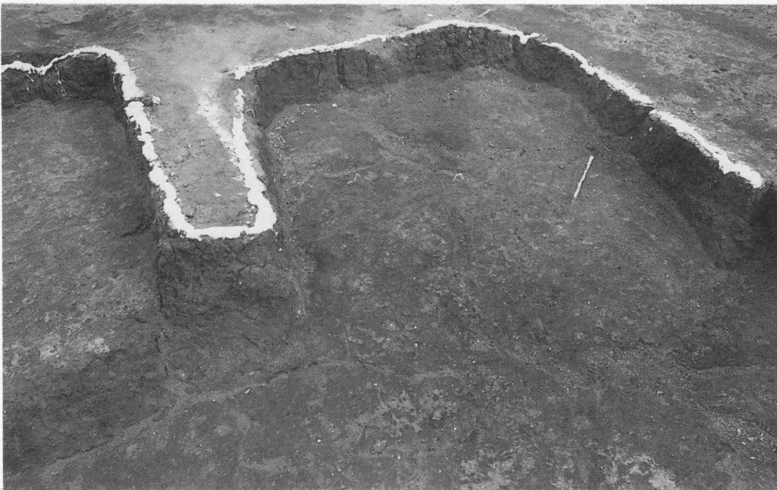




3号住居跡
張り出し部



3号住居跡
壁面掘り込み



3号住居跡
突出壁部

3号住居跡
掘り込み面
(北から)

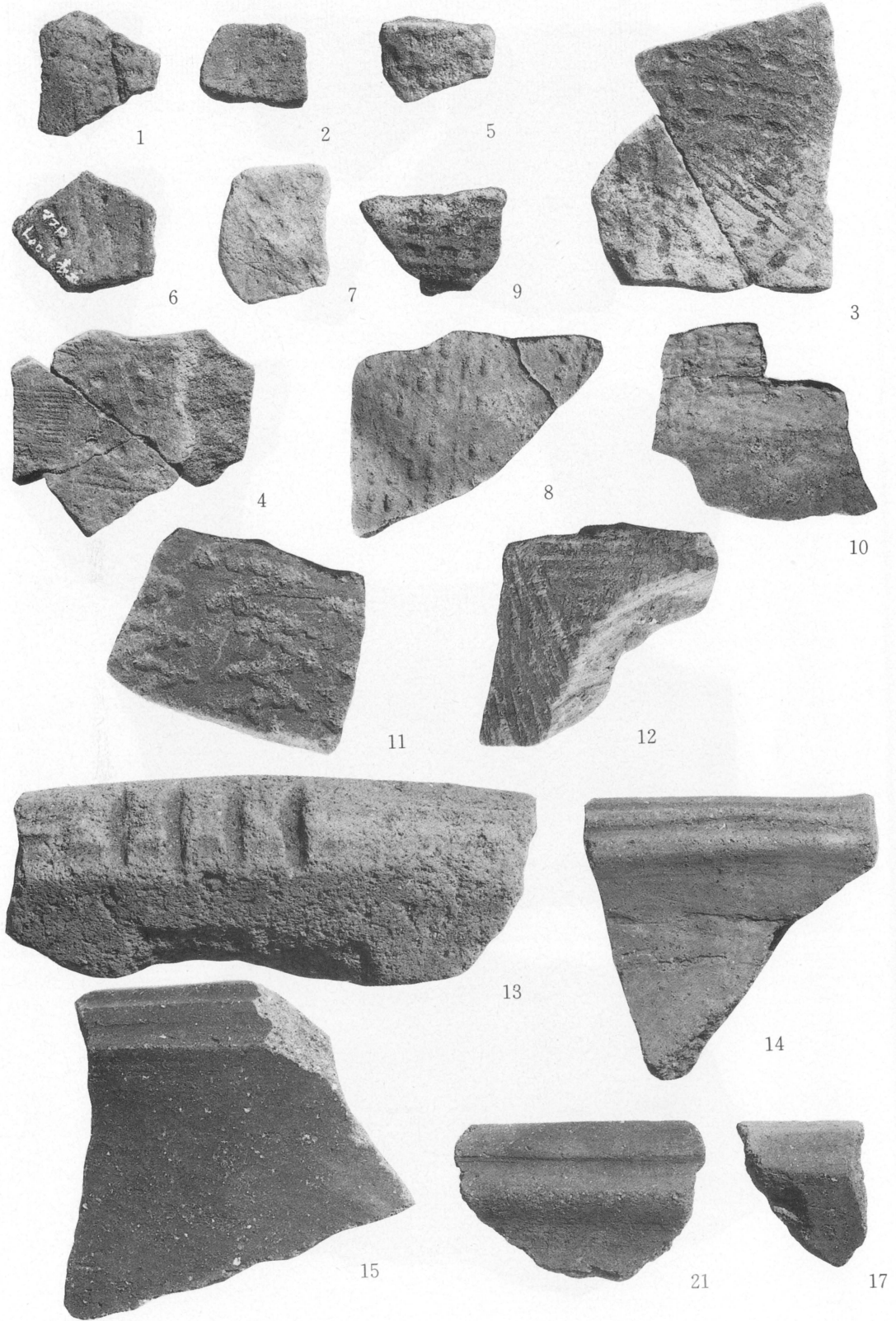


3号住居跡
掘り込み面
(西から)



3号住居跡
の大きさ

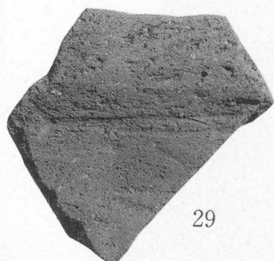








28



29



30



31



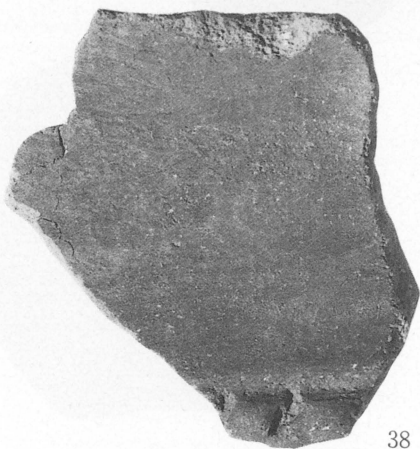
34



35



32



38



47



40



41



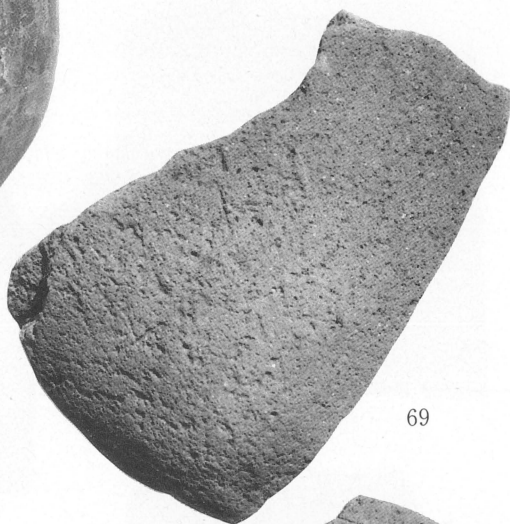
63



66



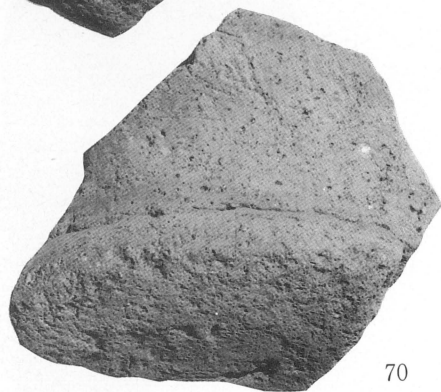
67



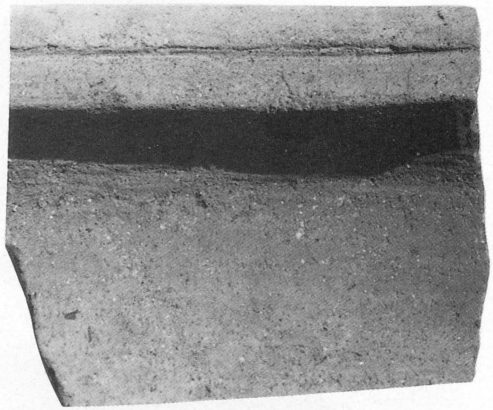
69



68



70



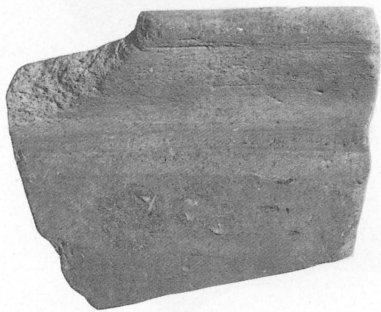
71



73



75



76



77



78



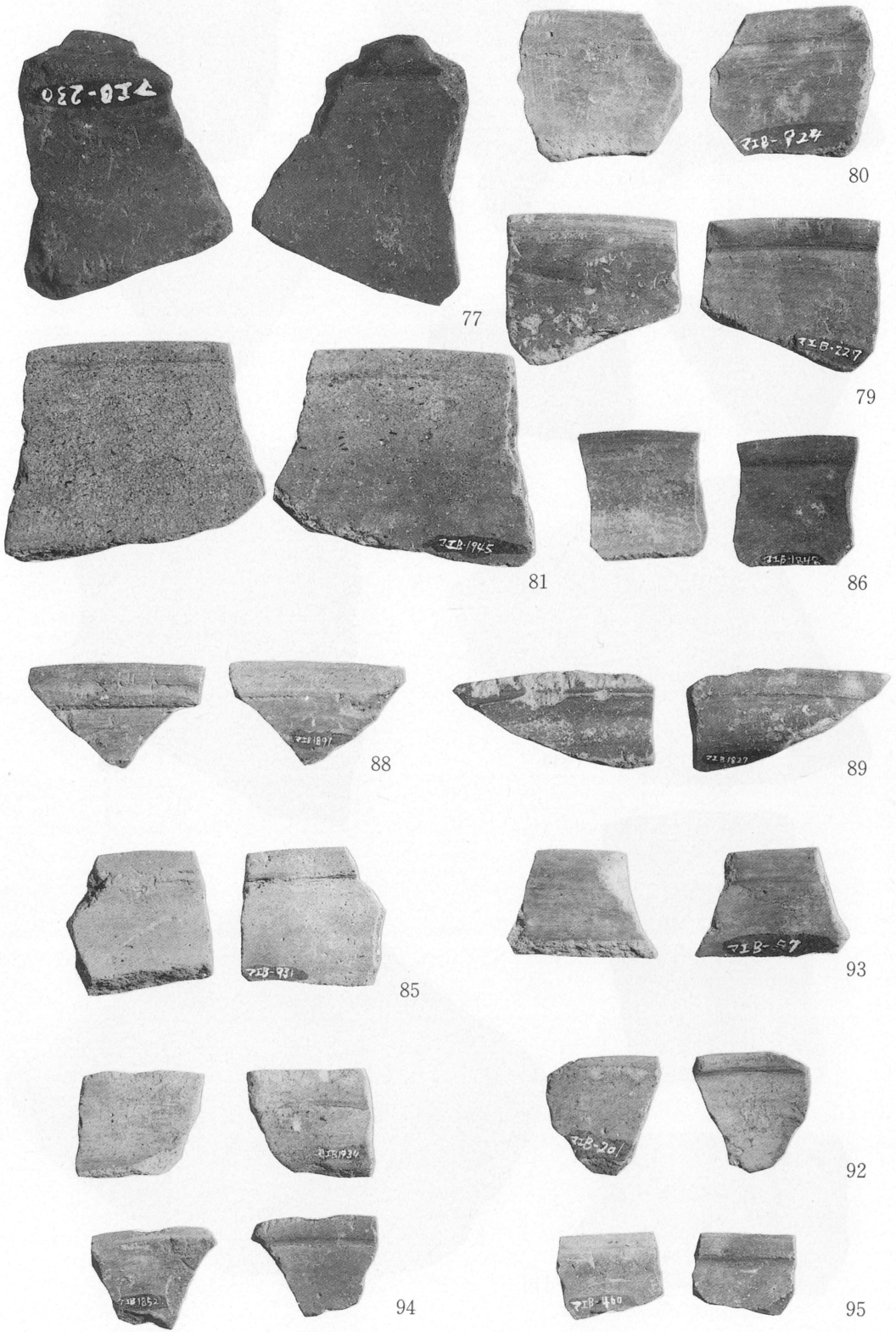
82



74



81





105



109



112



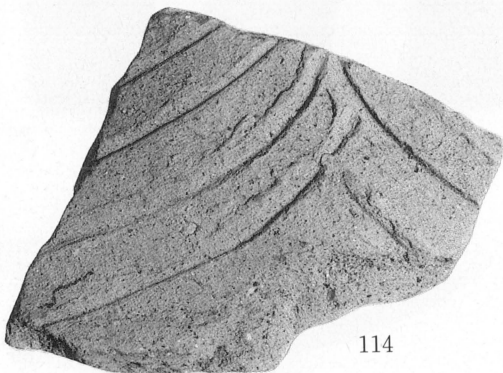
106



110



113



114



111



117



116



121



136



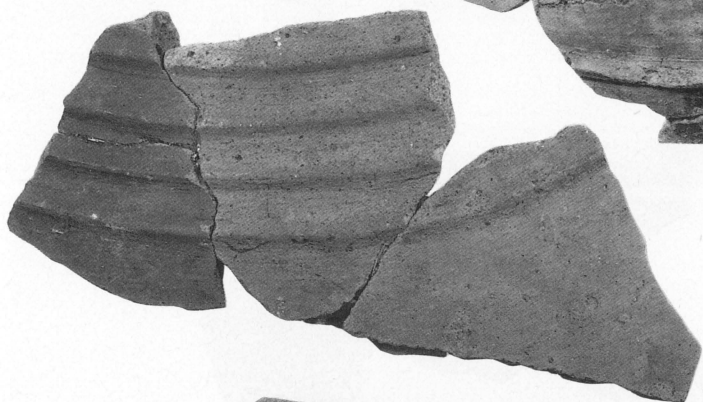
156



155



157



171



158



168



289



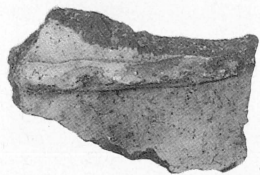
194



199



200



208



209



201



221



220



218



219



213



214



215



216



210



206



204



203



293



294



295



296



297



298



299



300



301



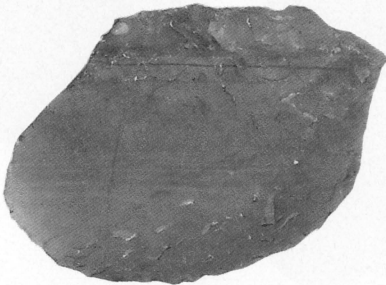
302



305



304



303



306



307



308



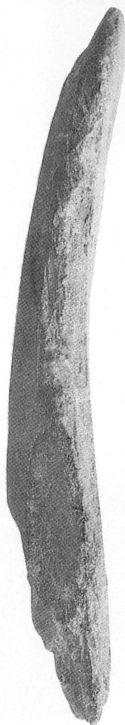
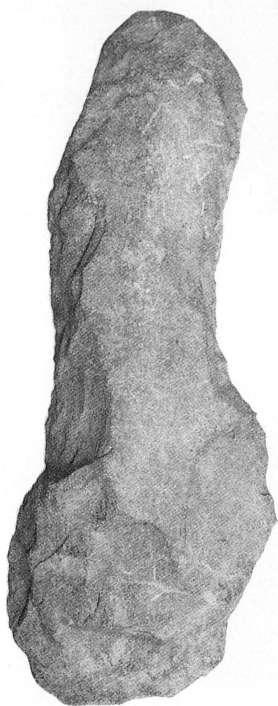
313



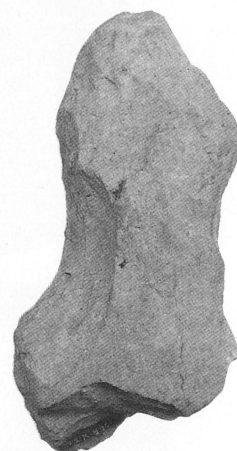
314



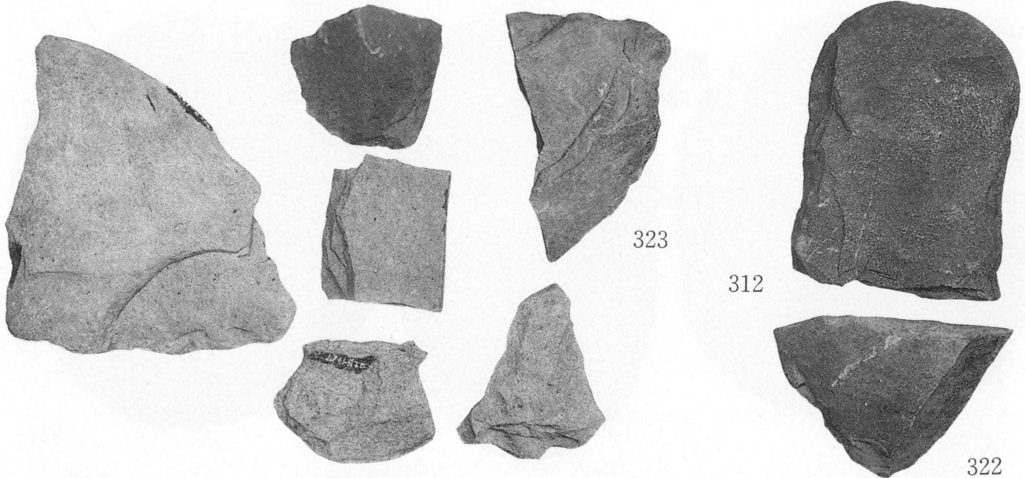
317



315



316

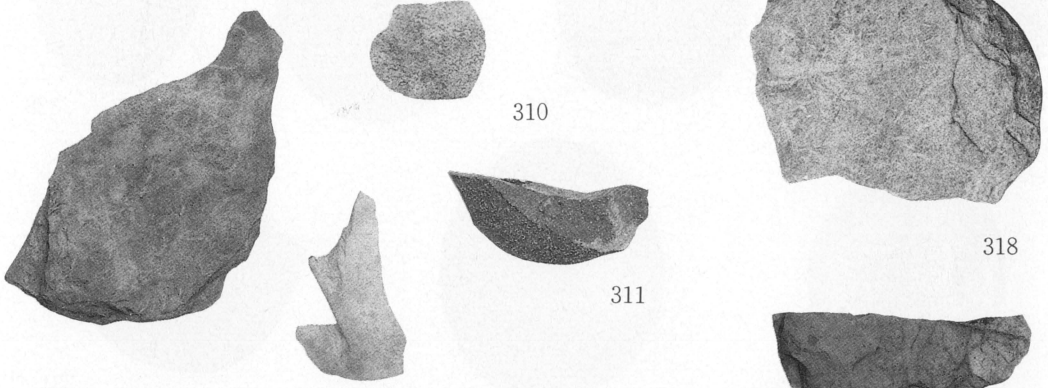


320

323

312

322



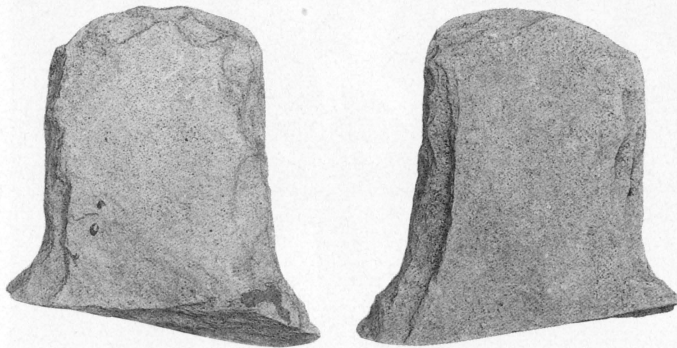
310

318

311

309

319



321



324



325



326



327



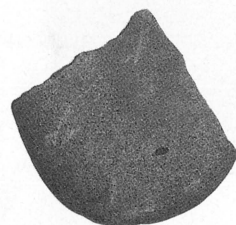
328



329



330



331



前谷B遺跡発掘作業員のみなさん

あ と が き

確認調査に引き続いて3ヶ月間の松山町での調査だった。調査期間中は晴れた日が続き、乾燥した毎日であった。縄文人・弥生人が踏みしめたであろう地面にもひび割れが入り、動力噴霧器を使っての水まきを連日やった。しかし、文明の力をつかっても地表面が湿るだけで、たちまちのうちに乾燥してしまう。あれほど多量の水をまいたつもりだったが、自然には太刀打ちできない。だが、ほんの通り雨でもひとたび雨が降り出すと、地面から湯気をたちのぼらせながらグングン雨水を吸収してゆく。自然の驚異と偉大さを同時に知ることができた。

南国といえども冬の松山町は寒く、風は冷たく強い。テントの周りには竹で垣根を、遺物集中区には防風ネットを張り巡らして自然から身を護った。縄文人・弥生人達は快適な生活環境を維持するためにどのような知恵を絞ったのだろうか・・・？ 少しでも当時の人々の生活に迫ってゆけたら・・・と想う。

発掘作業に携わった方々

井手節子・上ノ園よし子・大野弘・大野洋一・荻迫フジ・荻ノ迫キミエ・小名川ツギ・金子ツヤ子・金子ヒモ・川上輝沙江・草ノ瀬ひろ子・草ノ瀬文子・坂元優子・白坂美恵子・滝川エミ・谷山ヒサ子・永田ハル・長友淳・新保光治・日高国夫・日高潤子・古郡フヂ・本田ツヤ子・村田セツエ・村田ユミ子・村中忠・村中敏子・森春子・山口カツ子・山口キミノ・山元和子

整理作業に携わった方々

行船順子・春山まり子・竹下淳子・浜田幸江・相良政子・下島節子・松本雅子

松山町埋蔵文化財調査報告書(4)

前 谷 B 遺 跡

発行日 1990年3月

発 行 松山町教育委員会

〒899-76 曾於郡松山町新橋268

印 刷 (有)志布志新生社印刷

曾於郡志布志町東町3223-7